

村松治郎とそのファミリー：日豪を繋いだ家族の肖像

Jiro Muramats and his Family:

Portraits of the Family Connecting Japan and Australia



[表紙写真 / cover photograph]

村松作太郎の墓前の村上安之助と村松スミコ。撮影は村上安吉（1922年6月）（木下家所蔵） / Yasunosuke Murakami and Sumiko Muramatsu in front of Sakutarō's grave. Photograph taken by Yasukichi Murakami (June 1922) (Courtesy of the Kinoshita family)

まえがき

本書は、基盤研究 (B) 「隣接国家の「辺境」から見る海境—豪北部海域の領域化と境域のダイナミズム」(研究代表者：鎌田真弓 課題番号 17H02241 2017-2019 年度) での共同研究を踏襲するもので、その研究成果の一部である『村松治郎 (1878-1943) : オーストラリアに生きた日本人ビジネスマン』(2020 年) の姉妹編である。当該研究の過程で得た写真は高い史料価値があると考え、冊子として編集して公開をすることにした。したがって本書の解説は、鎌田真弓・田村恵子・永田由利子・松本博之・村上雄一の共同研究が基盤となっていることを明記しておきたい。

当該共同研究では、鎌田は村松家のオーストラリアでの足跡と村松商会の展開の過程を明らかにするために、オーストラリアの公文書館で所蔵されている村松関連の記録のリストを作成して精査するとともに、松本と共同で日本国内の史資料を探索した。加えて松本は、西オーストラリア州立図書館に保管されていた村松治郎の「日記」を精査して、1920 年の村松の帰国時の動向から治郎と日本との関係を読み解いた。田村は、ザビエル・カレッジのアーカイブスの記録とカラサ市立図書館所蔵の村松商会の史資料などから、青年期の治郎とその後のコサックでの村松商会の経営活動を明らかにした。村上は豪国立公文書館と西オーストラリア州公文書館の史料を中心に、コサックにおける村松の真珠貝事業の展開を考察した。永田は太平洋戦争中の日本人・日系人の収容記録を基に、村松治郎と妻ハツの強制収容の経緯と収容所での生活および解放後のハツの生活を描き出した。さらに、村松の選挙人名簿への登録をめぐる最高裁判所訴訟に関しては、マクシーン・マッカーサーに寄稿をお願いした。

上記の報告書『村松治郎 (1878-1943)』は名古屋商科大学情報センターのウェブページ上で公開されているので (<https://www.nucba.ac.jp/university/library/discussion-paper/NUCB-K-22101.html>) ご覧いただければ幸いである。また、同じく共同研究の成果であり、本書でしばしば言及される『藤田健児スケッチブック』も、同センターのウェブページで公開しているので (<https://www.nucba.ac.jp/university/library/discussion-paper/NUCB-K-21102.html>) 併せてご参照いただきたい。

Preface

This publication is the result of the continuation of the joint research conducted under the Grant-in-Aid for Scientific Research (B) ‘Dynamism of the Marine Frontier: Territorialization of Australia's Northern Waters and Subsistence Tactics of the People in the Border Regions’ (Principal Investigator: Mayumi Kamada, Project No. 17H02241, 2017-2019). It is a sister volume to *Jiro Muramats (1878-1943): A Japanese Businessman in Australia*, which is also a part of the above research findings. The photographs obtained during the research have high archival value, and therefore decided to compile them into a booklet to be made available to the public with the consent of the descendants of the Muramatsu families. The contributors to this volume are Mayumi Kamada, Hiroyuki Matsumoto, Yuichi Murakami, Yuriko Nagata, and Keiko Tamura.

In this joint research, Kamada compiled a list of archival records relating to Muramats held by archives in Australia. By examining these documents it was possible to trace the movements and activities of the Muramats family in Australia as well as revealing the developmental processes of J & T Muramats, the company. The search for historical materials in Japan was done in collaboration with Matsumoto. In addition, Matsumoto closely examined Jiro Muramats' ‘diary’ housed at the State Library of Western Australia, in order to draw out the relationship between Jiro and Japan based on his movements upon his return to Japan in 1920. Tamura used records from the Xavier College archives as well as those from the Karratha Municipal Library to reveal Jiro's life in his youth as well as his management activities of J & T Muramats in Cossack. Murakami examined the development of Muramats' pearling business in Cossack, focusing on historical documents from the Australian National Archives and the State Records Office of Western Australia. Based on records of Japanese and Japanese-Australian internment during the Pacific War, Nagata depicts the story of Jiro and his wife Hatsu in the internment camp, and Hatsu's life after the end of her incarceration. Maxine McArthur was invited to contribute to the report on the Supreme Court case regarding Muramats' registration on the electoral roll.

The following reports are available on the Library of Nagoya University of Commerce and Business website:

Jiro Muramats (1878-1943) : A Japanese Businessman in Australia (<https://www.nucba.ac.jp/university/library/discussion-paper/NUCB-K-22101.html>).

Kenji Fujita's Sketchbook: Memories of Cossack, Western Australia (1925-1938) (<https://www.nucba.ac.jp/university/library/discussion-paper/NUCB-K-21102.html>).

目次 / Table of Contents

I 序 / Introduction

村松治郎とそのファミリー：日豪を繋いだ家族の肖像

Jiro Muramats and his family: portraits of the family connecting Japan and Australia

参考文献 / References

II 写真集 / Photo Albums

1. コサック (西オーストラリア)

Cossack (Western Australia)

2. 日本の故郷：神戸と藤枝 (静岡)

Homes in Japan: Kobe and Fujieda (Shizuoka)

3. ダーウィン

Darwin

4. 今富美子

Haruko IMATOMI

III 付録 / Appendix

1. 村松家系図

Muramatsu Family Genealogy

2. 地図 / Maps

Map 1 オーストラリア西部 / Western Australia

Map 2 コサック周辺 / Cossack and vicinity

Map 3 日本 / Japan

あとがき / Postscript

|

序 / Introduction

村松治郎とそのファミリー：日豪を繋いだ家族の肖像

1. コサック（西オーストラリア）での出会い

本書は、村松治郎（1878-1943）と弟の三郎（1884-1942）の親族の元に残されていた写真を中心に編集したものである。村松治郎は、20世紀初頭に村松商会（J & T Muramats）を立ち上げ、コサック（Cossack）を拠点として商店を経営するとともに、真珠貝事業を成功させた人物である。父の作太郎がコサックで開いた商店を引き継ぎ、多角経営によって村松商会を発展させた。顧客層は地元の日本人コミュニティだけでなく、内陸部の牧場経営者などピルバラ（Pilbara）地域に広がり、真珠貝やアスベストの輸出も手掛けていた。白豪主義政策¹の時代のオーストラリアで、日本人でありながらヨーロッパ系オーストラリア人と対等に渡り合った治郎は、極めて稀有な存在である。英国臣民として帰化²していた治郎は、オーストラリア人企業家としての成功を志していた。本書では写真を基にして、オーストラリアの企業家として生きた村松治郎の人生と、治郎の成功を支えた家族との絆を描いてみたい。

私たちが村松治郎の調査を始めたきっかけは、共同研究として手掛けていた藤田健児のスケッチブックを編集するための現地調査であった³。紀南出身の藤田は、1925年から1938年にかけて村松商会の採貝船で働いていて、当時のコサックや、採貝船での作業の様子や、漁場の風景や海の生物など、水彩絵具で描かれた素晴らしいスケッチを多数残した（松本他編 2021）。

「コサック」と聞いてその場所を地図上で示せる人は、オーストラリア研究者であっても皆無に近い。1950年代後半に廃村となり、現在は西オーストラリア州の史跡として登録されている。また、ピルバラ地域も、大半のオーストラリア人にとっても日常生活とはかけ離れた遠い場所で、鉄鉱石の産地としての認識があるぐらいだろうか。道路は地平線に向かって真っ直ぐ伸びていて、とにかく広い。日差しは強く、体中から水分が奪われていくのがわかる。二度の現地調査⁴は乾季に行ったので、猛烈なサイクロンが襲う時期の海沿いでの暮らしは想像が難しい。100年以上も前に当地に渡った日本人は、どのように暮らしたのだろうか。

コサックは史跡としての修復と保存が始まっているが、2017年の調査時のコサックでの歴史解説は、19世紀後半のヨーロッパ系定住者に関する記述が中心であった。博物館として改修されていた旧裁判所内の展示でも、先住民やアジア系住民への言及があったものの、十分な調査が行われているとは言い難かった。その博物館の展示のアジア系住民の歴史を説明したパネルに使われていたのが、村松治郎の父、村松作太郎（1846-1898）の墓の写真である。ところがそのパネルの説明には、作太郎当人や、コサックの日本人墓地に眠る日本人の真珠貝ダイバーたちの

¹ 英国系の「白人」による社会を創り出すために、アジア人など「有色」人種を差別した政策で、有色人の排斥や入国に際する厳しい管理を行なった人種差別的な政策であった。19世紀後半の植民地期から1970年代まで続いた。

² 1901年に6つの英国植民地が1つになって「オーストラリア連邦」を結成したが、その後もイギリス帝国にとどまり、国民も英国臣民(British subject)の身分のままであった。1948年にオーストラリアの「国籍法」が成立した後も「英国臣民」身分は従来通り維持されて、完全に廃止されたのは1984年である。なお連邦結成前は、6つの植民地がそれぞれ憲法や議会を持つ自治植民地で、英国臣民への帰化申請はそれぞれの植民地で可能であった。オーストラリアの歴史に関しては、『物語オーストラリアの歴史』（竹田・永野 2023）がコンパクトにまとまっている。

³ 2017年9月、田村恵子・村上雄一・鎌田真弓が参加した。

⁴ 二度目の調査は、2022年8月、田村恵子と鎌田真弓が行った。

記述は全く無かったのである。私たちは、19世紀後半から20世紀半ばにかけて当地で活躍した村松作太郎や村松治郎といった日本人商人や、日本人出稼ぎ労働者の足跡を明らかにする必要性を感じたとともに、日本人研究者として、オーストラリアにおける日本人移民の歴史と彼らの社会的役割について学術的な貢献をしたいと考えた。

村松治郎や村松商会 (J & T Muramats) に関する史料は、オーストラリア国立公文書館に膨大な記録ファイルが残され、西オーストラリア州立図書館や公文書館も複数のファイルを所蔵している。ところが、村松治郎に関するまとまった記述は、オーストラリアの著名人事典所収の D.C.S. シソズによる 'Jiro Muramats' (Sissons 1986) の短い紹介のみであった。2017年のコサック訪問以降、私たちは公文書館等に残る史料を精査するとともに、日本国内に残る史料の発掘に努め、研究成果を公表した (鎌田編 2020)。ここに収録した写真は、その過程で親族の方々からご提供いただいたものである。

なお本書でも、これまでの研究成果と同様に、村松「治郎」と記述する。戸籍上は「次郎」と確認されているが、旅券の下附願いの下書きや写真の裏書きなどに残る本人の記載は「治郎」であるので、明らかに本人は「治郎」と表記することを好んだと思われるからである。また「村松」の英語表記に関しては、残されている治郎の署名は全て Muramats となっているので、治郎とハツに関しては Muramats の表記を使う。三郎を含むその他の村松ファミリーに関しては Muramatsu と表記する。

2. 一枚の写真から始まった物語

私たちにとって非常に幸運だったのは、調査の過程で村松家の係累の方々にお会いすることができたことである。そのきっかけとなったのが、本書の表紙の村松作太郎の墓前で撮影された三郎の娘スミコと、当時ブルーム (Broome) に在住していた写真家村上安吉の息子の安之助の写真である。スミコの娘にあたる木下安子さんが、2016年に和歌山大学で催された村上安吉の写真展⁵で、同じ写真が木下家にも残されていることに気づき、企画展を手掛けた津田睦美さん (現関西学院大学総合政策学部教授) に連絡されたのだ。木下さんは、祖父母や母のオーストラリアとの繋がりを詳しく知りたいたいと思っておられたようで、津田さんの紹介で私たちは木下さんとお会いすることになった。

木下さんは初対面の私たちに、手元に残る多くの写真を見せてくださり、その後も村松家の系譜や三郎の旅券、ハツの手紙などを惜しみなく提供してくださった。写真や手紙を手にすることによって、オーストラリアの記録ファイルの中にあった村松治郎・ハツ (1882-1959) 夫妻や三郎・アヤ (1888-1963) 夫妻に、より具体性を伴った存在として近づくことが可能になった。特に、本人たちの写真を見た後では、公文書館に残る申請書や帳簿の数字にすら親近感を覚えるのだから不思議である。採貝船の前に立つ三郎の写真からはオーストラリアでのビジネスに挑む自負を、幼いスミコを抱いたアヤの姿にはやつれが見受けられ、コサックでの生活環境の厳しさ

⁵ 和歌山大学紀州経済史文化史研究所「村上安吉 (1880-1944) のライフストーリー—濠州から郷里の母に送った写真をとおして—」2016年6月10日-7月29日。

を感じる。1931年に撮影されたダーウィンの自宅前の治郎・ハツ夫妻の写真からは、生活にゆとりを得た二人の穏やかな表情が見てとれる。1924年に三郎一家が日本に帰国した後も、治郎はしばしば三郎にオーストラリアの様子を知らせていたのであろう、1930年代のダーウィンの街の写真も複数枚残っている。

さらに木下さんの記憶から、横浜の今富家（治郎の一人娘ハルの婚家）の所在を知ることができた。ハルの長男晋吾氏の妻とし子さんにもお会いして、今富家に残る写真や史料を見せていただいた。ここでも一枚の写真が、新たな発見をもたらしてくれた。就学のために帰国したハルの1920年以降の日本での動向である。作太郎の故郷である静岡県藤枝の写真館で撮影されたハルとハツの写真は、ハルが藤枝で養育されたことを確信させるものであった。静岡県立藤枝西高等学校（旧藤枝高等女学校）に照会したところ、ハルは同校の卒業生（1930年卒）であることが確認できた。

写真では治郎と三郎の妹たちのウタ⁶とヤスの存在が際立つ。ハルの結婚式やハツの墓前での写真には、二人の姿がある。幼くして日本に戻り大叔母（治郎の叔母）のところに寄留した姪のハルを、叔母たちも見守っていたのであろう。木下家に残る手紙や、西オーストラリア州立図書館に残る治郎の「日記」⁷からは、三郎やハツもヤスの婚家で一時期世話になったようで、頻繁な行き来が難しい時代に村松家の兄弟姉妹は親密な関係を持ち続けたことがうかがえる。

加えて今富家には、ハツが1957年に持ち帰った村松商会の2500ページを超える帳簿が残されていた。別稿で論じているが（鎌田2023、Kamada2023）、英語で書かれた元帳や出納帳は、村松商会のビジネスだけでなく、村松の元で働いた日本人出稼ぎ労働者の生活や、ピルバラ地区の社会経済史を研究する上でも大変貴重な史料である。ハツが日本に持ち帰ることがなければ、またその後70年近くも今富家で保存されなければ、失われてしまった記録である⁸。

こうした貴重な史料と研究成果をもとに、本稿では村松治郎の家族との絆に焦点をあてて、治郎の人生と彼のオーストラリアでのビジネスが成功に導かれた過程を描いてみたい。

3. オーストラリアの真珠貝漁と日本人

ここでは本題に入る前に、村松が手掛けた真珠貝漁について簡単に説明しておきたい。真珠貝漁と聞くと天然真珠の採取と誤解されることが多いのだが、漁の目的はボタンの材料となる貝殻である。オーストラリアで採取されたのは主に白蝶貝（*Pinctada maxima*）で、熱帯太平洋地域の海底に埋もれて生息する22cmぐらいになる大型の2枚貝である。

オーストラリアでの真珠貝漁は、1851年に西オーストラリアのシャーク湾で採貝ライセンスが付与されたのが始まりで、その後南回帰線以北の暖かい水域で白蝶貝の広大な生息地が発見

⁶ 戸籍名は「うたぢ」である。

⁷ 西オーストラリア州立図書館に残る治郎の「日記」は、1920年に治郎が一時帰国した際に書かれた覚え書きである。1891年から1906年までの出来事をまとめ直したと思われる年譜記録や村松が所有する船隻数、帰国の際の土産物とその贈呈先、銭別や貰った人たち、旅券下附願いの下書きなどが書き込まれている。[State Library of Western Australia: ACC 3700A]

⁸ 帳簿はデジタル化した画像とともに、西オーストラリア州立図書館に寄贈した。以下のウェブサイトでご覧できる。
(<https://catalogue.slwa.wa.gov.au/record=b1745730-S7>)

され、1860年以降に豪北部の海域で発展した。インド洋からティモール海、アラフラ海、珊瑚海にかけての海域で漁が行われ、その拠点となったのが、ブルーム、ダーウィン、木曜島である。洗浄された貝殻はヨーロッパやアメリカに輸出されて、貝ボタンとして加工された。1920年代にはオーストラリアの生産量は世界の85%を占めていた。

真珠貝漁は海底に生息する真珠貝を拾い上げるというもので、当初は水深の浅い海域での素潜りで採取されていたが、漁場の枯渇とともに水深が深い海域での潜水具をつけた漁へと変わっていった。1920年代になると潜水夫に空気を送るポンプも手動からモーター付きのコンプレッサー型へと進化し、その後採貝船（ラガーと呼ばれた）にはエンジンが取り付けられて、漁場は水深10~30メートルの海域から70メートル近くまで達することもあった。

海底での採貝作業は危険を伴う。潮の流れは漁場や水深や日時によって異なるし、海底は平坦ではない。砂場や段差のある岩場もあるし、岩や珊瑚などによって送気パイプが破損する場合もある。また、水深が深ければ潜水病の危険が増す。サイクロンがオーストラリア北部を襲う夏は休漁期となるものの、サイクロンの到来が予測できずに多数の死者を出した海難事故も発生した。

採貝船の乗組員としてオーストラリアの真珠貝産業を支えたのは、日本人やマレー人、フィリピン人、クバン人⁹などのアジア系契約労働者だ。加えて先住民やニューギニア島南部出身のパプア人も働いていた。特に19世紀末頃からは、日本からの出稼ぎ労働者が産業を支えたと言っても過言ではない。ボースン（船長あるいは甲板長）や機関士、潜水夫や命綱を預かるテンドーは大半が日本人だった。漁場の位置や海底の様子や作業手順などは船上と水中での体験を通して学習される。しかも、漁期は狭い船上で数週間も寝食をともにするので、意思の疎通が図りやすく信頼関係が築きやすい、地縁・血縁をベースとした職能集団が形成された。最大の採取量を誇ったブルームでは、ピーク時の1917年には1,400人以上の日本人が働き、その8割近くは紀南の出身者であった（鎌田 2016）。上述の藤田健児も和歌山県東牟婁郡古座川の出身である。

後述するように、オーストラリアは19世紀後半から白豪主義政策を導入し、日本人を含むアジア人労働者の大半は年季契約で、定住や帰化を許された日本人は数少ない。そのような中で、帰化英国臣民で、真珠貝業者として成功を取めた村松治郎は極めて稀有な存在なのだが、これまであまり知られてこなかった。その一つの理由は、太平洋戦争によって日本人・日系人は強制収容された後に強制送還となり、一時期オーストラリアでは日系人コミュニティが立ち消えてしまったことにある。治郎も収容中に没して村松商会はなくなり、歴史に埋もれてしまった。さらに、プラスチックの普及とともに貝ボタンの需要は激減し、真珠貝漁そのものが衰退した。1950年代後半にはオーストラリアで真珠養殖が始まって、真珠貝漁は養殖用母貝の採取が主となるとともに、新たな参入者の元で真珠養殖をめぐる日豪関係が再構築された（田村 2016）。

⁹ 当時の統計に使われているエスニック集団名には明確な定義があったわけではない。クバン人はオーストラリアの真珠貝漁労働者の分類で使われたエスニック集団名で、ティモール島を中心にインドネシア東部の島々の出身者である。他方、マレー人は主にイギリス植民地のマレー半島の出身者の総称である。ジャワ島で募集された人々を指すジャワ人という集団名も、一時期統計で使われている。

4. 日豪を繋ぐ：移民史からみる村松ファミリー

19世紀末から20世紀にかけて、日本は南北アメリカや東南アジアへと多くの移民を送り出し、移民史研究には膨大な蓄積がある。多くの場合移民は国境を越えた集団として認識されて、よほど著名な人物でない限り、移住者個々人の足跡を辿ることは容易ではない。5年間にわたる研究で、私たちは村松治郎の人物像や村松商会の事業内容を明らかにしてきた（鎌田編 2020；Kamada 2023）。

筆者が村松治郎に注目するのは、一つには、白豪主義政策の下で、日本人でありながら個人経営者としてオーストラリアでの事業を成功させただけでなく、コサックやピルバラ地域の経済活動を維持する上で重要な役割を果たしたからである。治郎はオーストラリアに骨を埋めるつもりで事業を展開していたと、筆者は確信している。二つ目は、日本人でありつつ英国臣民として現地に根をおろした企業家を目指した、治郎の生き方に興味を持ったからである。そうした治郎の選択は、兄弟姉妹や父の生家の人たちを含む家族との強い絆があったからこそ可能だった。

治郎は次男であったから、当時の日本人男性に課せられたイエを守り発展させるという責任から解放されていたが、長男であった父の作太郎や兄の常太郎は、異なる生き方を迫られていたかもしれない。移民をするという選択は、当人の希望だけが意思決定の判断基準になっているものではない。特にイエの存続が重視された20世紀前半の日本社会では、イエに対する責任は今日とは比較にならない重みを持っていた。村松治郎とファミリーの関係性と彼らの日豪間の移動を通して、移民の動態が人と人の関係性から生まれる社会的行為であることを提示してみたい。

以下、村松家とオーストラリアの繋がりを概観する。

4-1. 村松作太郎

1888年の村松作太郎の渡豪は、明治以降の日本の移民史の中では極めて早い時期にあたる。作太郎は、1890年代に南方と呼ばれたシンガポール・インドネシア・タイ・フィリピンやオーストラリアへと渡っていった多くの小商人の一人である。シドニーやメルボルンといった南東部の主要都市に支所を開いた大企業の駐在員や、外交官のような「エリート」ではなかった。例えば、同時期に渡豪して真珠貝事業で成功した人物として佐藤虎次郎¹⁰が知られるが、佐藤は米国留学経験を持ち、外務大臣の囑託を受けた移民の実態調査が木曜島での事業の契機となっていて、事業展開をするための強力なバックグラウンドを持っていた。明治初期から中期にかけて、日本人の南方への進出の端緒を開き、現地への日本人の吸引力となった作太郎のような「名もなき」小商人の役割や、彼らが築いたネットワークの様態は、移民史研究の中でもっと注目されてよい。

作太郎は静岡県藤枝の出身で、1880年代に神戸を拠点として日本からの出稼ぎ労働者の仲介をしていた。日本の外交史料館には、村松作太郎が武田長兵衛とともに1884年に、神戸に出張

¹⁰ 和歌山県ふるさとアーカイブウェブサイト「紀の国の先人たち、オーストラリア移民、佐藤虎次郎」、(<https://wave.pref.wakayama.lg.jp/bunka-archive/senjin/satoutora.html>) 2023年11月11日閲覧

所があったフィーロン・ロー商会に、オーストラリアの木曜島向けの出稼ぎ者を紹介したことを示す記録が残っている。この時の雇い入れでは69名が木曜島に向けて出発しており、明治政府が公認した最初の海外移民であったジョン・ミラーとの契約に続く二番目の出稼ぎグループであった¹¹。したがって作太郎が、明治政府下での海外出稼ぎ移民の開始期から斡旋に関わっており、1880年代半ばまでにはオーストラリアとの何らかの繋がりを持っていたことは確かなのだが、作太郎が渡豪を決めた理由や、最終的にコサックに商店を構えた経緯はわかっていない。

作太郎が到着した1890年代のコサックは、西オーストラリア植民地北西部の重要な港で、町の繁栄はピークにあった。既に複数の日本人が住んでいて、作太郎はそこにビジネスチャンスを見出したことは十分に考えられる。その後日本人の数は急激に増えていき、1897年10月には「呵喏（コーセキ＝コサック）同盟会」が組織され、作太郎は初代の取締役兼出納役になった。設立当初の呵喏同盟会はローバン(Roeburne)¹²にも支部を持ち、取締役には作太郎に加えて得丸新五郎や西岡高蔵の名前もある。得丸新五郎は後に弟の亀治郎とともに「得丸兄弟社(Tokumaru Bros.)」を設立し、ブルームを拠点としてパースやメルボルンやシンガポールに事業を拡大した人物である。また西岡高蔵はオーストラリアでは比較的知られている村上安吉¹³との関係が深い人物で、コサックで妻のエキとともに商店を経営していた。高蔵の死後、エキは商店で働いていた安吉と結婚、安吉はエキから写真撮影の技術を学んで、ブルームやダーウィンで写真館を営み、多くの写真を残した。

作太郎はコサックに商店を構えた後も度々神戸との往來をしている。日本人向けの商品の仕入れとともに、コサックの真珠貝漁で働く日本人契約労働者を手配していたのかもしれない。作太郎には妻サダとの間に、常太郎・治郎・三郎・ウタ・ヤスの5人の子どもがあった。作太郎は長男で、本来ならば藤枝のイエを継ぐ立場にあったのだが、神戸に居を構えていたために、長男の常太郎は神戸に置き、次男の治郎を藤枝に預けていたようだ。

藤枝の村松家は庄屋筋の農家ではあったが、作太郎は祖父の商売の才能と情熱を受け継いだ商人だった。村松家の系図によれば、作太郎の祖父の彦八（彦兵衛）は、商人に雇われて商売に習熟し、暖簾分けで独り立ちして米を扱ひ、功績を立てた人物である。彦八は大阪の堂島で没したが、息子の彦六（作太郎の父）は藤枝でイエを守った。作太郎もまた、神戸やコサックという新境地で商売を切り拓いたのだ。作太郎は1898年2月13日に51歳でローバンの病院で亡くなりコサックに埋葬された。コサックの日本人墓地でひときわ目立つのが作太郎の墓石である。

¹¹ 真珠貝事業主だったジョン・ミラー (J. Miller) は日本人を雇い入れるために横浜を訪れ、増田万吉を周旋人として労働者を募集した。その結果37名が契約し、1883年にミラーが引率して、木曜島の南のプリンス・オブ・ウェールズ島に到着した (久原 1978)。また、日本の移民史に関しては『邦人海外発展史』(入江 1981: 47-53) を参照。

¹² コサックから15キロほど内陸に入った町で、この地域で牧場開発に伴って1866年に西オーストラリア北西部の最初の町として誕生した。1887年にコサックとともに町制が施行され、19世紀後半のコサックでの真珠貝漁の発展やピルバラ地域での金や銅鉱山開発に伴い、この地域でのハブ的な役割を果たした。2011年のローバン地域の人口は約1,000人である。[‘Western Australian colonial census 1848-1901 raw data’, The University of Western Australia (<https://research-repository.uwa.edu.au/en/datasets/western-australian-colonial-census-1848-1901-raw-data>), 2023年2月27日閲覧。]

¹³ シドニーを拠点に映像作品の制作を行っている金森マユによる村上安吉を描いた *Yasukichi Murakami - Through A Distant Lens* が、シドニーをはじめとしてアデレードやダーウィンで上演され、好評を博した。金森はブログで村上安吉に関する調査の成果も公表している。[‘About Murakami’ (<https://aboutmurakami.wordpress.com/about/>) 2023年2月15日閲覧。]

4-2. 作太郎の三人の息子たち：常太郎・治郎・三郎

作太郎の亡き後は、兄弟姉妹との親密な関係がオーストラリアの治郎を支えたと言っても過言ではない。また治郎は、神戸の家族を経済的に支えた。作太郎の息子たちは、日本とオーストラリアを行き来して、家族として日本のイエを継承するとともにオーストラリアでのビジネスの成功を目指したのである。

常太郎

長男の常太郎(1869-1921)は1893年5月に神戸を出港、ブルームに2年ほど滞在し、1895年3月にコサックに到着した。当時はブルームでも商店経営を行っていたのだが、山本亀太郎や三瀬豊三郎、山崎栄治郎など、愛媛県出身の商人が次々と到着して商店経営を始めており、作太郎はコサックに拠点を置くことにしたようだ。

結局常太郎はコサックに永く留まらず、日本に帰国した。父がいない神戸のイエを守るためだったのかもしれないし、藤枝の作太郎の生家のことがあったのかもしれない。作太郎の死去に伴って常太郎は一時期コサックに戻ったが、治郎の遺産相続と村松商会(J & T Muramats)の立ち上げを見届けて、日本に帰国している。会社名(J & T Muramats)のJは治郎(Jiro)、Tは常太郎(Tsunetaro)の頭文字で、治郎のイニシャルが先に置かれているように、当初から治郎が主に経営を担うことを意図していたことがわかる。

親族の手元に残る記録によれば、作太郎の死後は常太郎が藤枝の村松家の家督を継いだものの、実質的にイエを継いだのは作太郎の妹のコウで、夫とともに村松姓を名乗った。帰国した常太郎は、1902年に神戸出身のヒデと結婚して神戸に居住した。1906年から1907年にかけて、妹たちの結婚と三郎の渡米、母サダの死没が続き、その後は一時期藤枝に住んだ後に東京に転居して、1921年に巣鴨(東京)で没している。子どもに恵まれなかった藤枝のコウ夫妻は、常太郎の次男の久次郎を養子として迎え、イエを継承した。

治郎

他方、治郎は常太郎の渡豪の半年後の1893年11月に、父の作太郎とともに神戸を出立、ブルームに5ヶ月ほど滞在してからコサックに到着した。当時治郎は15歳である。常太郎はブルームに居たので、治郎をコサックの日本人に任せたのか、作太郎は治郎到着の直後から6ヶ月ほど日本に戻ってコサックを留守にしている。コサック到着の翌年の1895年4月、常太郎のコサック到着(1895年3月)直後に、治郎はメルボルンのキューにある聖フランシス・ザビエル・カレッジに入学した。当時の外地の日本人商人は、子弟はできるだけ日本に戻して教育したものだが、敢えて治郎をコサックに呼び寄せ、その後ザビエル・カレッジに送った作太郎の行動には、オーストラリアでのビジネスの継承を望む作太郎の強い意思がうかがわれる。同時に治郎も、父の意思を継ぐことを就学前に決めていたに違いない。ザビエル・カレッジでは英語に習熟するとともに、簿記を習得し優等賞を受賞している。

作太郎は、治郎がザビエル・カレッジ在学中の1898年2月にコサックで病没した。父の病気の知らせを受けた治郎は急遽コサックに向かったが、途中で訃報が届いたため、パースで下船して作太郎の遺産相続の手続きを開始した。この時兄の常太郎は既に日本に帰国していた。さらに治郎は、連邦結成直前にヴィクトリア植民地と西オーストラリア植民地で帰化申請を行った。ザビエル・カレッジでの優秀な成績に加えて、アレグザンダー・マークス (A. Marks) 日本名誉領事の強力な後ろ盾もあって、1899年7月にヴィクトリアで英国臣民としての帰化が認められた。他方、西オーストラリアでの申請は却下された。

ザビエル・カレッジでの就学は、作太郎が望んだ通り、その後の治郎の人生の基盤を築いた。治郎には、オーストラリアの中心都市だったメルボルンで教育を受け、名家の子弟や日本の大企業の駐在員との交流をしていたという自負も芽生えたであろう。コサックに戻った治郎は、日本人相手のみの商店経営ではなく、コサックやピルバラ地域のヨーロッパ系住民を顧客とした商店経営を目指し(田村 2020)、採貝船を買い取って真珠貝漁と真珠貝輸出へと事業を拡大した。治郎もまた、曾祖父の彦八、父の作太郎のビジネスへの情熱を受け継ぎながら、ピルバラからダーウィンへと、オーストラリア北西部を舞台としたビジネスに挑戦したのである。同時に、ダーウィン転居後もコサックに村松商会の拠点を引き続きしたのは、コサックの方が多角的なビジネスが展開しやすかったのが大きな要因だが、もう一つ忘れてはならないことは、コサックは治郎にとってオーストラリアでの起点だったことである。父作太郎が眠るコサックは、父が遺した商店と同様に、治郎にとって拠り所であっただろう。しかもコサックは、治郎がハツと結婚し、一人娘のハル(美子; Marie Haru) が生まれた場所でもある。

コサックでの三郎と治郎

三男の三郎は、常太郎と15歳、治郎とは6歳、歳が離れていて、作太郎亡き後は兄たちの庇護を受けて成長した。三郎は高等教育機関に進学し、関西学院専門学校高等学部商科(現在の関西学院大学経済学部の前身)を卒業している。三郎が20歳の時(1904年)に、妹のウタとヤスとともに撮った写真からは、良家の子弟らしい雰囲気が漂う。また、1907年にシアトルの日本領事館で発行された三郎の旅券が残っているので、専門学校高等学部卒業後にアメリカに遊学したのであろう。遺産相続に際しての約束通り、治郎からの多額の送金があったに違いない。

三郎は、1913年と1917年の二度渡豪し、コサックで村松商会の経営に携わっている。一度目の渡豪では、ブルームや金鉱のあったカルグーリ(Kalgoorlie)に出かけて、西オーストラリア州での見聞を広めた。また、豪国立公文書館に残る記録では、三郎は大阪にあるカナケ会社にも勤めているとあるのだが、真偽はわからない。1915年に一旦帰国して結婚した後に、1917年に妻アヤ(絢子)を伴ってコサックに戻り、翌年一人娘のスミコ(すみ子; Joyce Sumi) が生まれた。三郎一家がコサックに滞在している間に、治郎はハルを就学のために日本に戻し、作太郎の妹にあたる叔母のコウに養育を託した。治郎も1920年4月から12月まで帰国している。信頼できる三郎がいたからこそ、治郎は店を任せて8ヶ月もコサックを留守にできたのだ。

治郎は、日本への帰国途上のシンガポールで商談を含めた様々な商用をこなし、日本で配るた

めの土産物を購入した。治郎にとっては、作太郎の死の直後の 1899 年の帰国以来、20 年ぶりの帰国である。先にハルトともに帰国していた妻のハツと 11 月に離日するまでの 5 ヶ月余りは、親族や関係者を訪問するために日本国内を広域にわたって旅行している。コサックの日本人からの預かり金をそれぞれの家族に届け、旧知の人たちに挨拶をし、常太郎や妹たちとその家族に会い、東京では森岡移民合資会社で雇用契約も交わしている。中でも滞日期間の一大イベントは、藤枝の親族や近隣の人たちへの挨拶まわりであった。親族や近隣の人たちへの土産物あるいは返礼品や饞別の詳細なリストを治郎は残している（松本 2020）。藤枝は、作太郎の生家があり治郎が育った場所で、これからハルの日本の故郷になる町だったからである。

1920 年末にコサックに戻った治郎は、事業の拡大に向けて精力的に働いた。白豪主義政策をとるオーストラリア政府は、アジア人の治郎が影響力を持つ実業家となることを望まなかったために、治郎は 10 隻を超える採貝船の所有を許されなかったが、資金繰りに窮した業者の船を運用したり、同業者の船を預かったりして、真珠貝事業を拡大し成功に導いた。商店経営においても長期にわたる掛売りの取引を続けて、地元の信頼を得たのである(Kamada 2023)。

コサックに定住して治郎とともにコサックでの事業を行うかに見えた三郎は、1924 年、娘のスミコの就学を機に神戸に戻った。三郎は、1921 年頃にアヤとともに永住の可能性を探っていて、地元住民有志による請願書まで出されたのだが、連邦政府に却下されている。日本で女学校まで修了したアヤにとっては、コサックでの生活は厳しすぎたのかもしれないし、三郎はオーストラリアでの体験をもとに神戸で新たな事業を始めようとしたのかもしれない。いずれにしても帰国後の三郎は、神戸にあつて村松商会をサポートした。帳簿には、治郎から三郎への電信の支払いや、出稼ぎ労働者への手配の費用や渡豪する出稼ぎ者の神戸での宿泊費用などの三郎への送金が記録されている。

三郎の親族の元には、治郎が送った写真やハツの手紙が残されているので、帰国後も治郎と三郎一家は親密な関係を保っていたことがわかる。太平洋戦争が勃発してオーストラリアで収容された日本人の名前が新聞に掲載された時、村松三郎の名前で陸軍省内の俘虜情報局に問い合わせた手紙が日本のアジア歴史史料センターに残されている。この時三郎は病床にあり、手紙は娘のスミコの代筆によるもので、三郎は手紙が出された直後に没した。それから 1 年を経ずして、1943 年 1 月 7 日、タツラ収容所に収容されていた治郎もこの世を去った。

作太郎から治郎へと受け継がれ、治郎の生涯をかけて築き上げた事業は、太平洋戦争と強制収容で潰れてしまったのである。けれども治郎も三郎も、最後まで作太郎の遺志は守り続けた。治郎はダーウィンへの転居後もコサックを毎年訪れていたし、三郎やアヤが眠る神戸の村松家の墓地には、作太郎とサダの戒名が刻まれた墓誌が建てられている。他方、長男の常太郎は、神戸と藤枝のイエを守る責任を果たした。

4-3. 村松家の女性たち

治郎の妻ハツも三郎の妻アヤも、村松商会のビジネスの舞台には登場しない。しかし、家族の日々の生活は、ハツやアヤによって支えられていた。その上、彼女たちは幼子を抱えていたので

ある。

20世紀に入ったコサックの町は衰退し、経済的な活力も失われていった。1904年には外海に近いサムソン岬 (Point Samson)に新しい栈橋が建設されたために、コサックの主要港としての機能は終了し、内陸部にあるローバンの町とコサックを繋いだ軽便鉄道も廃止された。1910年には町制機能を失っていて、郵便局や学校や教会なども閉鎖された。村松商会と村松が運用する採貝船には常時100人ぐらい（主に日本人とクパン人）が働き、商店の関係者や船大工なども含めれば、村松商会の関係者がコサックの経済を回していたといえる。治郎が事業の多角化に乗り出したのは、コサック周辺の住民のみを顧客とした商店では、経営が成り立たなかったからである。同時に、村松商会なしでは、コサックの経済活動は持続できなかつたといえる。

このようなコサックで、ハツやアヤは、どのように暮らしたのだろうか。日用品や食品は村松商店が取り扱っていたし雑役夫も雇われていたとはいえ、日常の生活を維持するだけで精一杯だっただろう。その上コサックでは家族で暮らしている人たちは僅かで、女性の人口は極めて小さく、話し相手となる友人がいたとも思えない。村松の採貝船の乗組員を中心に日本人は暮らしていたが、男性の出稼ぎの労働者と船主の妻が親しく会話をすることは考えられない。しかも漁期（4月から9月）は乗組員は船上で生活をしているので、年間の半分はコサックは閑散としていた。

治郎の妻となった野口ハツは長崎の出身で、オーストラリアの記録には1895年にコサックに到着とある。ハツが13歳の時である。1905年に治郎と結婚、日本での入籍は1910年で、1913年にハルが生まれた。ハツにとってみれば、コサックは故郷ともいえる。乾季のコサックの海は穏やかだし、日差しは強いが過ごしやすい。二度目の調査時に遭遇した日の出は、インド洋から上がる太陽が空を群青色からオレンジ色へと染め、数キロ先まで潮が引いたハーディング川河口の大小の砂州と水面に反射する光は刻々と色を変えて、息を呑む美しさだった。乾季の満月の夜にだけ見られる「月への階段」も幻想的だった。こうした瞬間にはハツもささやかな感動を覚えたのではと、共に調査をした田村と語り合った。

三郎の結婚が決まった時は、ハツは新妻アヤの到着を心待ちにしたらう。他方、アヤにとってはコサックは過酷な場所だった。アヤは1888年播磨生まれで兵庫県豊岡の女学校を卒業しており、コサックでは流暢な英語を話していたという。気候も人間関係も日本とは全く異なる環境での生活や出産や育児は、いくら三郎やハツの支えがあったとしても、不安に満ちたものであったらう。コサックのアヤの写真は、結婚前のふっくらとした面影が消えて心なしかやつれて見える。コサックでの生活が辛いものだったからか、アヤは家族にオーストラリアでの生活のことを語らなかつた。

日本の妹たちは婚家にあっても、兄たちの帰国時に寄留先を提供したり、オーストラリア生まれの姪たちの相談役になったりして、兄たちの家族を支えた。ウタとヤスは残された記録や写真にしばしば登場する。親族とのインタビューでも、治郎や三郎の家族から慕われていたと、二人の名前が上がった。三郎の孫の木下安子さんの名前は、母スミコの叔母にあたるヤスにあやかって名付けられたのだそう。治郎が「オーストラリア人/英国臣民」としてのアイデンティティ

を確かなものにしてオーストラリアに定着し得たのは、逆説的ではあるが、彼を支える親族が日本にいたからだと考える。

ウタは大阪の医者の子島家へ、ヤスは東京の加藤家へと、裕福な良家に嫁いだ。三郎がコサックから一時帰国した際は、加藤家に寄留していたことを示す手紙が残っている。また、ハルの就学のための帰国の際も、ハツとハルは加藤家に数ヶ月間世話になったようだ。渡豪後初めての帰国で訪れる藤枝の婚家や親族は、ハツにとっては気遣いが大きかったのだろう。また同い年ぐらいのハルのいとこたちもいた。治郎の帰国を記した「日記」には、治郎がシンガポールで両家のために購入した高価な土産物が記録されている。特に加藤家は別格の扱いで、当主の加藤氏やヤスや母親や子どもたちばかりか、下女三人と下働きの人間にも金子が渡されている(松本 2020)。祖母の年齢にあたる大叔母に養育されていたハルにとっても、父と親しい二人の叔母たちは良き相談相手になったのではないか。6歳のハルが藤枝に到着した時、大叔母の歳は56歳だった。東京の三越写真館で撮った写真には治郎夫妻とともにヤスが写っているし、ハルの結婚式やハツの墓前での写真にはウタとヤスの姿がある。ハルの婚約の際には加藤家の当主が父代わりになった。

コサックで生まれたハルやスミコにとっては、オーストラリアは故郷にはなり得なかった。終戦時にはハルは32歳、スミコは27歳で、戦争に翻弄されながらも、それぞれ村松家の女性らしく逞しく人生を切り拓いていった。

ハルは、女学校卒業後の1930年にダーウィンの治郎とハツの元に戻るのだが、翌年にはシドニーのローズベイ修道院の寄宿学校に入学し、その後帰国して1935年に下関出身の今富正平と結婚した。正平は三菱財閥系の東山農事¹⁴に勤務していて、結婚後間もなくハルを伴ってサンパウロに赴任した。二人の子どもたちはサンパウロ生まれである。今富家にはサンパウロでの写真が多く残されていて、写真の裏には満ち足りた生活の近況が記されている。写真の中のハルも幸せそうで、異郷での生活に物怖じした様子はない。ブラジルから帰国後は、正平は家族を残してビルマに赴任、現地召集となり1945年7月ビルマ・ペゲー県で病死した。子ども二人と残された戦後の混乱期の苦労は想像に難くないが、ハルは英語力を活かして商社に勤め、生計をたてた。勤め先では、社員に英語も教えていた。

スミコも、父三郎が病弱で戦争中に没したが、兵庫県第一女学校を修了後、神戸薬学専門学校(現神戸薬科大学の前身)に進学した。母アヤの世話をするために大学助手の仕事を辞して、家庭を築きつつ薬剤師としてのキャリアを歩んだ。

5. 白豪主義の壁への挑戦：村松商会の商店経営と真珠貝事業

父作太郎の遺志を継いだ治郎は、コサックでの村松商会の基盤を確かなものにするとともに、1906年には真珠貝事業に着手した。以降、商店経営と真珠貝事業を両輪として、事業を拡大し

¹⁴ 朝鮮半島の開発を手掛けた東山農場が前身で、1919年に岩崎久彌男爵によって設立された。海外の現地企業を買収して、台湾での製紙業、ブラジルでの商工業および農牧業、スマトラでのオイルパーム園、マレー半島でのゴム園など主に農業部門で国内外の開発に携わった。[東山農事の歴史 昭和16年 (<http://tozannoji.net/index.net/comment/>) 2023年2月2日閲覧。]

ていった。

村松商会を立ち上げた治郎は、ザビエル・カレッジで習得した簿記の技能を活かして、父の時代からの貸倒債権をリストアップすると同時に、極めて精緻な帳簿をつけて日々の取引や財務状況を管理した。戦後にハツが持ち帰ったコサックでの事業の帳簿は英語で書かれていて、取引の収支が記載された人名勘定や、二つの事業の経費帳、日々の収支が記録された出納帳、固定資産リストなど、様々なものが含まれる。残っている帳簿はコサックの事業の一部のみで、ダーウィンでの事業を含め大部分は消失したことを考えると、元帳は膨大な量だったはずである。いかに治郎が財務管理に細心の注意を払い、事業の成功に心血を注いだかがわかる (Kamada 2023)。

治郎の商店経営が特筆に値するのは、現地の日本人コミュニティのみを対象とした商店ではなく、顧客層をピルバラ地区全体に広げ、多角経営を行った点である。採貝船で働く日本人契約労働者向けの商品だけでなく、地域の住民や遠隔地に散らばる牧場主や使用人や真珠貝業者を顧客として、食料品や日用品や資材・装備を販売した。また、地元の生産者から買い入れた真珠貝や鼈甲やフカヒレなどの海産物に加えて、古金属や古銅やアスベストなどを輸出した。トラックや自動車の購入後は運送業も請負ったし、採貝船で働く日本人労働者を対象とした生命保険会社の代理店でもあった (田村 2020)。しばしば掛売損を出しながらも、顧客とは長期間に渡る取引関係を維持し、地元の住民との信頼関係を築いた。

さらに、真珠貝事業でも成功を取めた。西オーストラリア州では、1909年の時点でブルームを中心に113人の採貝船の船主がいたのだが、その中で8隻以上を所有する船主は6人のみで (Oliver 2006: 42)、10隻を所有した村松は大規模事業者だったといえる。しかも当時は、採貝船の船主は「白人」で、中にはニューサウスウェールズ州に住いながら、大規模な真珠貝事業を展開する実業家もいて、アジア人であり個人事業者であった村松は、西オーストラリア州では目立った存在であった。西オーストラリア州政府や連邦政府の高官や政治家は、アジア人である村松の影響力が拡大することを懸念し、治郎の事業に介入した。

連邦結成前の19世紀後半から、オーストラリアの各植民地は白豪主義政策をとり、「アジア系 (Asiatics) ¹⁵」が船を所有して真珠貝事業を営むことを規制していた。1901年の連邦結成後は連邦法によって、アジア人の雇用を制限し、厳しい入国管理政策が敷かれることになった。また、アジア人の帰化も禁止されたのである。

オーストラリアでのビジネスの継承を決意していた治郎は、連邦結成の直前にヴィクトリアで英国臣民としての市民権を得ていた。そのため、西オーストラリアでは1892年以降「有色外国人 (coloured aliens)」の採貝船の所有が禁止されていたにも拘らず、船を所有することができたのである。また、1912年には西オーストラリア州は「真珠貝漁法 (Pearling Act)」を成立させて「アジア系」住民の船の所有を禁止するのだが、法律が施行される以前に治郎は既に10隻の採貝船を所有していた。1912年以降はそれ以上の所有が認められず、真珠貝事業の拡大のために、治郎は白豪主義政策の壁に挑戦していくことになる。

さらに治郎は、1922年の西オーストラリア州の選挙のために選挙人登録を行うとともに、連

¹⁵ 差別的な意味合いが含まれているが、当時の法律や行政書等でも使用された。

邦選挙の選挙人登録の申請をした。しかしこの申請は却下されたため、「アジア系」であるが故に連邦選挙人登録ができないことを不服として、1923年に最高裁判所に訴えたのである(Oliver 2008: 134-135)。結果は敗訴で、西オーストラリア州の選挙人登録からも登録が削除された。治郎の1923年の訴訟は、連邦の選挙法に基づく選挙権の行使を訴えて最高裁判所の法廷に持ち込まれた初めてのケースである(Noberry and Williams 2002: 5-6)。なぜこの時期に選挙人登録を巡って治郎が行動を起こし最高裁判所まで持ち込んだのか、さらなる研究が必要だが、コサックを拠点とした治郎のビジネスは成長期を迎えていて、オーストラリア人企業家としての自負とアイデンティティが治郎に芽生えていたのではないか。

公文書館が保管する記録に目を通す中で気づくことは、連邦や州の中央政府の高官や政治家が、白豪主義の方針に基づいてアジア人排除の厳しい姿勢をとったのとは対照的に、治安判事や真珠貝漁監督官など地元の官僚は治郎に好意的だったことである。治郎のビジネスに対する真摯な姿勢と公正な取引は、地元の経済活動を支え、地域の住民の信頼を獲得したのであろう。

例えばコサックでは、採貝船の所有数やアジア人乗組員の雇用者数で制限があったために、いわゆる「ダミーイング(名義貸し)」¹⁶という当局が禁止した方法で、村松商会在が運営する船団を大きくしていった。治郎が抵当権を持つ採貝船を運用して貝の売上の一部を返済に充てたり、白人船主の船を預かって運営したり、あるいは船主をマネージャーとして雇ったりして、実質的には10隻以上の船を運営したのである。利率や利子の支払いなども含め、明瞭な会計が帳簿に記載されている。こうした経営手段は正当な商行為であっただけでなく、小規模な「白人」真珠貝事業者とコサックの経済活動を支えた行為であった。それゆえに、地元の役人は「ダミーイング」行為として認識していながらも、当局が介入した形跡はない(村上 2020)。

さらに、日本人であった治郎は、日本人契約労働者を雇用する上で、ヨーロッパ系の事業主より優位な立場にあったし、コサック周辺の真珠貝漁で働く日本人は村松商店の顧客でもあった。治郎は、帳簿の管理によって乗組員個人の収支を把握し、要請に応じて迅速に日本への送金をした。また、漁以外での航海をした時や真珠玉を見つけた時は特別手当でも支給したし、クリスマスや新年や天皇誕生日など特別な祝日には乗組員のためにプレゼントや宴会を用意するなど、配慮を忘れることがなかった。上述した藤田はスケッチの中で、治郎は「白人の間でも信用があり、人徳のある人」だったと回想している(松本他編 2021: 120-122)。

とはいえ、真珠貝事業の成功とともに、治郎の目の前に立ちはだかる白豪主義政策の壁は、ますます強固なものとなっていった。1920年代後半に治郎は、事業の拡大を目指してダーウィンを拠点とした真珠貝漁への参入を図り、新たに9隻の採貝船の所有を計画したのだが、連邦政府の介入によって諦めざるを得なかった。漁業の許可は州の管轄にあり、本来ならば異なる州での事業は(ダーウィンは連邦管轄下の北部特別地域の首都である)別途許可される。しかし、連邦政府は外国人乗組員の雇用申請を認可しないという方法で、村松がオーストラリア国内で所

¹⁶ 「ダミーイング」の事例としては、1) 白人名義で有色人が採取船を保有する、2) 白人の個人事業として申請しながら、事実上、有色人事業者の下で白人事業者が働いている、3) 外国人労働者を雇用許可以外の労働に就かせる、などがある(村上 2020: 74-75)。

有できる採貝船を合計で10隻までに制限したのである。結局治郎は、所有していた船の半数をダーウィンに移籍した。親交があったH. G. ネルソン (H.G. Nelson) 議員宛の手紙には、英国臣民であってもアジア人であるが故にビジネスすら制限される理不尽に対する怒りが滲む。

治郎が連邦政府主導の真珠貝の採取量調整に反対したことも、連邦政府の不興を買った理由であった。1930年代にはオーストラリア北部の海域で日本船による真珠貝漁が始まり、真珠貝は市場への供給過剰に陥っていた。世界市場での真珠貝価格の下落を防ぐために、大手の真珠貝事業者と輸入業者が連邦政府へ働きかけて採取量調整が導入されたのだが、村松はこの方針に強く反対していた。オーストラリア国内で採取量を調整したところで、公海上での、特に日本船籍の採貝を禁止することはできなかつたからである¹⁷。国際政治での日本の勢力の拡大と南方への経済進出も、日本人である治郎の動向に対して連邦政府が猜疑的になった要因となった。

1929年にダーウィンに転居した後は、村松商会はティモール海・アラフラ海の公海上やオランダ領東インド（現在のインドネシア）でも真珠貝漁を展開した。村松の名声は、1930年代に始まったアラフラ海に出漁した日本人漁師や、練習船などでダーウィンを訪れた日本人によって知られることになる。ここでも、治郎の信用を高めた出来事がいくつかある。例えば、日本から最初にアラフラ海に出漁した丹下福太郎の船の送気用コンプレッサーが故障した折には村松が貸与して助けているし、1930年代後半にアーネムランド沖で日本漁船が拿捕された折にも、ダーウィンの日本人会とともにその解放に向けて奔走した。さらに、1936年に文部省航海練習船海王丸¹⁸が予期せずしてダーウィンに入港した時には、乗船していた教官や実習生や職員に対して、真珠玉や真珠貝と一頭分の牛肉を贈っている（松本 2020）。

ダーウィンの自宅前で撮影された写真には、穏やかで満ち足りた二人の姿がある。治郎の抑留書類の中には治郎が作成した資産リストが含まれており、1935年の時点で船を含む資産は、ダーウィンで6,000ポンド、コサックで5,300ポンドとなっている¹⁹。

6. オーストラリアに生きた治郎とハツ

太平洋戦争の勃発とともに治郎とハツはダーウィンで拘束され、陸路でヴィクトリア州のタツラ強制収容所に移送された。強制収容での個人調書には、治郎もハツも当初「帰化英国臣民」と記されていたが、後日「日本人」と書き直されている。

¹⁷ 当時の領海は3カイリで、排他的経済水域や大陸棚といった領海外での資源開発を規制する法的概念は成立していなかった。

¹⁸ 「海の貴婦人」と呼ばれた船で1930年に進水、全国にあった11校の公立商船学校の航海科の生徒で、各校の席上過程を終了した生徒を収容して約1年3ヶ月にわたる実習訓練を行なった。太平洋戦争中に改装されて、戦争終結と同時に引揚輸送に使われた。1989年9月に「新海王丸」の竣工に伴い旧海王丸は引退し、現在は富山県の海王丸パークに繋留され一般公開されている。[日本海事科学振興財団 船の科学館編（2008）「船の科学館 資料ガイド8 練習帆船日本丸/海王丸」]

¹⁹ 日本円にすると11万3000円で、当時は最高位の官吏の年俸が4,000円だった〔「明治・大正・昭和・平成・令和値段史」(<https://coin-walk.site/J077.htm>)〕。また当時のオーストラリア人の平均年収は158ポンド〔「Measuring Worth」(<https://www.measuringworth.com/datasets/auswages/>)〕。豪準備銀行のウェブサイト上での試算では、今日では123万ドルぐらいの資産価値で今日オーストラリアでは住宅1件ぐらいなのだが、当時治郎は10隻以上の船、ダーウィンでは自宅と真珠貝選別用の地所、コサックでは自宅2件を含めコサック全体の地所の大半とジャーマン島を所有していた。〔「Pre-Decimal Inflation Calculator」 Reserve Bank of Australia (<https://www.rba.gov.au/calculator/annualPreDecimal.html>) 2023年2月27日閲覧。〕なお、1ポンド=20シリング=240ペンス。

タツラ収容所はメルボルンの北 180 キロに位置していて、主に敵性外国人家族が収容されていた。乾燥地域にあって寒暖の差が激しく、収容者は砂嵐に苦しめられた。特に暖房器具がなかった宿舎では、冬は寒さが身に染みだに違いない。胃がんを患っていた治郎は、1942 年 9 月 7 日にワランガ病院に収容され、1943 年 1 月 7 日に 64 歳で生涯を閉じた。タツラ収容所の墓地に埋葬され、1964 年にニューサウスウェールズ州に新設されたカウラ日本人戦争墓地に改葬された（永田 2020）。

日本で見つかった村松商会のコサックでの事業の元帳は、日本人乗組員の 1941 年後半の収支が計算し直されているので、タツラ収容所に持ち込まれていたことがわかる。タツラ収容所には、村松商会のコサックのマネージャーを務めた繁野義雄も収容されていた。特に日本人乗組員の人名勘定には加筆・修正が加えられていて、未払いの賃金には利子を入れて計算されている。南オーストラリア州のラブデー収容所に収容されていた乗組員に対しては、それぞれ 5 ポンドが送金された。日本人乗組員のことを常に気にかけていた治郎は、収容中であっても雇用主としての責任を果そうとしていたことがわかる。

加えて治郎は、負債を払い終えた後の全ての財産をハツが受け取るとした遺書を作成した。ハツは 1946 年 8 月に解放され、パースを經由してコサックに戻った。1948 年頃にハツが姪のシミコに宛てた手紙では、コサックの家は略奪を受け、窓ガラスは一枚残らず壊され、家の中には書類や手紙や帳簿が散乱し、コサックに住むのはハツと見知らぬオーストラリア人 2 名のみと書かれている。ダーウィンの家も船も全て破壊されて何も残らず、日本人に対する強い嫌悪感がある中で、ハツは 1957 年までコサックで暮らした。頼る人もなく、話す相手もなく、寂しく暮らしていると、望郷の念を募らせている。

対日講和条約発効後もこの時期までハツがコサックに残ったのは、一つには治郎の遺産を整理するためであっただろう。帳簿を持ち帰ったのも、治郎が築いた財産の証明であるとともに、治郎の遺志が残されていると考えたからだと想像する。結局 7,670 ポンドを残して（Sissons 1986）、ハツは娘のハルが住む横浜に戻り、2 年後に没した。オーストラリアに残された治郎の遺産に関しては、さらなる研究が必要とされている。

生涯をかけて築いた事業が瓦解する様を目にした抑留中の治郎の失意は想像に余りある。しかも帰化英国臣民として北西部オーストラリアの経済に貢献してきたのにも拘らず、敵性外国人として収容されたことは、治郎の人生が否定されたにも等しい。ハルを含め日本の家族や知り合いのことも心配だっただろう。英語が堪能で企業家として成功していた治郎ならば、収容所生活でもリーダーとしての適正を持っていたが、収容所では目立たないようひっそりと暮らしていたと伝えられている（永田 2020）。人徳のある企業家を志してオーストラリアでの事業に心血を注いだ治郎が、人生の終盤で英国臣民であることを許されなかった残酷な現実、治郎の生きる力を失わせたと言っても過言ではない。

ハツは、2 年間で短い期間であったが、ハルの家族に囲まれて穏やかな最期を迎えた。ハツが孫の晋吾のために買い求めたピアノで、今富家では今もショパンが奏でられている。若い頃の治郎もピアノを弾いていて、サビエル・カレッジの時代に音楽でも優等賞を受賞した。コサックの

住居にはオルガンと、幼いハルのためにオモチャのピアノが置かれていた。オーストラリアの企業家でありつつ、家族との絆を通じて日本人であり続けた治郎の名前は、横浜のハツの墓石に刻まれている。

Jiro Muramats and his family: portraits of the family connecting Japan and Australia

1. Encountering Muramats in Cossack (Western Australia)

This booklet was compiled from photographs in the possession of the relatives of Jiro Muramats (1878-1943) and his younger brother Saburo (1884-1942). Jiro Muramats founded the company, J & T Muramats in the early 20th century in Cossack and successfully operated a store and a pearling business. After Jiro inherited the store from his father Sakutaro upon his sudden death, he expanded and diversified the business. The company's clientele comprised not only the local Japanese community, but also ranchers and others in the Pilbara region, and it was involved in the export of pearl shells and later, asbestos. In the era of the White Australia Policy,¹ Jiro was a rare Japanese who could compete on equal terms with the European-Australian. As a naturalised British subject,² Jiro aspired to be a successful Australian entrepreneur. The photographs depict the life of Jiro Muramats as an Australian businessman, and reveals the family bonds which underpinned his success.

The research on Jiro Muramats began with a field trip to Cossack in 2017 in the course of editing Kenji Fujita's sketchbook.³ Fujita from *Kinan* (southern area of Wakayama and Mie prefectures) worked on a pearling boat owned by J & T Muramats between 1925 and 1938. He left many marvellous watercolour sketches of Cossack of the time, including those depicting the life and work on the boat, the scenery of fishing grounds and sea life (Matsumoto *et al.* eds, 2021).

Almost no one today, not even academics in the field of Australian Studies, can point out the location of Cossack on a map. The town was abandoned in the late 1950s and is now registered as a historic site in Western Australia. The Pilbara is also a region far removed from the daily life of most Australians, and is probably only known as an area for iron ore production. The road stretches far into the horizon, and is vast. The sun is strong, and it feels as though one is dehydrating. The two field trips⁴ were conducted during the dry

¹ It was a racist policy that discriminated against Asians and other 'coloured' people to create a society of 'whites' of British descent. The policy was introduced during the colonial period and lasted until the 1970s.

² In 1901, the six British colonies formed the 'Commonwealth of Australia', but they remained part of the British Empire and their citizens remained British subjects. Even after the 'Nationality and Citizenship Act' was passed in 1948, the status of 'British subject' was maintained as before, until it was completely abolished in 1984. Prior to the creation of the federation, each of the six colonies was autonomous with its own constitution and parliament, and it was possible to apply for naturalisation in each colony.

³ Keiko Tamura, Yuichi Murakami, and Mayumi Kamada conducted the field research in September 2017.

⁴ The second trip was conducted by Keiko Tamura and Mayumi Kamada in August 2022.

season, and it was difficult to imagine life on the coast when a fierce cyclone strikes. How did the Japanese who came to this region more than a hundred years ago live?

Although restoration and preservation of Cossack as a historic site had begun, the historical information of the site mainly focused on the European settlement in the late 19th century. The exhibition in the old courthouse, which had been renovated as a museum, had references to indigenous and Asian residents, but the research done on these populations seemed insufficient. There was a panel exhibited in the museum explaining the history of Asian residents, with a photograph of the grave of Jiro's father, Sakutaro Muramatsu (1846-1898). But the panel's description failed to make any mention of Sakutaro or the Japanese pearl divers who lie buried in the Japanese cemetery in Cossack. A need was felt to make a study of the Japanese merchants, such as Sakutaro Muramatsu and Jiro Muramats, as well as the Japanese indentured labourers who lived there. There was also a desire, as Japanese researchers, to make an academic contribution to the history of Japanese immigrants in Australia and the role they played in Australian society.

A large number of documents on Jiro Muramats and J & T Muramats are kept in the National Archives of Australia and the state archives and libraries in Western Australia. However, the only comprehensive description of Jiro Muramats is a short introduction to 'Jiro Muramats' by D.C.S. Sissons in the *Australian Dictionary of Biography* (Sissons 1986). Since the initial visit to Cossack in 2017, historical documents in various archives and institutions have been examined, other relevant materials were discovered in Japan, and the research findings have been published (Kamada ed. 2020). The photographs presented here were provided by relatives of Muramatsu during the course of the research.

The characters '治郎' are used for Jiro's name as in previous publications. Although his name in the official family register in Japan is written as '次郎', he always wrote his name using the characters '治郎' including in his notes on the back of photographs and on the draft of his passport application. He obviously preferred to write his name as '治郎'. Furthermore, we use 'Muramats' for Jiro and Hatsu's family name because Jiro always signed his name 'Muramats'. For Saburo and others, 'Muramatsu' is used, as this spelling was used by Saburo when he signed his name.

2. A Story began with a photograph

It was very fortunate to be able to meet the relations of Jiro and his family in Japan. The

photograph on the cover page of Saburo's daughter Sumiko and Yasunosuke, the son of a photographer Yasukichi Murakami in front of Sakutaro's grave, introduced the personage of Mrs. Yasuko Kinoshita, the daughter of Sumiko. The photograph was taken by Murakami who lived in Broome at the time. When Mrs. Kinoshita visited an exhibition on Murakami at Wakayama University in 2016,⁵ she noticed the same photo mentioned above, was also in the possession of her family. Mrs. Kinoshita, who had been interested in her grandparents and her mother's connection to Australia, contacted Dr. Mutsumi Tsuda (currently a Professor in the Department of Policy Studies, Kansei Gakuin University) who had organised the exhibition. Through Prof. Tsuda's introduction, it was possible to meet Mrs. Kinoshita.

At the first meeting, Mrs. Kinoshita brought out many photographs in her possession, and later she also explained about Muramatsu family genealogy and allowed the examination of Saburo's passport and Hatsu's letters. With the photographs and letters in hand, it gave a human dimension to Jiro and his wife Hatsu (1882-1959) and Saburo and his wife Aya (1888-1963), who, up to now, only existed on paper in the Australian record files. It was somewhat of a strange sensation to realise that a close affinity was felt towards the documents in the archives and even to the numbers in the account ledgers after having viewed the photographs of these individuals. Saburo's feeling of pride on taking on the challenge of doing business in Australia is evident in the photo of him taken in front of a pearling boat. In the photo of Aya holding her daughter Sumiko, she appears tired, indicating the harshness of the living conditions in Cossack. The photograph of Jiro and Hatsu in front of their home in Darwin, taken in 1931, gives the impression that they were experiencing a peaceful and contented life. It seems Jiro kept close contact with Saburo after he returned to Japan with his family to keep them informed of their situation. There were also a few photos of Darwin in the 1930s.

Based upon Mrs. Kinoshita's recollection, we were able to locate the Imatomi family in Yokohama (the in-laws of Haru, Jiro's only daughter). We met Toshiko, the wife of Haru's son, Shingo Imatomi, and she showed us many photos and documents held by the Imatomi family. Then another photograph brought a new finding: the whereabouts of Haru after her return to Japan in 1920 for her schooling. The photograph of Hatsu and Haru taken at a photo studio in Fujieda, was convincing evidence that Haru was raised in Fujieda, Sakutaro's hometown in Shizuoka Prefecture. An inquiry made to Fujieda Nishi High School (formerly

⁵ 'The life story of Yasukichi Murakami (1880-1944), a Japanese migrant from Wakayama to Australia, as seen through the photographs he sent to his mother', 10 June – 29 July 2016, at Institute of Kishu Economic and Cultural History, Wakayama University.

Fujieda Girl's High School) confirmed that Haru was a graduate of the school (graduated in 1930).

Among the photographs, those of Uta⁶ and Yasu, Jiro and Saburo's younger sisters, stand out. They appear in the photos of Haru's wedding and of the ceremony in front of Hatsu's grave. Two of Haru's aunts helped to look after her when she came back to Japan at a young age and stayed with her great-aunt (Jiro's aunt). According to the letters preserved by the Kinoshita family, and Jiro's 'diary'⁷, Saburo and Hatsu stayed for a time with Yasu's in-laws when they traveled back to Japan. It shows that the brothers and sisters kept close contact even at a time when frequent travel and communication between Australia and Japan were difficult.

Furthermore, the Imatomi family kept over 2,500 pages of the J & T Muramats account books that Hatsu had brought back in 1957. As discussed in detail in other publications (鎌田 2023, Kamada 2023), the ledgers and cash books written in English are invaluable documents for the study of the socio-economic history of the Pilbara, as well as the business operations of J & T Muramats and the lives of indentured Japanese that he employed. If Hatsu had not been brought these records back to Japan, or if the Imatomi family had not preserved them for 70 years, they would have been totally lost.⁸

Based on these valuable historical documents and research findings, this paper will focus on Jiro Muramats' life, family ties, and the successful development of his business in Australia.

3. Japanese in the Australian pearling industry

What follows, before going into the main topic, will be a brief explanation about pearl-shell fishery that Muramats was involved in. The main species collected in Australia is the *Pinctada maxima*, a large bivalve shell (up to about 22cm) that burrows into the bottom of the seafloor in the tropical Pacific region. Pearl shell fishing in Australia began in 1851 with the granting of a fishing licence at Shark Bay, Western Australia, followed by the discovery of vast pearling beds in the warm waters north of the Tropic of Capricorn, and the

⁶ Officially named 'Utaji' in the family register.

⁷ The 'diary' kept in the State Library of Western Australia is like a memorandum written when Jiro temporarily returned to Japan in 1920. The contents include a chronological record of events between 1891 and 1906, the number of boats Jiro owned, the gifts that he purchased and to whom he gave those to when he went home, farewell gifts and people from whom he received them, and a draft of the application for his passport [State Library of Western Australia: ACC 3700A].

⁸ The account books were digitised and donated to the State Library of Western Australia. These can be viewed at the following website (<https://catalogue.slwa.wa.gov.au/record=b1745730~S7>).

industry further developed in northern Australia after 1860. Fishing took place in the waters of the Indian Ocean, the Timor Sea, the Arafura Sea, and the Coral Sea. The main bases of operation were in Broome, Darwin, and Thursday Island. The cleaned shells were exported to Europe and the United States and processed into shell buttons. In the 1920s, Australia accounted for 85% of the world's supply of pearl shells.

Pearl-shell fishing involves collecting pearl oysters that live on the seafloor. Initially, they were collected by bare diving in shallow waters, but as fishing grounds became depleted, the fishing practice shifted to the use of diving gear. In the 1920s, the air pumps for pumping air to the divers evolved from manual to motorised compressor-type pumps, and later, the pearling boats themselves (called luggers) were fitted with engines. The fishing grounds could reach depths of from 10 meters to nearly 70 meters.

Shellfish harvesting on the seafloor is hazardous. Tidal currents vary depending on the fishing grounds, depth, date and time, and the seafloor is not flat. The seafloor was sandy or rocky with hidden gaps, and the air pipe could be damaged by rocks and corals. In addition, the deeper the water, the greater the risk of the bends. Although the fishing season was suspended during summer when cyclones usually hit northern Australia, the unexpected arrival of cyclones at other times resulted in several maritime accidents causing many deaths.

The Australian pearl-shell fishery was supported by the use of indentured Asian workers, including Japanese, Malays, Filipinos, and Koepangers,⁹ who were employed as divers and crews of pearling boats. The workforce was also composed of Indigenous people and Papuans from southern New Guinea Island. In particular, the Japanese workers were crucial to the industry. Most of the boatswains, engineers, divers, and tenders who handled the lifelines of the divers were Japanese. Locating fishing grounds, assessing the condition of the seabed, and the work procedures were learned through onboard and underwater experiences. During the fishing season, the crew lived on a small boat for several weeks, and good communication and trust among them were essential. Therefore, in the pearl-shell fishery, crews on boats formed professional teams which were often bonded together by blood ties and local relations. At its peak in 1917, when Broome had the largest take of pearl shells, more than 1,400 Japanese were working there, and nearly 80% of them were from *Kinan* (鎌田 2016). Kenji Fujita, mentioned above, was also from *Kinan*, Kozagawa,

⁹ Ethnic group names used in statistics at the time were not strictly defined. Koepanger is the ethnic group name used in Australia, to refer to those who are from Timor and other islands in eastern Indonesia.

Higashimuro-gun, Wakayama Prefecture.

As will be discussed later, Australia introduced the White Australia policy in the late 19th century. Most Asian workers, including Japanese, were on indentured contracts, and only a few Japanese were allowed to settle or become naturalised. Jiro Muramats, a naturalised British subject and a successful pearler, was a rare exception who was very little known. One reason for this is that the Pacific War led to the forced internment and deportation of Japanese and Japanese-Australians, and for a time the Japanese community in Australia disappeared. Jiro died in internment, J & T Muramats ceased to exist, and the venture was buried in history. Moreover, with the development of plastics after the war, demand for shell buttons plummeted, and the pearl-shell fishery industry declined. When pearl cultivation began in Australia in the late 1950s, the pearl-shell fishery became primarily a harvesting of mother oysters for cultivation. The Australia-Japan relationship regarding cultured pearls was re-established with new entrants into the industry (田村 2016).

4. Connecting Japan and Australia: Muramatsu family in the history of immigration

From the end of the 19th century to the 20th century, Japan sent many immigrants to North and South America and Southeast Asia, and many studies have been done in the field of immigration history. However, the studies mainly examined migrants as a 'mass', and it is not easy to trace individuals unless they are well-known figures. In five years of research, we have brought to light the life of Jiro Muramats and the business of his company, J & T Muramats (Kamada ed. 2020; Kamada 2023).

The reason why the life of Jiro Muramats is of such interest is that, under the White Australia policy, he not only succeeded in business in Australia despite being Japanese, but he also contributed to sustaining the economy of Cossack and the Pilbara. The author believes that Jiro was determined to make Australia his permanent home. Although he was Japanese, he sought British citizenship in order to aspire to be an entrepreneur in Australia. So a second point of interest was how this was reflected in his way of life. Such a choice by Jiro was possible because of his strong family ties, including his brothers and sisters and those of his father's family in Japan.

As the second son, Jiro was free from the responsibility of continuing and developing his *Ie* (family lineage), which was expected of Japanese men at that time. But his father Sakutaro and his older brother Tsunetaro, both as the oldest sons of the family, might have had to take

on greater responsibilities. One's decision to immigrate abroad could not be made without considering the rest of the family. Especially in Japanese society in the first half of the 20th century, the burden of responsibility of the sons for ensuring that the *Ie* thrives was much greater than it is today. The relationship between Jiro Muramatsu and his family and their movements between Japan and Australia demonstrates the dynamics of migration as a social act.

The Muramatsu family's relations to Australia will be discussed below.

4-1. Sakutaro Muramatsu

Sakutaro Muramatsu, who arrived in Australia in 1888, was one of the earliest of Japanese immigrants in the Meiji era. Sakutaro was one of many small merchants who travelled to *Nanpo* (the South), such as Singapore, Indonesia, Thailand, the Philippines, and Australia in the 1890s. He was not one of the 'elites' like businessmen or diplomats posted to big cities like Sydney and Melbourne. For example, Torajiro Sato¹⁰ is known as a successful Japanese in the pearl-shell business, around the same time as Sakutaro. Sato had studied in the United States and had a strong background. He was also commissioned by the Minister of Foreign Affairs to conduct a fact-finding survey of immigrants. Therefore, with such a strong background, he was able to develop a business on Thursday Island.

In the area of immigration history, the role of 'nameless' small merchants such as Sakutaro, who opened the door for Japanese to expand southward and attracted other Japanese immigrants in the early to mid-Meiji period, as well as the networks they built in the region deserve greater study.

Sakutaro was born in Fujieda, Shizuoka Prefecture, and was based in Kobe in the 1880s as an intermediary for migrant workers from Japan. The Diplomatic Archives of the Ministry of Foreign Affairs of Japan have records showing that in 1884, Sakutaro Muramatsu, together with Chobei Takeda, introduced migrant workers bound for Thursday Island, Australia, to Fearon, Low & Co., which had a branch office in Kobe. Sixty-nine people were recruited to work in Thursday Island. This was the second group of migrant workers sent to Australia following another group of Japanese workers contracted with John Miller, the first overseas immigrant officially recognised by the Meiji government.¹¹ Therefore, it is

¹⁰ 和歌山県ふるさとアーカイブ「紀の国の先人たち、オーストラリア移民、佐藤虎次郎」(<https://wave.pref.wakayama.lg.jp/bunka-archive/senjin/satoutora.html>), accessed on 11 Nov. 2023.

¹¹ John Miller, a manager of pearl-shell business, visited Yokohama to recruit Japanese workers, with Mankichi Masuda as his liaison. As a result, 37 men signed up, and in 1883 Miller led them to Prince of Wales Island,

certain that Sakutaro was involved in facilitating overseas emigration under the Meiji government from its inception, and had some connection with Australia by the mid-1880s. But it is not known why he decided to come to Australia or how he eventually opened his store in Cossack.

When Sakutaro arrived in the 1890s, Cossack was an important port in northwestern part of Western Australia, and the town was at its peak of prosperity. Some Japanese were already living in the area, and Sakutaro likely foresaw business opportunities there. The number of Japanese people increased rapidly, and in October 1897, the Cossack Japanese Association was formed, with Sakutaro becoming its first director and treasurer. At the time of its establishment, the Association had a branch in Roebourne,¹² and Shingoro Tokumaru and Takazo Nishioka were also on the board of directors. Shingoro Tokumaru later established Tokumaru Bros. with his younger brother Kamejiro, who expanded the business from Broome to Perth, Melbourne, and Singapore. Takazo Nishioka, who was closely related to the relatively well-known Yasukichi Murakami,¹³ ran a store in Cossack with his wife Eki. After Takazo's death, Eki married Yasukichi, who had been working in his store. Yasukichi learned photography from Eki and ran a photo studio in Broome and Darwin, leaving behind many photographs.

Sakutaro often travelled back and forth to Kobe after setting up his store in Cossack. He might have arranged for Japanese contract labourers to work in the Cossack pearl-shell fishery, along with importing goods for the local Japanese community. Sakutaro had five children with his wife Sada: Tsunetaro, Jiro, Saburo, Uta, and Yasu. Sakutaro, as the only son, was supposed to succeed to the *Ie* in Fujieda, but since he had settled in Australia and was running a business in Kobe and Cossack, he left his oldest son Tsunetaro in Kobe and his second son Jiro in the family's care in Fujieda.

The Muramatsu in Fujieda was a farming family that also served as the village headman,

south of Thursday Island (久原 1978). For further information about immigration history in Japan, see 『邦人海外発展史』(入江 1981: 47-53).

¹² Roebourne is located about 15 km inland from Cossack. It was founded in 1866 as a result of the development of ranching in the area, and became the first town to be established in the northwestern part of Western Australia. The township was established in 1887 along with Cossack and became a hub in the region, with the development of the pearling industry in Cossack and the development of gold and copper mines in the Pilbara region in the late 19th century. The population of Roebourne in 1901 was approximately 1,000. ['Western Australian colonial census 1848-1901 raw data', The University of Western Australia (<https://research-repository.uwa.edu.au/en/datasets/western-australian-colonial-census-1848-1901-raw-data>), accessed on 27 Feb. 2023].

¹³ 'Yasukichi Murakami - Through A Distant Lens', a film about Yasukichi Murakami by Mayu Kanamori, a Sydney-based filmmaker and photographer, was screened in Sydney, Adelaide, and Darwin, and was well received. Kanamori also published the results of her research on Murakami on her blog ['About Murakami' (<https://aboutmurakami.wordpress.com/about/>), accessed on 15 Feb. 2023].

but Sakutaro became a merchant, just like his grandfather, with a talent and passion for the business. According to the Muramatsu family genealogy, Sakutaro's grandfather, Hikohachi (Hikobei), worked for a merchant at a young age, and later achieved great success as an independent rice trader. Hikohachi died in Dojima, Osaka, while his son Hikoroku (Sakutaro's father) became head of the *Ie* in Fujieda. Sakutaro, like his grandfather, opened up businesses in the new frontiers of Kobe and Cossack. Sakutaro died on 13 February 1898 at the age of 51 in a hospital in Roebourne and was buried in Cossack. Sakutaro's gravestone in the Japanese cemetery in Cossack is quite conspicuous.

4-2. Sakutaro's three sons: Tsunetaro, Jiro and Saburo

After Sakutaro passed away, Jiro's brothers and sisters were very supportive of Jiro's commitment to the business in Australia. In return, Jiro supported his family in Kobe financially. Sakutaro's sons, Tsunetaro and Saburo, travelled back and forth between Japan and Australia, fulfilling their responsibilities towards their *Ie* in Japan as well as to ensure the success of the business in Australia.

Tsunetaro

The eldest son, Tsunetaro (1869-1921) left Kobe in May 1893, stayed in Broome for two years, and arrived in Cossack in March 1895. Sakutaro was also running a store in Broome at the time. While merchants from Ehime, such as Kametaro Yamamoto, Toyosaburo Mise, and Eijiro Yamazaki, arrived and began operating stores in Broome, Sakutaro moved his base of operations to Cossack.

Ultimately, Tsunetaro did not stay in Cossack for long and returned to Japan. It may be because he wanted to look after the family in Kobe, or he was concerned about Sakutaro's family in Fujieda. Upon Sakutaro's death, Tsunetaro returned to Cossack for a time, but he went back to Japan after Jiro's inheritance was settled, and the launch of J & T Muramats. The 'J' in the name of the company stands for Jiro, and the 'T' is for Tsunetaro. As Jiro's initial was placed first, Jiro was intended to be the person who was primarily responsible for managing the company from the beginning.

According to records in the possession of Jiro's relatives, Tsunetaro succeeded to the head of the Muramatsu family in Fujieda after Sakutaro's death, but in practice, it was Sakutaro's sister, Koh, who effectively took over the family name along with her husband. Upon returning to Japan, Tsunetaro married Hide from Kobe in 1902 and settled there. Following a succession of major family-related events between 1906 and 1907, such as the marriage of

his younger sisters, Uta and Yasu, Saburo's departure for the US, and the death of his mother, Tsunetaro resided in Fujieda for a time before moving to Tokyo, where he died in Sugamo (Tokyo) in 1921. Koh became head of the family, who took over *Ie* in Fujieda, but as she did not have any children, she adopted Tsunetaro's second son, Hisajiro, to carry on the family line.

Jiro

Jiro left Kobe at the age of fifteen with his father Sakutaro in November 1893, six months after Tsunetaro departed for Australia. Jiro stayed in Broome for about five months before arriving in Cossack. Immediately after Jiro arrived in Cossack, Sakutaro left Cossack for Japan and stayed there for six months. So, Jiro must have been looked after by some Japanese in Cossack as Tsunetaro was in Broome at this time.

In April 1895, the year after his arrival in Cossack, Jiro enrolled at St. Francis Xavier College in Kew, Melbourne. This was shortly after Tsunetaro came to Cossack in March. Most Japanese merchants overseas at the time sent their children back to Japan for their education. Sakutaro's decision to bring Jiro to Cossack and then send him to the college in Melbourne was unusual, and it indicates Sakutaro's strong desire to continue his business in Australia with Jiro. At the same time, Jiro must have decided that he would follow in his father's footsteps even before enrolling at the college. At Xavier College, Jiro acquired a mastery of English and bookkeeping, and received awards for his academic excellence.

Sakutaro died of illness in Cossack in February 1898 while Jiro was still a student at the College. On receiving notification of his father's illness, Jiro hurried back to the Cossack. He learned of his father's death en route to see him. Therefore, he discontinued the trip and stayed in Perth to begin dealing with the procedures for inheriting his father's estate. His brother Tsunetaro was in Japan at this time. Jiro, then, applied for naturalisation in the colonies of Victoria and Western Australia. This was shortly before Federation. Because of his excellent academic record at Xavier College, and the strong support of Alexander A. Marks, Honorary Consul of Japan, his naturalisation as a British subject was granted in Victoria in July 1899. On the other hand, his application in Western Australia was rejected.

Attending Xavier College laid the foundation for Jiro's later life, just as Sakutaro had hoped. His experience in Melbourne, the central city of Australia, of being educated in an established boarding school, and becoming acquainted with the children of prominent families and with expatriates from large Japanese companies, must have instilled in him a sense of pride and

confidence. On his return to Cossack, Jiro was determined to run the store not only to support the Japanese community but also for residents in Cossack and the Pilbara as well (Tamura 2020). He bought pearling boats and expanded his business into pearl-shell fishery and exporting its products. Jiro inherited his passion for business from his great-grandfather Hikohachi and father Sakutaro. He turned his energies toward expanding his business in north-west Australia, from the Pilbara to Darwin. However, the main office of J & T Muramats, remained in Cossack, even after moving the business to Darwin, primarily because it was easier to run diverse businesses from Cossack than from Darwin. In addition, Cossack was Jiro's starting point in Australia, as well as where his father Sakutaro had started his store, and was laid to rest. Cossack was also where Jiro married Hatsu and where their only daughter Haru (美子 ; Marie Haru) was born.

Saburo and Jiro in Cossack

Sakutaro's third son, Saburo, was fifteen years younger than Tsunetaro and six years younger than Jiro, and grew up under the protection of his older brothers after his father's death. Saburo went on to higher education, graduating from the Department of Commerce, Kwansei Gakuin College of Advanced Studies (the predecessor of Kwansei Gakuin University). In a photograph taken in 1904 of Saburo at the age of twenty with his younger sisters Uta and Yasu, they all appear as youths from respectable family. Furthermore, the existence of Saburo's passport issued by the Japanese Consulate in Seattle in 1907, held by his descendants, proves that he went to the United States after completing his higher education. He must have received a large sum of funds from Jiro, in accordance with the terms of the inheritance.

Saburo went to Australia twice, in 1913 and 1917, to join Jiro to run J and T Muramats in Cossack. During his first trip to Australia, he travelled to Broome and the gold fields of Kalgoorlie to broaden his knowledge of Western Australia. A document held in the National Archives of Australia mentioned that Saburo worked at Kanake Co. in Osaka, but there is no evidence to confirm this. In 1915, he returned to Japan and got married. Saburo returned to Cossack in 1917 with his wife Aya (絢子), and the following year their only daughter Sumiko (すみ子; Joyce Sumi) was born. While Saburo and his family were in the Cossack, Jiro sent Haru back to Japan for schooling and entrusted his aunt Koh, Sakutaro's sister, with her upbringing. Jiro left for Japan from April to December 1920. To have a trustworthy brother like Saburo to look after the business in his absence allowed Jiro to be away from Cossack for eight months.

Hatsu and Haru left Cossack in January 1920, three months before Jiro's departure for Japan. On his way to Japan, Jiro engaged in several business negotiations in Singapore and bought souvenirs to be given to relatives, neighbours and acquaintances in Japan. For Jiro, it had been twenty years since he had been back to Japan, the last time being in 1899, shortly after Sakutaro's death. He travelled extensively in Japan during his five-month stay until his departure in November with his wife, Hatsu. Jiro delivered money entrusted to him by some Japanese in Cossack to their families, greeted old acquaintances, and met Tsunetaro and his sisters and their families. In Tokyo, Jiro exchanged contracts for the recruiting of Japanese indentured workers with Morioka Co, an immigration company. The most important event during his stay was greeting their relatives and neighbours in Fujieda. Jiro left a detailed list of the souvenirs he bought for his relatives and neighbours as well as the gifts he received in return (Matumoto 2020). The importance attached to his visit to Fujieda was because Fujieda was where Sakutaro was born and Jiro grew up, and most significantly, the town would become Haru's home in Japan.

After Jiro returned to Cossack at the end of 1920, he worked energetically to expand the business. Despite Australian government intervention to prevent him from being able to own more than ten luggers, Jiro enlarged his fleet by operating the vessels for which he held mortgages and by looking after other pearlers' boats. The government under the White Australia policy did not want Jiro, an Asian, to become influential in the pearling industry. In terms of the management of the store, he made sure he had diversification in the types of goods traded and earned the trust of clients by trading on long-term credit (Kamada 2023).

Saburo, who worked with Jiro in Cossack and appeared to be considering settling down there, decided to return to Kobe in 1924, at around the time when his daughter Sumiko was going to start her schooling. In 1921, Saburo was exploring the possibility of becoming a permanent resident along with Aya, and there was even a petition submitted by residents supporting their application, but it was rejected by the federal government. For Aya, who had completed girls' high school in Japan, life in the Cossack might have been too difficult. Saburo might have started a new business in Kobe putting into use his experiences in Australia. In any case, after returning to Japan, Saburo continued to assist J & T Muramats from Kobe. In the account books, there were entries recording payments for telegraph messages from Kobe, and of remittances to Saburo to cover costs for the recruiting of migrant workers and their accommodation in Kobe before their departure to Australia.

There are photographs sent by Jiro and letters from Hatsu still in the possession of Saburo's

descendants which attests to the fact that Jiro and Saburo's family maintained a close relationship even after Saburo's return. When the Pacific War broke out and the names of Japanese interned in Australia were published in the newspaper, a letter was sent in the name of Saburo Muramatsu to the POW Information Bureau of the War Ministry inquiring about Jiro and Hatsu. Saburo was ill at the time and the letter was written by his daughter, Sumiko, on his behalf. He died shortly after the letter was sent. Less than a year later, on 7 January 1943, Jiro, who had been interned in the Tatura Camp, also passed away.

The business, which had been passed down from Sakutaro to Jiro and built up over Jiro's lifetime, ceased operations at the outbreak of the Pacific War with Jiro's internment. By then, both Jiro and Saburo had kept Sakutaro's legacy alive. Jiro continued to visit Cossack every year after his move to Darwin. A headstone inscribed with Sakutaro and Sada's names was erected in the Muramatsu family cemetery in Kobe, where Saburo and Aya are laid to rest. The eldest son, Tsunetaro, fulfilled his responsibility to care for the *Ie* (family lineages) both in Kobe and Fujieda.

4-3. Women of the Muramatsu

Neither Jiro's wife Hatsu nor Saburo's wife Aya were involved with the business of J & T Muramats. However, they looked after the welfare of their families. In addition, these women had little children.

At the turn of the 20th century, Cossack was in decline and it lost its economic vitality. In 1904, a new jetty at Point Samson facing the open sea was constructed, which ended Cossack's function as a major port in the region. The light railway line that connected Cossack to the inland town of Roebourne, was discontinued. By 1910, the township had lost its status as a municipality, and the post office, schools and churches were closed. The Cossack economy was essentially sustained by J & T Muramats and the people associated with Muramats. J & T Muramats employed 100 people (mainly Japanese and Koepanger) for its pearling luggers, including the crew, shell-shuckers, and carpenters. There were also shopkeepers, laundrymen, handymen, butchers, hotelmen, etc. associated with Muramats. Jiro needed to diversify his store's business because the business could not survive with a customer base consisting only of residents of Cossack.

What was life in Cossack like for Hatsu and Aya? Even though daily necessities and foodstuffs were provided by Jiro's store and a handyman was employed to help with maintaining the house, it was all they could do just to maintain their daily lives. Only a few

people in Cossack actually lived with their families, and the female population was extremely small, so it was unlikely that Hatsu and Aya had friends to talk to. Moreover, Cossack was deserted during the fishing season, from April to September, because the crew lived mostly on the boats.

Hatsu Noguchi, who became Jiro's wife, was born in Nagasaki. Australian records show that she arrived in Cossack in 1895. She was thirteen years old. She married Jiro in 1905 and was registered in the family register in Japan in 1910. Her daughter, Haru was born in 1913. For Hatsu, Cossack was her home. During the dry season, the sea was calm, and the sun was strong but pleasant. The sunrise experienced by the authors on their second visit was breathtakingly beautiful: the sun rose from the Indian Ocean, turning the sky from a deep blue to orange. And when the tide receded several kilometers into the distance, it is possible to witness the light reflecting off of the surface of the water and sandbars at the mouth of the Harding River, changing colour moment by moment. It is truly a site to behold. The 'Staircase to the Moon', which can only be seen on full moon nights during the dry season, was also a wondrous site. Tamura and the author thought about how Hatsu must have been impressed upon witnessing such marvellous moments.

Hatsu must have looked forward to the arrival of Aya, Saburo's new bride. On the other hand, for Aya, Cossack was a harsh place to live. Aya was born in 1888 in Harima. As a graduate of the girls' high school in Toyooka, Hyogo Prefecture, she was highly educated. It was said she spoke fluent English. She must have been anxious about living and having children in an environment where the climate and human relations were completely different from those in Japan, no matter how much support she had from Saburo and Hatsu. Aya appears somewhat tired in photographs taken of her in Cossack, in contrast with those taken in Japan before her marriage. Perhaps because her life in Cossack had been difficult, Aya hardly talked to her family about her experiences in Australia.

The sisters of the Muramatsu family, supported their brothers in many ways, even after they were married. For example, they provided places for them to stay on their return to Japan, and counselled their Australian-born nieces. Uta and Yasu often appear in the records and photographs held by Jiro and Saburo's descendants. In interviews with relatives, they were mentioned as adorable figures. Yasuko Kinoshita (whose maiden name was Muramatsu), the granddaughter of Saburo, was named after Saburo's sister Yasu. Jiro could feel secure in his identity as an 'Australian/British subject' and thus establish himself in Australia, paradoxically because he had a strong sense of belonging to his family in Japan.

Uta married into the Shima family of doctors in Osaka, while Yasu married into the Kato family in Tokyo. Both were wealthy and established families. There is a letter written by Saburo when he was temporarily back in Japan, indicating that he stayed with the Kato family. It appears that Hatsu and Haru were also looked after by the Kato family for a few months when Hatsu took Haru back to Japan for her schooling. Hatsu must have felt uneasy with her marital Muramatsu family and relatives in Fujieda because it was her first return visit to Japan since she left for Australia at the age of thirteen. There also were cousins Haru's age in the Kato family. In Jiro's 'diary', which was a written record of his activities on his return to Japan in 1920, contains lists of expensive souvenirs that he bought in Singapore to present to the two families. The Kato family in particular was given special consideration: some money was presented not only to Mr. Kato, Yasu, his mother and the children, but also to three maidservants and a handyman (Matumoto 2020). Haru probably felt that the aunts who were close to her father were more approachable than her great-aunt, who acted as her foster mother. When Haru arrived at Fujieda at the age of six, her great-aunt was fifty-six years old. Yasu appears with Jiro and Hatsu in a photograph taken at the Mitsukoshi Photo Studio in Tokyo. Yasu and Uta were also in the photo of Haru's wedding, as well as in those taken in front of Hatsu's grave. On the occasion of Haru's engagement, Mr. Kato took the place of her father, Jiro.

Haru joined Jiro and Hatsu in Darwin in 1930 after graduating from the girls' high school. In the following year she enrolled in the boarding school at Rose Bay Convent in Sydney, before returning to Japan and marrying Shohei Imatomi from Shimonoseki in 1935. Shohei worked for *Tozannoji*,¹⁴ part of the Mitsubishi conglomerate, and was posted to Sao Paulo with Haru soon after their marriage. Their two children were born in Sao Paulo. Many photographs from Sao Paulo are currently held by the Imatomi family. Comments reflecting their contented lives are noted on the back of the photos. In these photos, Haru appears to be happy and adapting well to living abroad. After returning from Brazil, Shohei left his family behind and was posted to Burma, where he was drafted and died of illness in Pegu in July 1945. It is not hard to imagine the hardships faced by Haru, being left with two children in the midst of the chaotic post-war period. She worked for a trading company utilising her English language skills, and sometimes taught English there.

¹⁴ The company was formerly known as *Tozannojo*, which was involved in the development of the Korean Peninsula and was founded in 1919 by Baron Hisaya Iwasaki. The company acquired local firms abroad and was involved in paper manufacturing in Taiwan, trading and agro-pastoral industries in Brazil, and rubber orchards in the Malay Peninsula [東山農事の歴史 Showa 16(<http://tozannoji.npo-index.net/comment/>), accessed on 2 Feb 2023].

Sumiko, whose father Saburo had been sick and died during the war, also completed the Hyogo First Girls' School, and then went on to the Kobe College of Pharmacy (the predecessor of Kobe Pharmaceutical University). She left her job as a university assistant to look after her mother Aya and pursued a career as a pharmacist while raising a family.

For Haru and Sumiko who were born in Cossack, Australia was not their home. At the end of the Pacific War, Haru was thirty-two years old, and Sumiko was twenty-seven. Despite being at the mercy of war, they lived their lives with an indomitable spirit, like true Muromatsu women.

5. Challenges of the White Australia Policy:

Trading and Pearl Business of the J & T Muramats

Jiro, following his deceased father Sakutaro's wishes, laid a firm foundation for the J & T Muramats company, and started a pearling business in 1906. Since then, he extended the business with two pillars, trading and pearling. After Jiro founded the company, he used the bookkeeping skills he acquired at Xavier College to keep meticulous accounts of the daily transactions and financial situation of the company, as well as listing bad debts from his father's time. The account books, which Hatsu brought back to Japan after the war and have been kept by the family, were written in English. They included personal accounts, trading and pearling expenses accounts, cashbooks with entries of everyday trading, property lists, etc. The ledgers must have been voluminous, given that only some of the Cossack business survived and most of it, including the business in Darwin, has been lost. It shows how much attention he paid to financial management and poured his heart into the success of the business (Kamada 2023).

It is noteworthy that Jiro expanded his clientele to include the residents in the entire Pilbara region, not only the Japanese in Cossack, and diversified his business. He sold goods to Japanese workers on the pearling boats, as well as groceries, daily necessities, materials and equipment, to the residents and station owners and workers in the remote areas. He exported scrap metal and copper, asbestos, in addition to marine products such as pearlshells, tortoise shells and shark fins, which were brought by local manufacturers. He ran a life insurance agency for the Japanese crew. He also undertook to provide transport services utilising a truck and a car that he had purchased (Tamura 2020). Despite repeated credit losses, he maintained long-term business relationships with his customers and thus earned

their trust.

He was also successful in pearl-shell fishing. In 1909, there were 113 pearlers, in Western Australia, mainly in Broome, but only six of them owned more than eight vessels (Oliver 2006:42). Muramats, who owned ten vessels, was a large-scale operator. Moreover, at the time, the owners of pearling luggers were 'white' people, and some of the large-scale pearlers lived in New South Wales. Muramats, an Asian and sole proprietor, was a prominent figure in the pearl-shell fishing industry. Senior officials and politicians in the Western Australian and federal governments intervened in Jiro's business, concerned about the growing influence of Muramats as an Asian. From the late 19th century, before the Federation, the Australian colonies had adopted the White Australia policy, which restricted 'Asiatics'¹⁵ from owning pearling luggers and running a business. After the Federation, the government restricted the employment of Asians and imposed strict controls on immigration.

Jiro, who had decided to take over father's business in Australia, had been granted citizenship as a British subject in Victoria shortly before the Federation. This is why Jiro could own pearling vessels, despite the ownership of such vessels by 'coloured aliens' being prohibited in Western Australia since 1892. Furthermore, in 1912, Western Australia passed the Pearling Act, banning 'Asiatics' from owning pearling boats, but Jiro already owned ten boats before the law came into force. After 1912, no further ownership was allowed, and Jiro was forced to challenge the barriers of the White Australia policy to expand his pearling business.

In 1922, Jiro was registered as an elector in Western Australia and applied for electoral registration for federal elections. However, his application was rejected because he was an 'Asiatic', so Jiro appealed to the High Court in 1923 for the right to vote in federal elections (Oliver 2008: 134-135). He lost the case, and even his name was removed from the electoral rolls of Western Australia. Jiro's 1923 case was the first to be brought before the High Court, asserting his right to vote under the Commonwealth electoral law (Noberry and Williams 2002: 5-6). Further research is needed to understand why Jiro took legal action over electoral registration at this time and took the matter to the High Court, but we can assume that a sense of pride and identity as an Australian entrepreneur was developing in Jiro, while his business in Cossack was experiencing ~~in~~ a period of growth.

¹⁵ Although it contains discriminatory connotations, the term was used in the law and administrative documents of the time.

Examination of records held by the archives, revealed that some local officials such as a magistrates and pearling inspectors, had a favourable attitude towards Jiro, in contrast to high-level officials and politicians of the state and federal governments, who took a strict stance regarding the exclusion of Asians in line with the White Australia policy. Jiro conducted his business with sincerity and fairness, thus contributing to the local economy. In this way, he won the trust of the residents in the area.

For example, in Cossack, Muramats enlarged the fleet by practicing so-called ‘dummying’ (name lending)¹⁶ which was prohibited by the authorities, as a way to skirt the restrictions on the number of vessels he could own and the number of Asian crew that he could employ under the White Australia policy. Jiro owned in practice more than ten vessels. This was possible because he operated mortgaged vessels and used part of the proceeds from the sale of pearl-shells to cover his debts. He also operated vessels owned by white pearlers on their behalf, and employed a shipowner as a manager. Clear entries were recorded in his account books, including credits, debts, interest rates and payments. Jiro engaged in legitimate management practices, offered assistance to the businesses of small-scale white pearlers, and actively supported local commercial activities in Cossack. Hence, while local officials were aware of that Jiro was engaging in the practice of ‘dummying’, there is no indication that the authorities intervened (Murakami 2020).

As a Japanese, Jiro was in a better position to employ Japanese contract workers than the ‘white’ pearlers, and the Japanese working on pearling boats around Cossack were also customers of his store. Entries in the account books show that he kept track of individual crew member’s income and expenditures, and promptly remitted money to Japan on request. He showed concern for the Japanese crew. Bonuses were paid to those who made special voyages unrelated to fishing or found pearls in the oysters. Special gifts and banquets for the crew were prepared on special holidays such as Christmas, New Year, the King’s birthday, and the Japanese Emperor’s birthday. Kenji Fujita, mentioned above, wrote in his memoir that Jiro had ‘credit with the white people and was a person with virtue’ (Matsumoto *et al.* eds 2021: 120-122).

Despite the success of his pearling business, the wall of the White Australia policy he had to challenge became even stronger. In the late 1920s, Jiro planned to expand his pearling business to Darwin and to purchase nine new luggers, but he was forced to give up the deal

¹⁶ The practice of ‘dummying’ includes: applying for a pearling boat licence owned by a coloured person in the name of a white pearler; having a white pearler working under the direction of a coloured one; using indentured labourers for work other than what was permitted by their working permits, etc. (Murakami 2020: 74-75).

due to the federal government's intervention. The issuing of fishing licences was under the jurisdiction of each state so were in state jurisdiction and operations in different states would normally be licensed separately. But the federal government limited the number of vessels he could own to ten, by not granting employment permits for foreign crews. As a result of not being able to acquire new vessels, Jiro decided to move half of his fleet from Cossack to Darwin. In the personal letter to H.G. Nelson, a Member of the Parliament, Jiro expressed anger at the unreasonableness of even a British subject having restrictions placed on his business operations because of his Asian background.

Jiro's opposition to the federal government's introduction of a harvesting quota on pearl-shells also incurred the displeasure of the government. Pearl-shell fishing by Japanese vessels in Australia's northern waters began in the 1930's, resulting in an oversupply of pearl-shells in the market. To prevent a further fall in prices on the world market, major operators and importers of pearl-shells lobbied the federal government to introduce a harvesting quota. But Jiro opposed this policy. This was because a policy limiting fishing among Australian producers would not be adhered to by Japanese-flagged vessels on the high seas.¹⁷ Japan's growing power in international politics and its economic expansion towards the south also raised the suspicions of the Australian government concerning the activities of Jiro, a Japanese.

After moving to Darwin, J & T Muramats was involved in pearl-shell fishing in the Timor Sea, the Arafura Sea and the waters off of the Dutch East Indies (now Indonesia). Muramats's name became known by Japanese fishermen operated in the Arafura Sea in the 1930s, and by Japanese who visited Darwin on a training ship. Several incidents heightened events built up Jiro's credibility at the time. For example, when Fukotaro Tange, the first Japanese to engage in pearl-shell fishing in the Arafura Sea, experienced problems with the air compressor on his vessel, it was Jiro who came to his aid. In an incident involving the capture of Japanese fishing boats off of Arnhem Land in the late 1930s, he worked with the Japanese Association of Darwin for their release. And when the *Kaio-Maru*,¹⁸ a navigation training ship of the Japanese Ministry of Education, unexpectedly

¹⁷ At that time, territorial waters were defined as three nautical miles, and no legal concepts had been established regulating the exploitation of resources outside territorial waters, such as the Exclusive Economic Zone and continental shelves.

¹⁸ The ship, known as the 'Lady of the Sea', was launched in 1930, and was able to accommodate students from the navigation departments of eleven public merchant marine schools across Japan. The students who completed the study at their respective schools took training on board for one year and three months. The ship was refurbished during the Pacific War and used to transport Japanese who were repatriated at the end of the war. When the new Kaio-Maru was launched in September 1939, the older ship was retired, and is now moored and open to the public at the Kaio Maru Park in Toyama Prefecture. [日本海事科学振興財団 船の科学館編 (2008)「船の科学館 資料ガイド 8 練習帆船日本丸/海王丸」]

arrived in Darwin in 1936, Jiro presented the instructors, trainees, and staff on board with pearls, pearl-shells and one head of beef (Matsumoto 2020).

Jiro and Hatsu appeared peaceful and content in a photograph taken in front of their home in Darwin. Jiro's internment documents include a list of his assets in 1935, including ships, which was valued at 6,000 pounds in Darwin and 5,300 pounds in Cossack.¹⁹

6. Jiro and Hatsu in Australia

With the outbreak of the Pacific War, Jiro and Hatsu were taken into confinement in Darwin and transported by land to Tatura Internment Camp in Victoria. In the personal records of the internment, the status for of Jiro and Hatsu was originally entered as a 'naturalised British subject', but later changed to 'Japanese'. Tatura Internment Camp was located 180 km north of Melbourne and housed mainly enemy alien families.

The camp was in an arid region with large temperature differences, and the internees had to suffer through sandstorms. It was very cold in the huts but there were no heaters. Jiro was admitted to Waranga Hospital on 7 September 1942 with stomach cancer and died on 7 January 1943 at the age of sixty-four. He was buried at Tatura cemetery and was reburied in 1964 in the newly established Japanese War Cemetery in Cowra, New South Wales (Nagata 2020).

The ledgers of J & T Muramats Cossack business later found in Japan must have been taken to the Tatura camp, as the Japanese crew's income and expenditure for the second half of 1941 had been recalculated by Jiro. Yoshio Shigeno, who was the Cossack manager of the Muramats, was also interned at the Tatura camp. Additions and corrections had been made in the personal accounts of the Japanese crew, and unpaid wages were calculated with interest. The records show five pounds were remitted to each of the crew members interned at Loveday camp in South Australia. Jiro was always concerned about the Japanese crew, and tried to fulfill his responsibilities as an employer even while being interned.

¹⁹ This was worth 113,000 yen at a time when the yearly salary for the highest level bureaucrat was 4,000 yen. [「明治・大正・昭和・平成・令和値段史」 (<https://coin-walk.site/J077.htm0>). The average annual income of Australians at the time was 158 pounds [‘Measuring Worth’ (<https://www.measuringworth.com/datasets/auswages/>)]. According to estimates on the Reserve Bank of Australia website, the value of his property today would be around \$1.23 million, which is about the price of one house in Australia today. But at that time Jiro owned more than 10 ships, a home and pearl-shell sorting facility in Darwin, most of the entire land area of Cossack estate including two homes there, and Jarman Island [‘Pre-Decimal Inflation Calculator’ Reserve Bank of Australia (<https://www.rba.gov.au/calculator/annualPreDecimal.html>), accessed on 27 February 2023].

In addition, Jiro wrote a will stating that Hatsu would be the beneficiary of all his property after paying off his debts. Hatsu was released from the internment camp in August 1946 and returned to the Cossack via Perth. In a letter written to her niece Sumiko around 1948, she reports that the house in Cossack was looted, every windowpane was smashed, and documents, letters and account books were scattered throughout the house. She also wrote that only Hatsu and two other strangers were left in Cossack. The House in Darwin and all of the ships were destroyed, leaving nothing at all. Hatsu lived in Cossack until 1957, in an atmosphere of strong anti-Japanese sentiment. She was alone, with no one to rely on or to talk to, and was looking forward to going back to Japan,

The reason why Hatsu remained in Cossack until this time, even after the Peace Treaty with Japan took effect, was probably to sort out Jiro's estate. The author believes that Hatsu brought back the ledgers to Japan because they were proof of the assets Jiro had left behind. In the end, leaving behind 7,670 pounds (Sissons 1986), Hatsu returned to Yokohama, where her daughter Haru lived, and died two years later. No further research was undertaken about Jiro's estate in Australia.

It is not hard to imagine the feeling of despair experienced by Jiro Jiro's during his detention as he watched when he saw the business he had built up over his life collapsing. Moreover, despite having contributed to the northwestern Australian economy as a naturalised British subject, being interned as an enemy alien was as if his life was being denied. He must have been concerned about his family and friends in Japan, including Haru. It is said that Jiro lived quietly in the camp to avoid attracting attention, although he could have taken a leadership role as he was fluent in English and was known as a successful businessman (Nagata 2020). It was a cruel reality for Jiro, who aspired to become a virtuous entrepreneur and poured his heart and soul into his business in Australia, would not be allowed to retain his status as a British subject at the end of his life. It must have caused him to lose the will to live.

Hatsu died peacefully surrounded by Haru's children only two short years after she returned to Japan. Chopin is still being played by Hatsu's great-grand daughter in the Imatomi family with the piano Hatsu bought for her grandson, Shingo. Young Jiro also played the piano and was awarded a prize in music during his time at Xavier College. In the house in Cossack, there was an organ, and a toy piano for little Haru. Jiro Muramats, an Australian entrepreneur who remained a Japanese through his family ties, has his name engraved on Hatsu's gravestone in Yokohama.

参考文献 / References

- 入江寅次 (1981) 『邦人海外発展史 上・下』原書房 (覆刻原本 1942 年版)。
- 鎌田真弓 (2016) 「アラフラ海の日本人ダイバーたち」村井吉敬他編著『海境を越える人びとー真珠とナマコとアラフラ海』コモンズ、pp.64-96.
- _____ 編 (2020) 『村松治郎 (1878-1943) : オーストラリアに生きた日本人ビジネスマン』 / Kamada, Mayumi ed. (2020) *Jiro Muramats (1878-1943): A Japanese Businessman in Australia*. (<https://www.nucba.ac.jp/en/university/library/discussion-paper/NUCB-K-22101.html>)
- _____ 「研究ノート 村松商会 (J & T Muramats)の帳簿を読むー日豪州コサクにおけるビジネスと日本人真珠貝労働者のエスノグラフィー」『オーストラリア研究』第 36 号、pp.37-57.
- Kamada, Mayumi (2023) 'An Ethnographic Study of the J & T Muramats Account Books: Its Trading and Pearling Business in Cossack, Western Australia', *NUCB Journal of Economics, Management and Humanities*, Vol.67, pp.13-38.
(<https://www.nucba.ac.jp/pdf/njemh67/02-KamadaMayumi67.pdf>)
- 久原脩司 (1978) 「アラフラ海へ出漁した日本漁民」藪内芳彦編著『漁撈文化人類学の基本的文献資料とその補完的研究』風間書房、pp.583-629.
- 松本博之 (2020) 「1920 (大正 9) 年の帰国ー村松治郎の私生活と個性ー」鎌田編『村松治郎』前掲、pp.57-72. / Matsumoto, Hiroyuki (2020) 'Home Visit in 1920: Jiro Muramats's life and character', in Kamada ed. *Jiro Muramats, op. cit.*, pp.170-186.
- 松本博之他編 (2021) 『藤田健児スケッチブックー西豪州・コサク追想 (大正一四年~昭和一三年)』(第 2 版) / Matsumoto, Hiroyuki *et al.* eds (2021) *Kenji Fujita's Sketchbook: Memories of Cossack, Western Australia (1925-1938)* (2nd edition). (<https://www.nucba.ac.jp/university/library/discussion-paper/NUCB-K-21102.html>)
- 村上雄一 (2020) 「村松治郎と真珠貝産業」鎌田編『村松治郎』前掲、pp.73-82. / Murakami, Yuichi (2020) 'Jiro Muramats and the Pearling Industry', in Kamada ed. *Jiro Muramats, op. cit.*, pp.187-199.
- 永田由利子 (2020) 「強制収容と村松治郎」鎌田編『村松治郎』前掲、pp.83-90. / Nagata, Yuriko (2020) 'Wartime Internment and Jiro Muramats', in Kamada ed. *Jiro Muramats, op. cit.*, pp.200-208.
- Norberry, Jennifer and George Williams (2002) 'Voters and the Franchise: the Federal Story', Research Paper No. 17. Canberra: Department of the Parliamentary Library, Commonwealth of Australia.
- Oliver, Pam (2006) *Empty North: the Japanese presence and Australian reactions 1860s to 1942*. Darwin: Charles Darwin University.

- _____ (2008) 'Citizens without certificates or enemy aliens? Japanese residents before 1947' in Joan Beaumont *et al.* eds. *Under Suspicion: Citizenship and Internment in Australia during the Second World War*. Canberra: National Museum of Australia Press.
- Sissons, D. C. S. (1986) 'Muramats, Jiro (1878-1943)', *Australian Dictionary of Biography*. (<https://adb.anu.edu.au/biography/muramats-jiro-7689>)
- 竹田いさみ・永野隆之 (2023) 『物語オーストラリアの歴史—イギリス植民地から多民族国家への200年』中公新書。
- 田村恵子 (2016) 「ボタンから宝石へ—オーストラリアの南洋真珠養殖の始まり」村井吉敬他編著『海境を越える人びと』前掲、pp.97-117.
- _____ (2020) 「村松治郎とコサック」鎌田編『村松治郎』前掲、pp.39-56. / Tamura, Keiko (2020) 'Jiro Muramats and his Cossack', in Kamada ed. *Jiro Muramats, op. cit.*, pp.147-169.

II

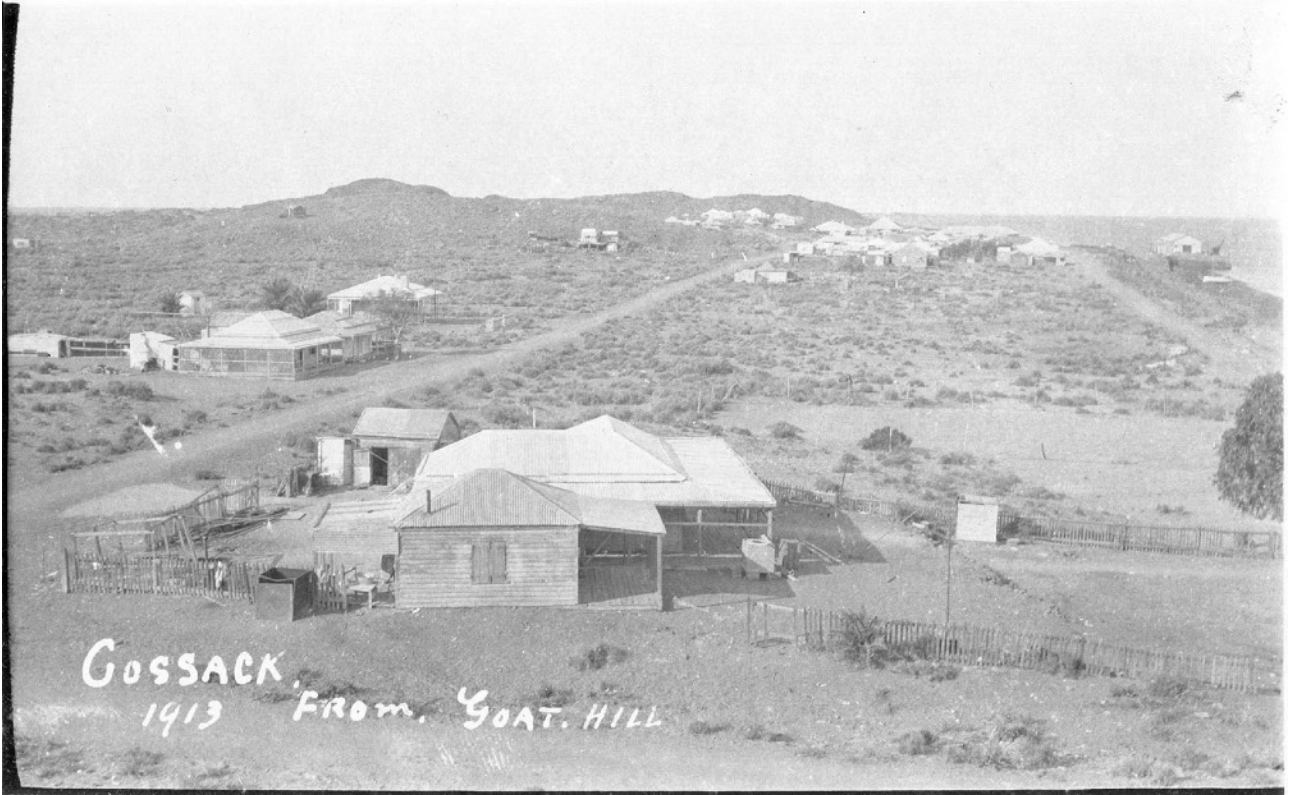
写真集

Photo Albums

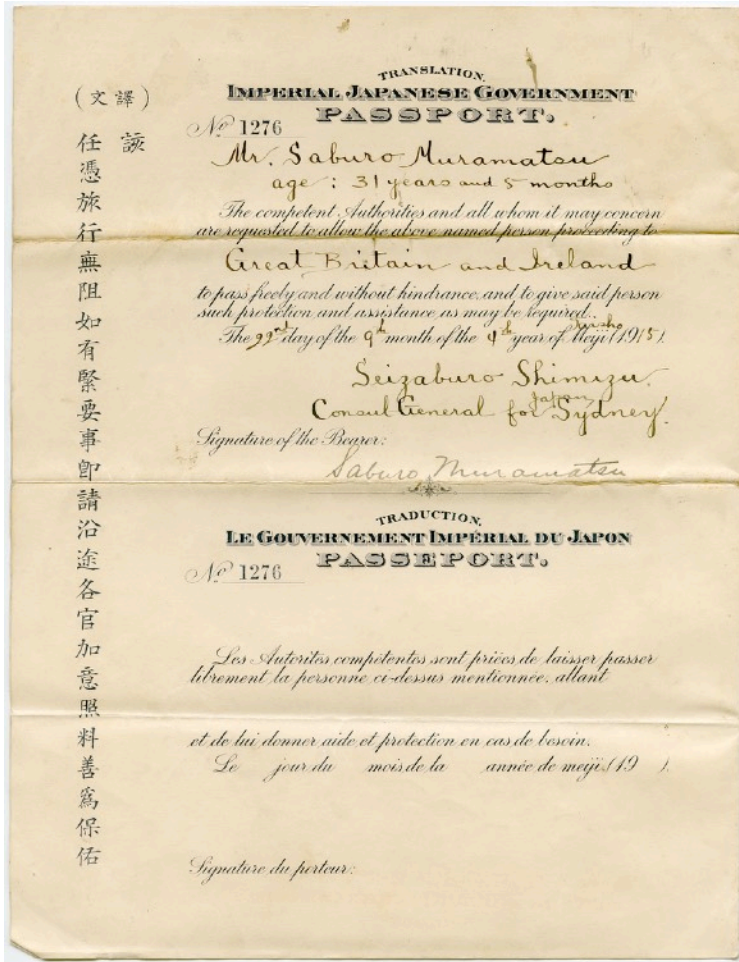
1. コサック (西オーストラリア)
Cossack (Western Australia)



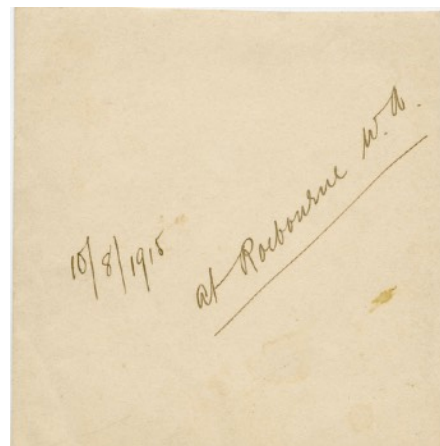
コサック全景 (1913年) : コサックのメイン・ストリートとハーディングス川を望む。(木下家所蔵) /
Panorama of Cossack (1913): View towards the main street of Cossack and the Hardings
River. (Courtesy of the Kinoshita Family)



ゴート・ヒルから望むコサック全景 (1913年) : 写真奥がコサックのメイン・ストリート。手間の建物の
あたりに日本人乗組員の宿泊所があった。(木下家所蔵) / Panorama of Cossack from Goat Hill
(1913) : In the distance is the main street of Cossack. The camp for the Japanese crew was
located near the building shown in the front. (Courtesy of the Kinoshita Family)



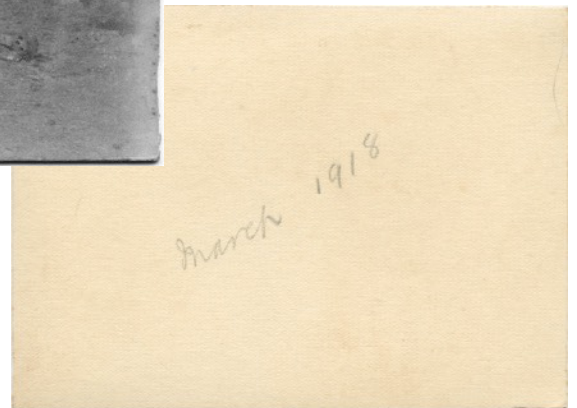
シドニーの領事館で発行された三郎の旅券（1915年）：「商業のため英国へ赴く」と記されているが、三郎は当年に日本に帰国後は英国に立出していない。（木下家所蔵） / Saburo's passport issued by the Japanese Consulate in Sydney (18 April 1907): This passport would have allowed the bearer (i.e. Saburo) to travel to Great Britain and Ireland to engage in commerce, but he did not travel there after he returned to Japan. (Courtesy of the Kinoshita family)



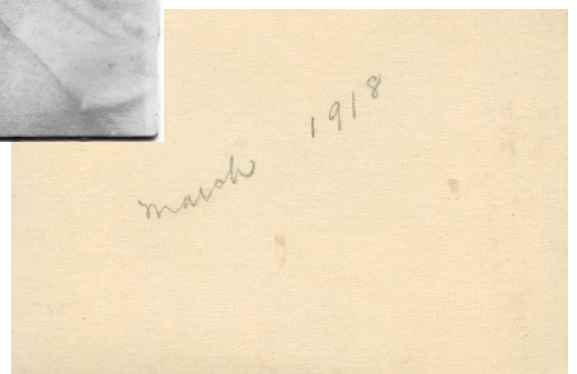
旅券用の三郎の写真、ローバンにて撮影された（1915年8月10日）（木下家所蔵） / Passport photo of Saburo (10 August 1915): Photographed in Roebourne. (Courtesy of the Kinoshita family)

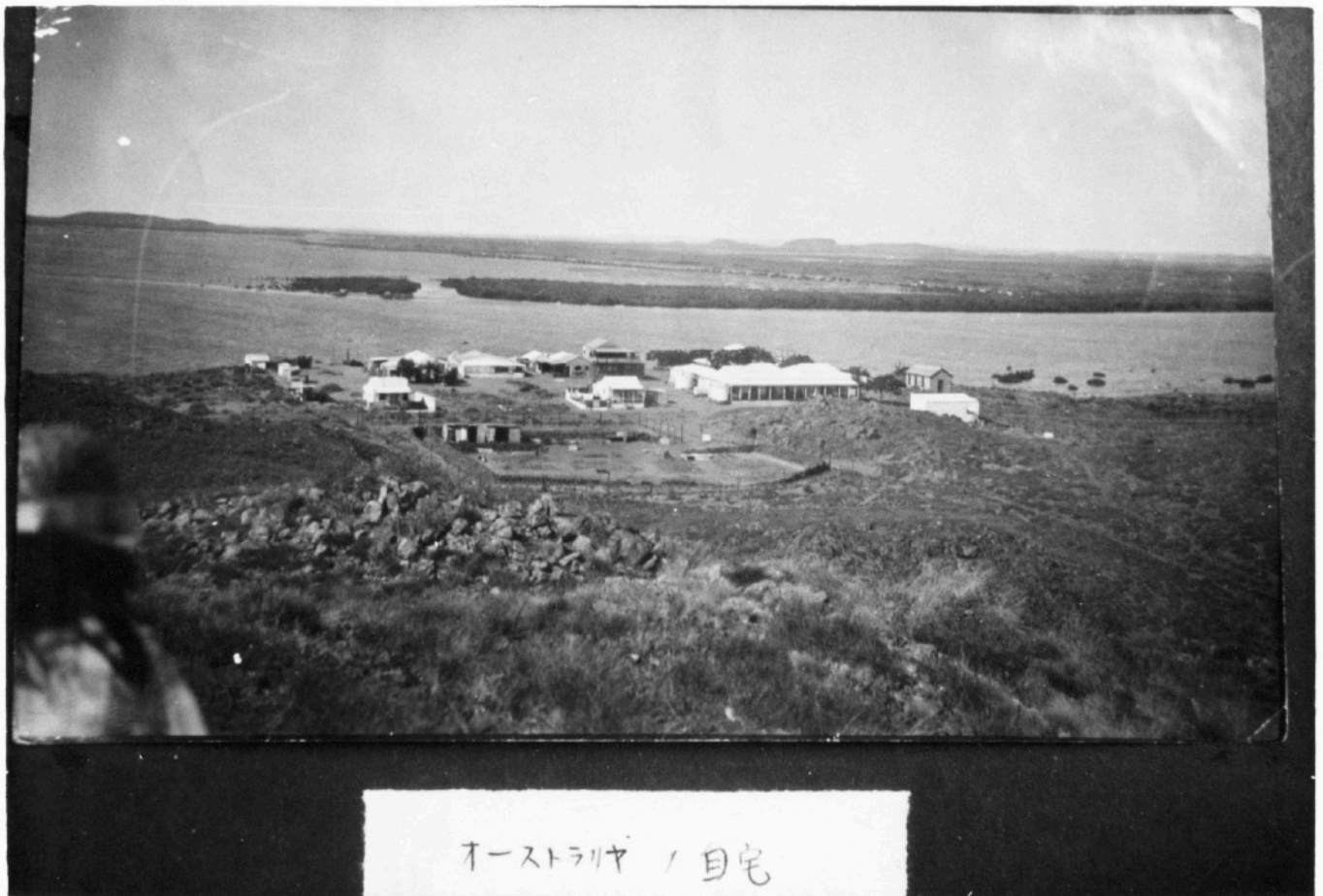


グレイシー号と三郎 (1918年) (木下家所蔵) / The pearling lugger 'Gracie' and Saburo (1918) (Courtesy of the Kinoshita



採貝船上の乗組員 (1918年) (木下家所蔵) / Crew on the pearling lugger (1918) (Courtesy of the Kinoshita family)



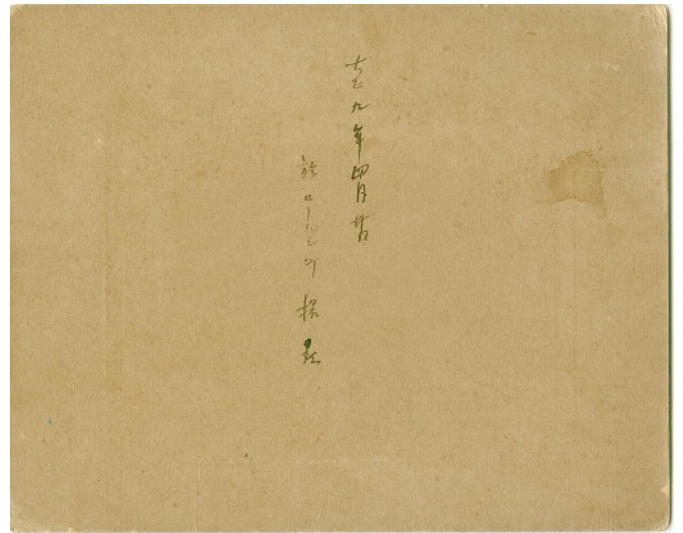


オーストラリア / 自宅

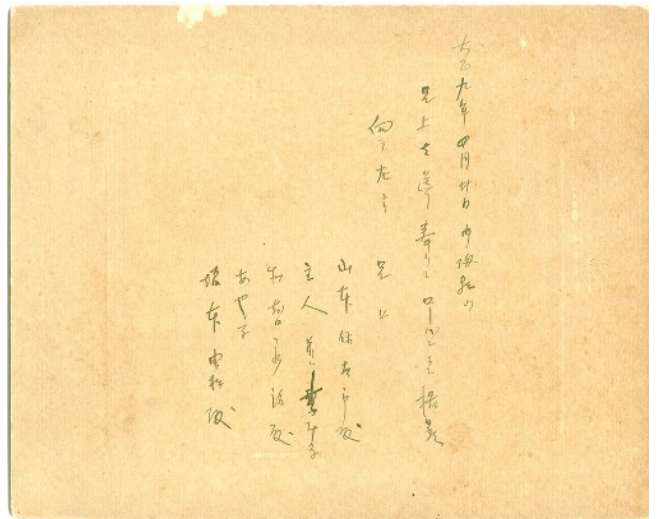
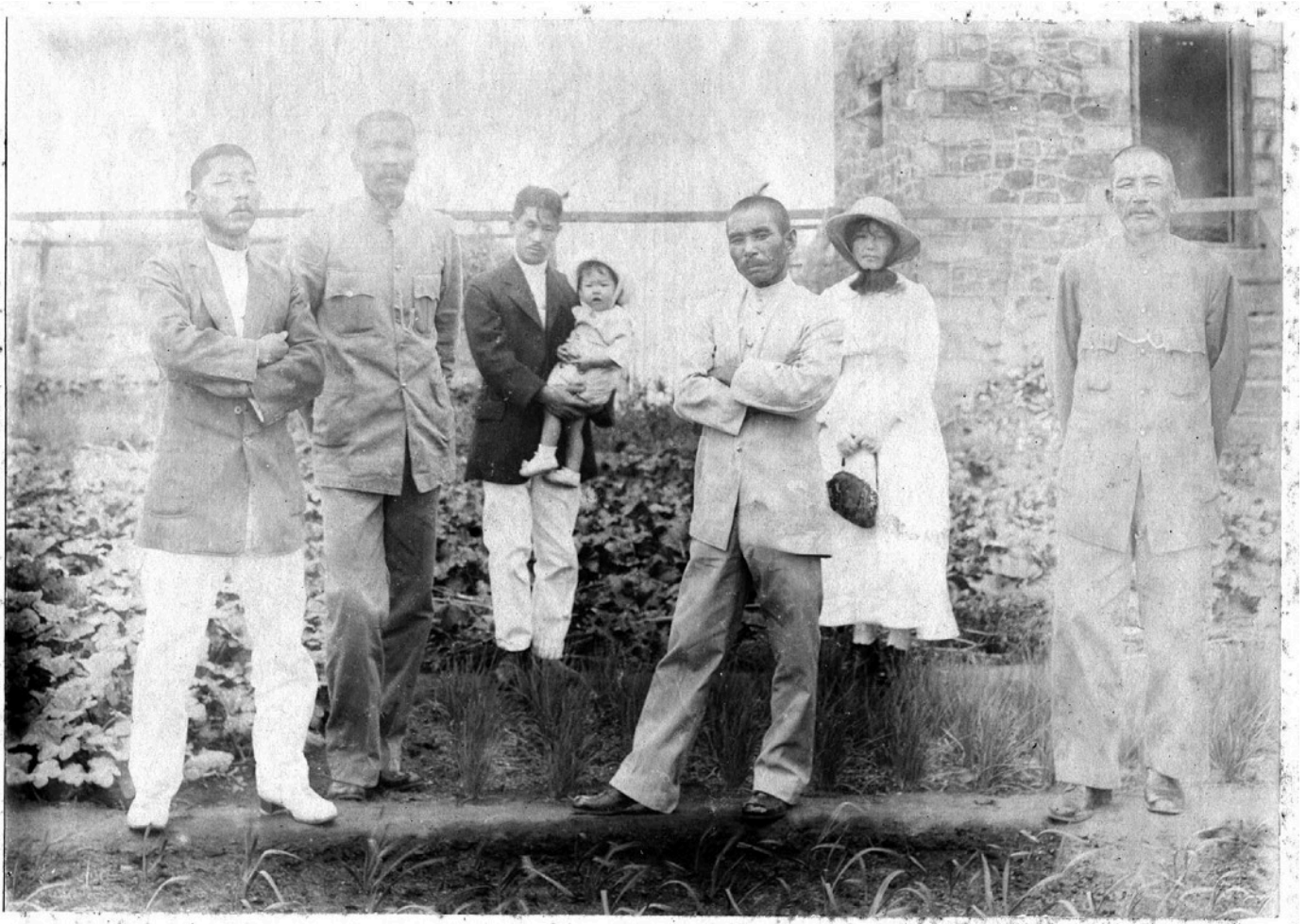
コサック全景（1917年頃）：「オーストラリアの自宅」と説明が付いているので、写真の建物群の手前真ん中あたりの建物が村松家の住居だと思われる。（木下家所蔵） / Panorama of Cossack (c 1917): Memo attached to the photo reads 'home in Cossack'. Muramats's house is in the front center of the photo. (Courtesy of the Kinoshita family)



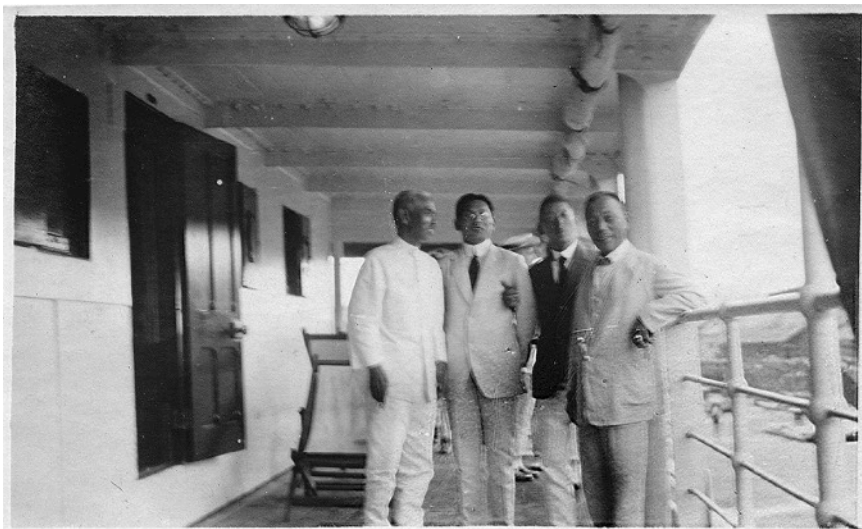
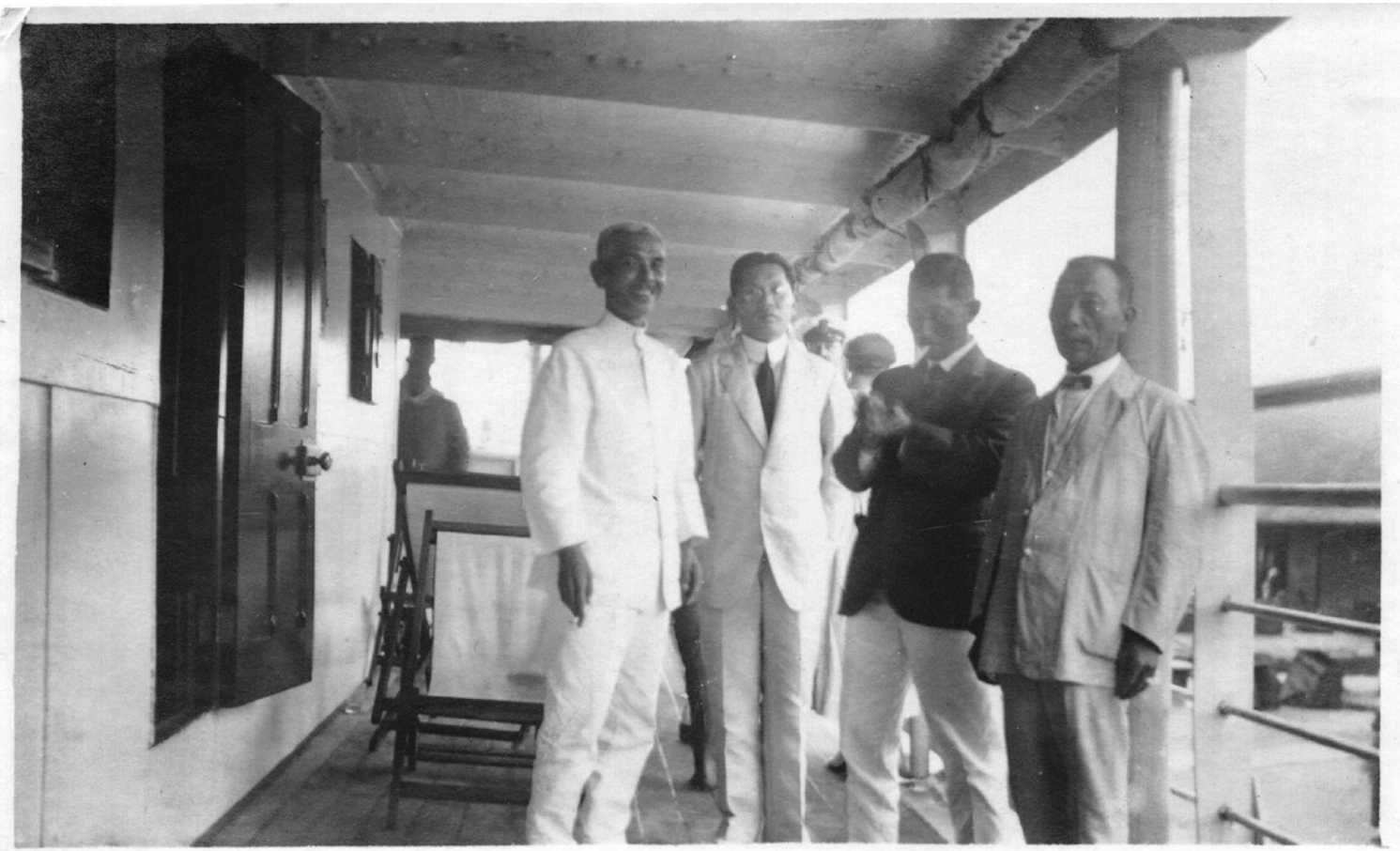
コサックの自宅前のアヤ、スミコ、三郎、治郎（1919年）
（木下家所蔵） / Aya, Sumiko, Saburo and Jiro, in front
of their house in Cossack (1919) (Courtesy of the
Kinoshita family)



治郎の日本への出立の見送り、ローバンにて撮影（1920年4月20日）：後列左から和智永治、治郎、三郎；前列左から山本保太郎、アヤ、スミコ、増本由松（木下家所蔵） / Send-off of Jiro for Japan in Roebourne (20 April 1920): Back row from left, Osamu Wachinaga, Jiro, Saburo; front row from left, Yasutaro Yamamoto, Aya, Sumikio, Yoshimatsu Masumoto. (Courtesy of the Kinoshita family)

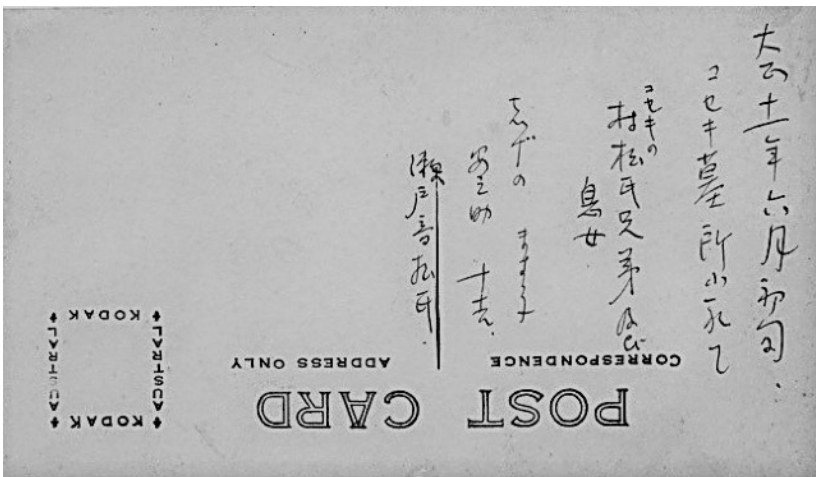


治郎の日本への出立の見送り、ローバンにて撮影（1920年4月20日）：左から治郎、山本保太郎、三郎、スミコ、和智永治、アヤ、増本由松（木下家所蔵） / Send-off of Jiro for Japan in Roebourne (20 April 1920): From left, Jiro, Yasutaro Yamamoto, Saburo, Sumiko, Osamu Wachinaga, Aya, Yoshimatsu Masumoto. (Courtesy of the Kinoshita family)



ジャパン号船上（1920年5月14日）：日本に向けてシンガポールを出港。治郎（右から2番目）と、左から見送りの得丸亀次郎、三浦（ブルーム得丸氏妻の実弟）、村上音松。撮影は台湾製糖の鳥井信平。（木下家所蔵） / On board the ship 'Japan' (14 May 1920): Jiro (second from right) leaving Singapore for Japan. Sending him off are, from left, Kamejiro Tokumaru, Miura (brother of Tokumaru's wife in Broome) and Otomatsu Murakami. Photographed by Nobuhei Torii of Taiwan Sugar Refinery. (Courtesy of the Kinoshita family)

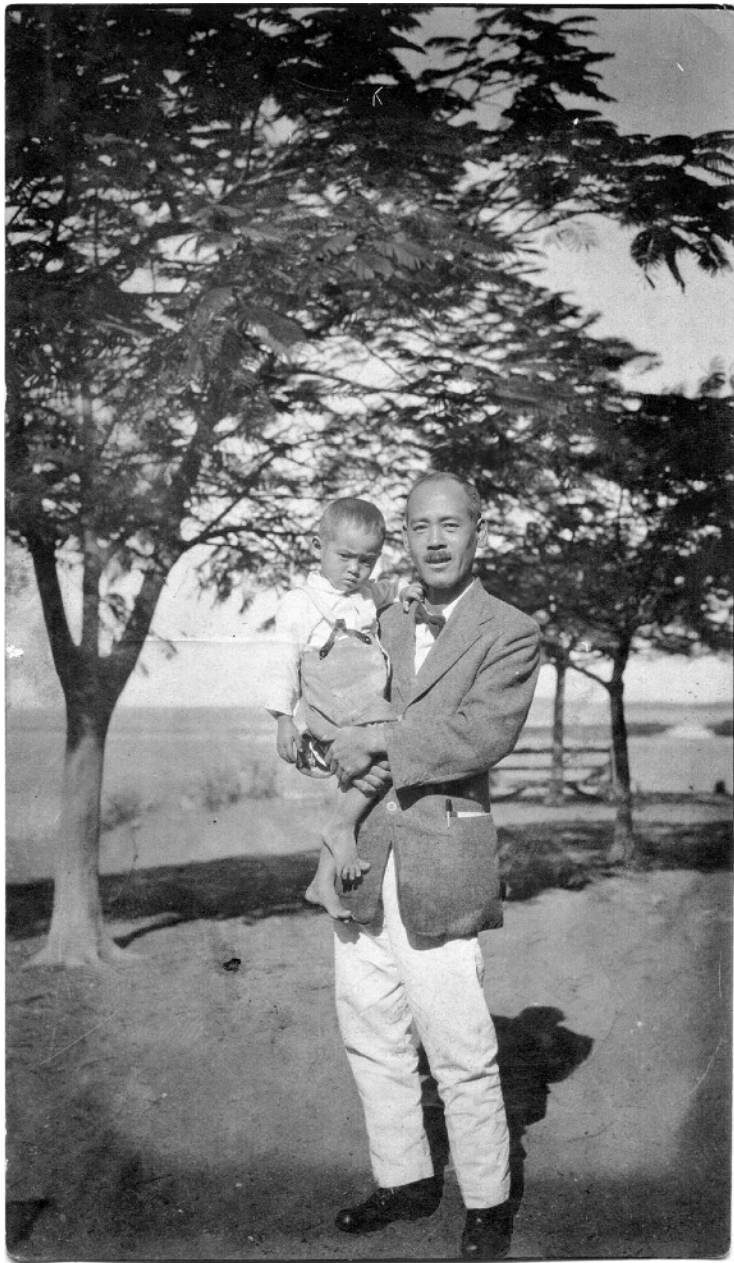
見送る 村上音松 君
 見送る 三浦 君 (ブルーム得丸氏妻の実弟)
 見送る 得丸亀次郎 君
 志在東京 昔年 午前 十時 始り
 東京 向 新嘉坡 去 帆 一 節
 幸 心 一 節 一 甚 幸 甚 幸 甚 幸
 鳥居氏 家 息



コサックの日本人墓地（1922年6月初旬）：村上シゲノの母の荒木チヨの墓参り。後列左から三郎、治郎、十吉を抱く村上シゲノ、瀬戸音松；前列の子ども左から村松スミコ、村上マスコ、村上安之助。撮影は村上安吉。（南瑠霞氏所有） / At the Japanese Cemetery in Cossack (Early June 1922): Photograph taken when Shigeno Murakami visited the grave of her mother, Chiyo Araki. Back row from left: Saburo, Jiro, Shigeno Murakami holding her son Jukichi, Otomatsu Seto; Children in front row from left, Sumiko Muramatsu, Masuko Murakami, Yasunosuke Murakami. Photographed by Yasukichi Murakami. (Courtesy of Ms Ruruka Minami)



村松作太郎の墓前の村上安之助と村松スミコ（1922年6月）：村上シゲノが母の荒木チヨの墓参りに一家でコサックに戻った時に撮影されたもの。撮影は村上安吉（木下家所蔵） / Yasunosuke Murakami and Sumiko Muramatsu in front of Sakutarō's grave (June 1922): Photograph taken by Yasukichi Murakami when Shigeno Murakami visited the grave of her mother, Chiyo Araki. (Courtesy of the Kinoshita family)



村上安吉と安之助（1922年）：コサック墓参の時のものと思われる。（木下家所蔵） / Yasukichi Murakami and his son, Yasunosuke (1922): Photo may have been taken when Shigeno Murakami visited her mother's grave in Cossack. (Courtesy of the Kinoshita family)



村上シゲノ、安之助、十吉、マスコ（1922年）：コサック墓参の時のブルームーコサック間の船上と思われる。（木下家所蔵） / Shigeno Murakami with her children, Yasunosuke, Jukichi, Masuko (1922): Photo may have been taken en route between Broome and Cossack, when Shigeno Murakami visited her mother's grave in Cossack. (Courtesy of the Kinoshita family)



J. & T. Muramats.
New Store
(old Customs House)
Feb 1939.

村松商会の新店舗、旧税関の建物（1939年2月）（木下家所蔵） / J & T Muramats's new store (the old Customs House) (Feb 1939) (Courtesy of the Kinoshita family)



コサック全景（2022年8月鎌田真弓撮影） /
Panorama of Cossack (Photo: Mayumi
Kamada, August 2022)



旧税関と村松商会跡：税関および保税倉庫
だった建物も村松が購入、一時期亀肉の
スープや加工場として使用された。手前の
建物も村松が購入。この区画は、1872年
にハウレット商店が建設されて以降、マク
レー社、ノースウェスト商店などコサック
の商業の中心であった。（2022年8月鎌田真弓
撮影） / Ruins of the old Custom House
and Muramats store. Muramats
acquired the old Customs House and
Bond Store, and the building was used
for a time as a turtle-meat processing
plant. Muramats also acquired the lot
and the building in front. Ever since
the Howlett's Store was built in 1872,
the site had been associated with
commerce in Cossack, such as McRae
& Co. and the North West Mercantile
Store. (Photo: Mayumi Kamada, August 2022)



村松住宅跡：コサックの衰退とともに、村
松はコサックの複数の地所を購入した。
（2017年9月鎌田真弓撮影） / Ruins of
Muramats' residence. Muramats
acquired many lots and buildings in
Cossack during the period of the
town's decline. (Photo: Mayumi Kamada,
August 2022)

1. コサック (西オーストラリア)

三郎の到着

コサックは村松治郎・ハツ夫妻にとってはオーストラリアの故郷であり、三郎・アヤ夫妻にとってはオーストラリアでの生活を経験した唯一の町であった。筆者の手元にあるコサックの写真の大半は、三郎の孫の木下安子さんの元に残されていたもので、コサックの自宅を望む遠景や自宅前の写真は、三郎一家のコサックでの生活の証しである。他方、残念ながら村松治郎・ハツ夫妻のコサックでの様子がわかる写真は、ほとんど残されていない。筆者の知る限りでは、三郎一家が自宅前で写した写真に治郎が写っているもの、1920年の治郎の一時帰国を見送ったローバンでの集合写真、1922年の村上安吉家族の墓参の折に安吉が写した写真、太平洋戦争後にコサックに戻ったハツが写るカラサ市図書館所蔵の写真¹のみである。

1910年に町制機能を失ったコサックは、村松商会がなければ1920年代に廃村になっていたかもしれない。三郎が日本に送ったのであろう1913年と記されたコサックの全景の写真には、旧税関、裁判所、郵便局、ホテルや住宅が写っているが、かつて1,000人以上の人口を擁した町の面影は認められない。コサックの人口減少とともに、治郎は所有する地所も増やしていった。商店の店舗もジャップタウンと呼ばれていた区画から中心部に移し、居宅も構えた。

治郎は1905年にコサックで野口ハツと結婚(日本での届出は1910年)、1913年に一人娘のハル(Marie Haru/美子)が生まれた。1913年には弟の三郎を呼び寄せ、1917年には一時帰国をした三郎が妻アヤを伴ってコサックに到着、1918年に三郎・アヤ夫妻の一人娘のスミコ(Joyce Sumi/すみ子)が生まれた。三郎夫妻は治郎夫妻と同居していたようである。帳簿に残る1918年時点での所有する家具類のリストから、住宅は3つの寝室(そのうち1部屋は三郎夫妻用)、ダイニングルーム、居間、台所、バス・トイレという間取りだったことがわかる。

コサックでの生活はアヤにとっては過酷なものであっただろう。アヤが育った瀬戸内地方とは異なる厳しい自然環境で、街の生活のような楽しみはなく、ハツや治郎・三郎以外の話し相手はほとんどいない。しかも幼子を抱えていた。サンドフライと呼ばれるブヨの仲間の痒みは強烈で、発生が少ない乾季の調査時ですら私たちを悩ませた。コサックの写真のアヤは、結婚した当時のふっくらとした面影はなく、日焼けをして、心なしかやつれているように見える。

当時のコサックは人口が激減し、町の学校は廃校になっていたし、小さな子どものいる家族は皆無だった。さらに当時は、外地で活躍する日本人商人は可能な限り子弟教育を日本で受けさせることが一般的であったので、治郎はハルを作太郎の故郷の藤枝に戻し、ハルの養育を治郎の叔母のコウに委ねた。ハルとハツは1920年1月に出立²、治郎は1920年4月から8ヶ月間日本に一時帰国した。長期にわたって、治郎がコサックを留守にできたのは、信頼がおける三郎に商

¹ カラサ市立図書館所蔵、Mrs Mramat (sic): 2017_1054, 2017_1053, 2017_1052.

² ハルの渡航の際に発行された口述試験免除証書(CEDT)によると、ハルは1919年1月4日にポイント・サムソンを出港と記載されているのだが、松本による「日記」(治郎の1920年の帰国の際の覚書)の精査と藤枝西高等学校への照会で、ハルの出港は1920年1月4日、CEDTは誤記である結論した。このハルの帰国にはハツも同行したはずだが、ハツのCEDTは残っていない。

店経営と帳簿管理を任せられたからだ。三郎一家は、娘のスミコの小学校入学にあわせて1924年にオーストラリアを離れた。

コサックの村松商会

治郎がコサックに到着したのは1894年のことである。父作太郎はコサックのチャイナタウンと呼ばれた（後にジャップタウンとも呼ばれた）区画で商店を経営していた。当時はブルームでも商店経営をしていて、治郎より先に渡豪した兄の常太郎が切り盛りをしたようである。父の急死に伴い、治郎は作太郎の商店を継承する。同時に帰化申請も行い、ヴィクトリア植民地で帰化が認められた。1899年には、相続手続きのために日本に4ヶ月ほど帰国、兄の常太郎はコサックに一旦戻って村松商会（J & T Muramats）を立ち上げるとともに、相続を放棄して治郎に経営を任せた。

治郎が亡父から事業を引き継いだ19世紀末は、真珠貝漁の拠点はブルームへと移り、ピルバラ地域における金採掘ブームも終了して、コサックは衰退期を迎えていた。加えて1904年に外洋に面したサムソン岬に新しい棧橋が開設されて、コサックは主要港としての役割も終えた。そうした中で、治郎はコサックの地所や経営困難に陥った真珠貝事業者から採貝船を買い取って事業を拡大していった。三郎が写る採取貝船（ラガー）C28（グレイシー号）はそのうちの一隻である。村松が所有する船での漁に加えて、白人船主から預かった船や抵当に入っている船を運用したり、あるいは真珠貝の輸出を代行したりして、コサックでの真珠貝事業を下支えした。

1920年代になると、契約労働者を除けばコサックの人口は20人程度となり、灯台のあるジャーマン島も含め、コサックの地所の大半は治郎が所有していた。「村松の新規店舗 旧税関、1939年2月」と裏書きされている写真の建物は1897年に建設されたもので、税関および保税倉庫として使われた後、治郎が購入していた。1924年からは亀肉のスープや缶詰の加工場として使用されたのだが、いずれの会社も倒産に追い込まれ、1935年に加工場は閉鎖された³。

日本人商人のネットワーク

19世紀後半のコサックには100人以上の日本人が暮らしていて「呵喏（コサック）同盟会」が組織され、村松作太郎が初代会頭を務めた。役員には、西岡高蔵や得丸新五郎・亀次郎といった商人の名前がある。作太郎の死の直後の1898年と1903年には、同盟会が寄付を募って日本人墓地の修復を行った。第一回目の修復の際には、村松商店8ポンド、西岡商店5ポンド、得丸商店2ポンド10シリングを含め、1ポンド以上の寄付は38件あり、こうした多額の寄付者は居住許可を持って現地でビジネスをしていた可能性が高い。コサックの日本人墓地でひととき目を引くのが作太郎の墓である。村上安吉の妻シゲノの母、荒木チヨもこの墓地に眠る。木下家には、表紙の写真も含め、1922年の墓参の際に村上安吉が撮影した写真が複数枚残されてい

³ Brooke Halkyard 'Exploiting Green and Hawksbill Turtles in Western Australia: The Commercial Marine Turtle Fishery' in Joseph Christensen and Malcolm Tull eds. *Historical Perspectives of Fisheries Exploitation in the Indo-Pacific*, Dordrecht: Springer Link, 2014, pp.214-215.

る。

1920年に日本に出立する治郎の見送りの際のローバンでの集合写真には、三郎一家と和智永治、山本保太郎、増本由松が写っている。豪公文書館の記録では、増本は大工となっているが、小商人でもあったようだ。1893年にコサックに到着、作太郎の時代から村松とは交流がある人物だった。増本は二回目の日本人墓地修復寄付名簿にも名前があり、1ポンドを寄付している。また、第15期(1905年1-6月)から第19期(1907年1-6月)まで「呵喏同盟会」の会頭を務めた。1920年の帰国の際に経由したシンガポールでは、治郎は増本に依頼された時計の修理や種々のサイズの地下足袋の注文などを行っている。和智永は、前述の藤田健児の記録によれば、村松商会の採貝船のボースンや輸送船の乗組員も務めていて、年季契約労働者ではない。治郎が一時帰国の際は、九州の和智永家に預かり物の土産を届けているので、親密な関係にあった人物だといえる。また帳簿の記録から、和智永は治郎が名義貸しを受けていた船を運用していたことがわかる。山本は、帳簿の中に人名勘定がある Y Yamamoto ではないかと思われるが、確証はない。もし Y Yamamoto だとすれば、村松からは洗濯代や賃金などが支払われているし、他の日本人との貸借関係も含め村松が取支の管理をしているので、やはり居住許可を持った労働者あるいは小規模事業者だった。

1920年に一時帰国した際の寄港地だったシンガポール出港の際の写真も、当時の南洋での日本人商人のネットワークの断片を見るようで興味深い。ジャパン号の船上には、治郎と共に、見送りに来た得丸亀次郎、三浦(得丸の義弟)、村上音松が写っている。得丸亀次郎は上述のようにコサックの時代からの旧知で、その後兄新五郎とともにブルームを拠点として得丸兄弟社を設立し、パースやメルボルンやシンガポールに支店を展開した。また、村上音松は、村松の帳簿に O Murakami と記載がある人物かもしれない。同一人物だとすると、1915年の時点で治郎が1,600ポンド近くを貸しているので、村松商会との取引があった人物だといえる。

ジャパン号の船上の写真の裏には治郎の直筆で、台湾製糖の鳥居氏が写真を撮ったとの説明がある。台湾製糖⁴の鳥居信平⁵といえ、サトウキビの安定供給のために台湾に地下ダムを作って土地改良事業で名を残した人物で、治郎の故郷の藤枝に近い袋井の出身である。土地改良事業のためにインドネシアを視察した途次に、シンガポールで治郎に偶然出会したのであろうと松本は推測している(松本 2020)。シンガポールや香港では、依頼のあった品物の買い付けや、商談、日本への土産物の購入など、さまざまな用事を果たした。

また、1920年の一時帰国の際の治郎の「日記」によれば、日本出立の際には、山崎栄治郎夫妻の見送りを受けている。山崎栄治郎は、1897年から15年ほどブルームで過ごし、その後シンガポールに拠点を移して日本ホテルやジョホールでのゴム園を経営していた。さらに治郎は、島田次郎作からも賤別をもらっている。島田次郎作は京都で卸売商店を営んでいて、西オーストラリアの日本人商人に品物を輸出しており、治郎も直接の取引があった(松本 2020)。村松商

⁴ 日本の植民政策として台湾の産業振興の中心に糖業を奨励し、台湾総督府主導のもと、三井財閥が資本を拠出して1900年に「台湾製糖」が設立された。設立の際は日本政府も補助金を給付しており、準国策会社といえる。

⁵ 「袋井出身の偉大な水利技師 鳥居信平ものがたり」『広報ふくろい 2009』
(https://www.city.fukuroi.shizuoka.jp/material/files/group/84/H210115_P07.pdf) 2023年2月17日閲覧。

会の帳簿によれば、コサックで扱った商品の買付先の大半はオーストラリア企業であったのだが、特に日本からの輸入品に関しては島田次郎作商店に加えて、関南商会⁶に発注していた。アスベストは、真珠貝の仲介もしていたオットー・ガードー社（Otto Gerdau Company）を介して輸出しただけでなく、神戸のニッサ商会に直接輸出をしていた。

オーストラリア人としてのビジネスを目指した治郎ではあったが、日本人商人との協力や彼らに対する配慮を忘れたわけではなかった。それどころか、商店経営においても日本人契約労働者の雇用においても、日本人商人のネットワークにおいても信用を築きながらビジネスを展開していたといえる。

戦後のハツとコサック

ハツは太平洋戦争後の1946年2月に解放され、治郎との結婚で英国臣民であったので日本に強制送還されることはなく、10月にコサックに戻った。ハツが解放と同時に日本への帰国を選択しなかったのは、治郎の遺産処理をしようとしたからかもしれない。治郎は没する前に弁護士を通して遺産はハツが相続する旨の遺書を作成していた。

コサックに戻ったハツは、旧税関の建物の一部を住まいとして利用した。カラサ市図書館には、当時のハツの写真が保管されている。一時期、同じくタツラ収容所から解放された村上安吉の長女梶子・義雄夫妻と子供たちが身を寄せていた。ハツのコサックへの帰還は地元の歓迎を受けるものではなかったし、戦争中に住まいは荒らされ、望郷の念を強くしていたようだ。

木下家には、ハツから姪のスミコに宛てた手紙が残されている。日付がないのだが「二年前にコーセキへ帰り」とあるので、おそらく1948年頃であろう。

二年前コーセキ（コサック）へ帰り、驚きました。何もかも盗まれ、在るものは皆破壊され、窓ガラス一枚残らず壊され、家の中は帳簿やら書類、手紙破られ、踏みにじられ、足の踏み場もなく、調べもつかず、皆焼き捨てました。ほんとうに見る影もなく、あばら家同然。コーセキも以前に変わり、家も皆で四軒あるのみ。住まいする人もなく、見知らぬ外人二名と私が住むのみ。日用品は十日に一度、ローバンへ買いに行かなければならず、誠に不自由なこと限りなく、ちょうど島流しにあっているような気持ちです。又、ダウワン（ダーウィン）の家も船も、皆爆撃されて、何一品残らず、なくなりました。残るは私一人、只今は、はした布一寸も無し。おもわば、主人のありて、日本思い出され、涙ももよおすこと、しばしば。日本人の方もほとんど返され、残るはわずか、それも近くに無く、頼る人も無し。お話する方も無く、寂しく暮らしております。もし病気になりましたら、そのときが思いやられ、日本へ帰りたくても、ただ今は、それもできず、早く平和条約ができねば、困ります。

70歳近い年齢での廃墟となったコサックでの暮らしは、戦争がオーストラリアの故郷をハツから奪ってしまったことを痛感させる。1957年に日本に帰国するまで、ハツは文字通りコサックの最後の住民であった。

⁶ 第一次大戦後の不景気と真珠貝採取業の不振の影響を受けて、得丸兄弟社に勤めていた梅田信太郎によって、得丸兄弟社とブルームの複数の商店が一緒になって関南商会が設立された。

1. Cossack, Western Australia

The Arrival of Saburo

Cossack was considered by Jiro and Hatsu Muramats to be their home in Australia. It was the only place where Saburo and Aya experienced life in Australia. Most of the photographs of Cossack examined by the author were in the possession of Saburo's granddaughter, Yasuko Kinoshita. Images of the front of his house as well as distant views from his home attest to the life and existence of Saburo's family in Cossack. Unfortunately, there are few photographs of Jiro and Hatsu that offer an insight into their lives in Cossack. As far as the author is aware, the only photographs of Jiro are: 1) one with Saburo and his family in front of their house; 2) group photographs taken in Roebourne in 1920 to see Jiro off on his temporary return to Japan; 3) some taken by Yasukichi Murakami in 1922 when his family visited the grave of Yasukichi's mother-in-law. A few photos of Hatsu after her return to Cossack at the end of the Pacific War are housed in the Karratha City Library.¹

Cossack lost its status as a municipality in 1910, and were it not for the presence of the J & T Muramats company, the town would have been abandoned in the 1920s. The panoramic views of Cossack taken in 1913, probably sent to Japan by Saburo, show the old customs house, the courthouse, the post office, as well as hotels and houses, it is no longer recognizable as a town that once had a population of over 1,000 people. As the population of Cossack declined, Jiro increased his land holdings. He moved his shop from the area known as 'Jap Town' to the centre of the town and also acquired a house for his family.

Jiro married Hatsu Noguchi in 1905 in Cossack (marriage registered in Japan in 1910) and their only daughter Haru (Marie Haru / 美子) was born in 1913. In the same year, he called his younger brother Saburo over, and in 1917 Saburo revisited Cossack with his new bride, Aya, after a short return to Japan. In 1918 their only daughter Sumiko (Joyce Sumi / すみ子) was born. It seems that Saburo's family lived with Jiro. According to a list of furniture from 1918, which was found in the ledgers of J & T Muramats, the house had three bedrooms, one of which was Saburo and Aya's, a dining room, a living room, a kitchen, and a bathroom.

Life in Cossack must have been difficult for Aya. The environment was very different from the Setouchi region in Japan where Aya grew up, with no pleasures like city life and few people to talk to other than Saburo, Hatsu and Jiro. Furthermore, she had a little child. There were sandflies that caused extreme itchiness, which troubled us greatly during

¹ Karratha City Library, Mrs Mramat (*sic*): 2017_1054, 2017_1053, 2017_1052.

research trips even in the dry season when there were fewer outbreaks of these insects. In the photographs of Aya taken in Cossack, she appears sunburned and somewhat tired. She also looks thinner than she did when she got-married.

At the time, the population of Cossack had drastically declined. The town's school had closed, and there were no families with small children. Furthermore, Jiro sent Haru back to Sakutaro's hometown, Fujieda, and entrusted his aunt, Koh, with the upbringing of Haru, as it was common practice for Japanese merchants abroad to have their children educated in Japan. Haru and Hatsu left for Japan in January 1920,² and Jiro went back for 8 months from April 1920. Jiro was able to be away from Cossack for such a long period of time because he felt he could leave the management of the company and the bookkeeping to Saburo. Saburo's family left Australia in 1924 to coincide with the start of primary school for their daughter Sumiko.

J & T Muramats in Cossack

Jiro arrived at Cossack in 1894. His father, Sakutaro, was running a store in China Town (later called Jap Town) in Cossack. Sakutaro also had ran a store in Broome at the time, and Jiro's older brother, Tsunetaro, who arrived in Australia before Jiro, was managing it. With the sudden death of his father, Jiro inherited the store. He also applied for ~~the~~ naturalisation as a British subject, and the Colony of Victoria approved his application. In 1899, Jiro returned to Japan for four months for inheritance procedures. Tsunetaro returned to Cossack for a while, renounced their father's estate, and inaugurated the J & T Muramats, of which management was left to Jiro.

At the end of the 19th century, when Jiro took over the business from his late father, Cossack was in decline: the base of the pearling industry had moved to Broome, and the gold mining boom in the Pilbara region had ended. Moreover, a new jetty was built in Point Samson facing the open sea, which ended the role of Cossack as a major port in the region. Despite the decline of the Cossack economy, Jiro continued to acquire land in Cossack and to expand his pearling business by purchasing pearling boats from pearl-ers who were experiencing financial problems. The lugger C28 (the *Gracie*) in the photograph with Saburo was one of those vessels. J & T Muramats propped up pearling in Cossack by fishing with his own luggers, operating mortgaged vessels or those owned by 'white' pearl-ers, and exporting pearl-

² According to the Certificate of Exemption from Dictation (CEDT) issued at the time of Haru's departure, Haru left Point Samson on 4 January 1919. But with Matsumoto's examination of Jiro's 'diary' (Jiro's notes on his return to Japan in 1920), and enquiry to Fujieda Nishi High School, we concluded that Haru left on 4 January 1920, and it was misrecorded on the CEDT. Hatsu must have accompanied Haru, but there was no Hatsu's CEDT for this trip was found.

shells on their behalf.

In the 1920s, the population of Cossack excluding indentured workers was around twenty, and most of the land, including Jarman Island was owned by Jiro. The building noted as J & T Muramats new store (the Old Customs House) on the back of its photograph was built in 1897, and was purchased by Jiro after having been the Customs House and Bond Store. In 1924, the building was used as a factory for canning turtle meat and turtle soup, but the companies that owned the factory went bankrupt, and it was closed in 1935.³

Networks among Japanese Merchants

In the late 19th century, more than 100 Japanese people lived in Cossack, and the Cossack Japanese Association was formed. Sakutaro Muramatsu served as its first director. The executive members included some merchants such as Takazo Nishioka, Shingoro Tokumaru, and Kamejiro Tokumaru. After the death of Sakutaro, the association collected donations in 1898 and in 1903 to restore the Japanese cemetery. For the first restoration, the Muramatsu store donated eight pounds, the Nishioka store five pounds, and the Tokumaru store 2 pounds and 10 shillings. There were thirty-eight donations of more than one pound, and these large donors were likely doing business with resident permits. Sakutaro's grave was the most distinctive one in the Japanese cemetery. Chiyo Araki, the mother of Murakami Yasukichi's wife Shigeno was also laid to rest there. In the Kinoshita family, there were a few photographs, including the one on the front page, taken by Yasukichi Murakami, when the family visited Chiyo's grave.

A group photograph of Saburo and his family with Osamu Wachinaga, Yasutaro Yamamoto and Yoshimatsu Masumoto was taken in Roebourne in 1920. They had assembled there to see Jiro off on his departure for Japan. Records in the Australian Archives showed Masumoto to be a carpenter but he also appeared to have been a small-scale merchant. He arrived in Cossack in 1893 and had been in close contact with Sakutaro. His name appeared in the Japanese cemetery restoration donation list. He had donated one pound. He also served as director of the Cossack Japanese Association from its 15th term (January to June 1905) to the 19th (January to June 1907). On his way back to Japan, Jiro went to Singapore where he had Masumoto's watch repaired and ordered *Jikatabi* (rubber-sole heavy cloth shoes with split toes) in various sizes, at the request of Masumoto. Wachinaga, according to Fujita's memoir mentioned above, worked as a boatswain on a pearling lugger and as a crew

³ Brooke Halkyard, 'Exploiting Green and Hawksbill Turtles in Western Australia: The Commercial Marine Turtle Fishery' in Joseph Christensen and Malcolm Tull eds. *Historical Perspectives of Fisheries Exploitation in the Indo-Pacific*, Dordrecht: Springer Link, 2014, pp.214-215.

member of a cargo boat owned by Muramats. But he was not an indentured worker. While Jiro was in Japan, he travelled to Kyusyu and delivered souvenirs to the family on behalf of Wachinaga. It shows that Jiro had close relations with Wachinaga. Furthermore, the entries of the J & T Muramats account books indicate that Wachinaga operated a lugger used by Muramats that was actually registered to a 'white' pearler. Yamamoto seems to refer to a Y. Yamamoto whose name is entered into the personal accounts ledger of J & T Muramats. Muramats paid for laundry fees and wages to Y. Yamamoto, and managed his income and expenditures, along with those of other Japanese. Yamamoto was likely running a small business with a resident permit.

Photographs of Jiro's departure from Singapore, which he visited on his way back to Japan in 1920, reveals a part of the network of Japanese merchants in *Nanyo* (literarily means the South Seas, that is Southeast Asia) at the time. There is a photograph of Jiro onboard the *Japan*, with Kamejiro Tokumaru, Miura (brother-in-law of Tokumaru), and Otomatsu Murakami, who came to see him off. Kamejiro Tokumaru was an old acquaintance from his Cossack days, as mentioned above, and he and his older brother Shingoro set up Tokumaru Bros. based in Broome, and later opened branches in Perth, Melbourne, and Singapore. Otomatsu Murakami may be a person whose name was in the entries of the J & T Muramats account books. If it was the same person, he could have had dealings with the Muramats, as Jiro lent him nearly 1,600 pounds in 1915.

On the back of the photo on board the *Japan*, Jiro wrote that it was taken by a Mr. Torii of Taiwan Sugar Refinery. Nobuhei Torii⁴ of Taiwan Sugar Refinery⁵ was a man who made a name for himself by building underground dams in Taiwan to ensure a stable supply of sugarcane, as part of a land reform project. He was born in Fukuroi, a town located close to Jiro's hometown, Fujieda. Matsumoto presumes that he met Jiro by chance in Singapore while on an inspection tour of Indonesia for a land reform project (Matsumoto 2020). In Singapore and Hong Kong, Jiro fulfilled various attending to errands, such as attending business meetings, and buying requested goods and souvenirs to Japan.

According to Jiro's 'diary' written during his trip to Japan in 1920, he was seen off by Eijiro Yamazaki and his wife on his departure from Japan. From 1897, Eijiro Yamazaki lived in

⁴ 「袋井出身の偉大な水利技師 鳥居信平ものがたり」『広報ふくろい 2009』

(https://www.city.fukuroi.shizuoka.jp/material/files/group/84/H210115_P07.pdf) accessed on 17 February 2023.

⁵ The Taiwan Sugar Refinery was founded in 1900 with capital provided by the Mitsubishi Zaibatsu, under the leadership of the Office of the Governor-General of Taiwan. As a part of Japan's colonial policy, the sugar industry was promoted in order to encourage the development of other industries in Taiwan. The Japanese government provided subsidies to found the company, so it was a semi-state-run company.

Broome running a business for 15 years, and later moved to Singapore to run the Japan Hotel there and a rubber plantation in Johor. Moreover, Jiro received a parting gift from Jirosaku Shimada. Jirosaku Shimada ran a wholesale store in Kyoto and exported goods to Japanese merchants in Western Australia. Jiro also had direct dealings with him (Matsumoto 2020). According to the account books of J & T Muramats, most of the goods Jiro was selling in Cossack were purchased from Australian companies, but some imported goods from Japan were ordered from both Shimada Jirosaku's store in Kyoto and Tonan Shokai⁶ in Broome. Jiro exported asbestos directly to the Nissa Company in Kobe, as well as through the Otto Gerdau Company which was the main agent for exporting pearl-shells from Western Australia.

While Jiro aspired to be an Australian businessman, at the same time he never neglected to cooperate with and to show consideration for his fellow Japanese merchants. Whether it involved the management of his store, the employment of Japanese indentured labourers, or the network of Japanese merchants, he developed his business while building trust in his relationships.

Hatsu in Cossack after the War

Hatsu was in detention with Jiro during the Pacific War. She was released in February 1946, and returned to Cossack in October. She was not deported to Japan as she was a British subject by marriage to Jiro. Hatsu did not choose to return to Japan upon her release, perhaps because she wanted to deal with her inheritance from Jiro. Before his death, Jiro had written a will through his lawyer stating that Hatsu would inherit his estate.

Back in Cossack, Hatsu used part of the Old Customs House as a residence. The Karratha Municipal Library has a few photographs of Hatsu from that period. For a time, Masuko, the eldest daughter of Yasukichi Murakami, took shelter there after she was released from the Tatura camp, with her husband Yoshio Murakami, and their children. Hatsu's return to Cossack was not welcomed by the locals, and her residence was looted during the war. She must have felt lonely, which made her long to go home to Japan.

A few letters from Hatsu to her niece Sumiko are in the possession of the Kinoshita family. There is an undated letter with the notation, 'returned to Cossack two years ago', so it was probably written around 1948, in which it is written:

⁶ Tonan Shokai was established by Nobutaro Umeda who worked for Tokumaru Bros., by amalgamating Tokumaru Bros. and several other stores in Broome, due to the recession and decline of the pearling industry after WWI.

I returned to Cossack two years ago. It was shocking to see the state of our house. Things inside the house were stolen and looted. All the windows were broken. Papers, books, and letters were all destroyed. I burnt them all because I could not identify most of them. It really is a miserable shack. Cossack has also changed and there are only four other houses left. No other people apart from two strangers and myself live here. I have to go to Roebourne for shopping every ten days. Very inconvenient. I feel just like being on a desert island. The house and ships in Darwin were all bombed, and I lost everything there. I am all alone and do not have even a small piece of cloth. I often weep, remembering the times with my husband and when I was in Japan. Most of the Japanese were deported and few left. And none of them live close here. I have no one to talk to and live lonely. If I were to get sick, there would be no one to look after me. I am very worried about the future. I wish I could go back to Japan. I hope that a peace treaty will be signed soon.

Living in the ruined Cossack at the age of nearly 70 was the painful reality that the war had taken Hatsu's home in Australia. By the time she left for Japan in 1957, Hatsu was literally the last resident of Cossack.

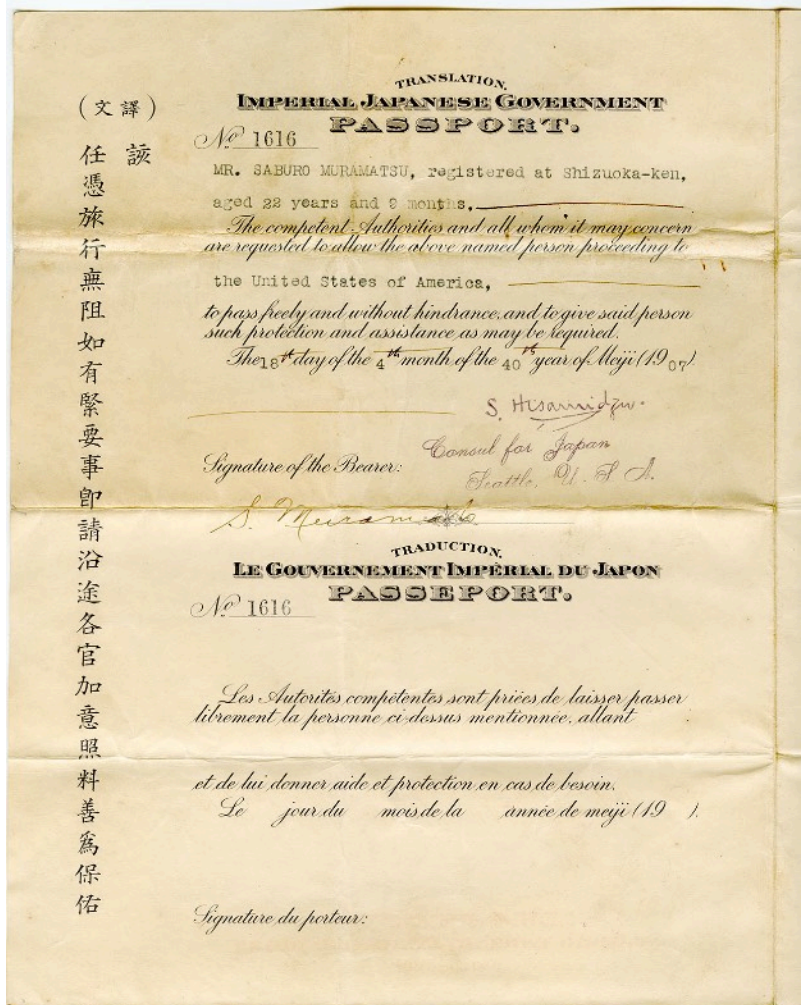
2. 日本の故郷：神戸と藤枝（静岡）
Homes in Japan: Kobe and
Fujieda (Shizuoka)



三郎20歳の時の記念写真（1904年）：ヤス、三郎、ウタ。神戸、小島写真館にて撮影（木下家所蔵） / Commemorative photo of Saburo, at age 20 (1904) : Yasu, Saburo, and Uta. Photographed at Kojima Photo Studio in Kobe. (Courtesy of the Kinoshita family)



シアトルの領事館で発行された三郎の旅券 (1907年4月18日) 英語版の発行は4月19日 (木下家所蔵) / Saburo's passport issued by the Japanese Consulate in Seattle (18 April 1907). The one in English was issued on 19 April. (Courtesy of the Kinoshita family)





平田アヤ（1914年頃）：神戸、和田写真館にて撮影
（木下家所蔵） / Aya Hirata (c1914) : Photographed
at Wada Photo Studio in Kobe. (Courtesy of the
Kinoshita family)

平田アヤ（1914年頃）：神戸、オダ写真館にて撮
影（木下家所蔵） / Aya Hirata (c1914) :
Photographed at Oda Photo Studio in Kobe.
(Courtesy of the Kinoshita family)





村松三郎・アヤ別府への新婚旅行
(1916年頃) : 別府温泉横山寛写真館
にて撮影 (木下家所蔵) /
Commemorative photo of Saburo
and Aya on their honeymoon
(c1916) : Photographed at H.
Yokoyama Photo Studio at Beppu
Onsen. (Courtesy of the Kinoshita family)

WA 18
CXE 5324

OF AUSTRALIA No. 061
1912 and Regulations. 13/1/1918

CERTIFICATE EXEMPTING FROM DICTATION TEST.



I, Henry Duncan Brown *Actg Collector of Customs*
for the State of Western Australia in the said Commonwealth
hereby certify that Marie Haru Muramatsu
hereinafter described, who is leaving the Commonwealth temporarily, will be exempted
from the provisions of paragraph (a) of Section 3 of the Act if he returns to the Com-
monwealth within a period of 60 days from this date.

Date 2.8.11.1918 *Actg Collector of Customs.*

DESCRIPTION.	
Nationality <u>Japanese</u>	Birthplace <u>Cossack</u>
Age <u>5 years</u>	Complexion <u>Yellow</u>
Height <u>3 ft 3 1/2 inches</u>	Hair <u>Black</u>
Build <u>Medium</u>	Eyes <u>Brown</u>
Particular marks _____	

(For impression of hand see back of this document.)

PHOTOGRAPHS.

Full Face:  Profile: 

Date of departure 4/11/19 Port of Embarkation Point Samson
Ship Ussulross Destination Japan
Date of return 11/12/20 Ship "Manilla"
Port Osaka, J.A.

Exempted for a period of five years from 28/11/1918 by letter dated 10/1/1923

15/1/23 - Certificate of Exemption

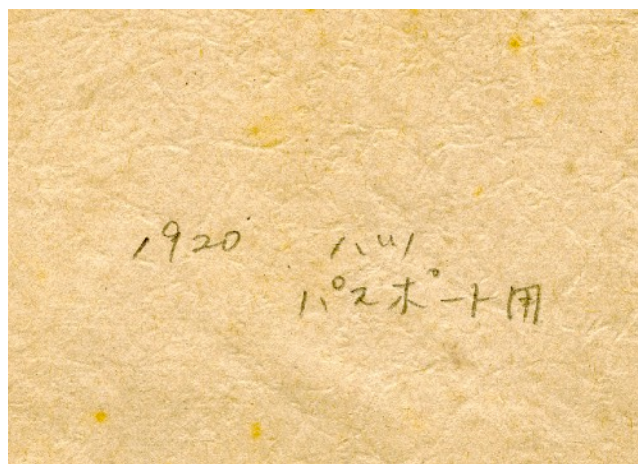
Actg Collector of Customs.

4.214211-1-1820

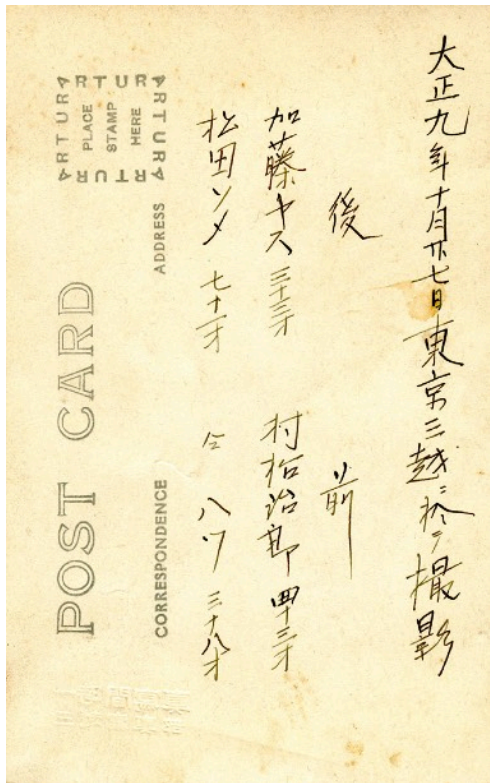
ハルの書き取り試験免除証明書：1919年1月4日ミンドルー号にてサムソン岬から出航と記載されているが、他の記録と照合すると1920年の誤記と考えられる。（豪国立公文書館：K1145, 1918/137） / Haru's Certificate Exempting From Dictation Test (CEDT) : It is recorded that Haru departed on the 'Minderoo' from Point Samson on 4 January 1919. However, according to our research, she most likely departed sometime in 1920. (National Archives of Australia: K1145, 1918/137)

National Archives of Australia

NAA: K1145, 1918/137



ハツの旅券用写真（1920年）：藤枝町上伝馬二見写真館にて撮影（今富家所蔵） / Passport photo of Hatsu(1920): Photographed at Futami Photo Studio, Kamidenma, Fujieda-cho. (Courtesy of the Imatomi family)



ハルの就学のため一時帰国の折の東京での記念（1920年10月27日）：東京三越写真館にて撮影、前列左からハツ（38歳）、治郎（43歳）；後列左から松田ソメ（71歳）、加藤ヤス（33歳）（今富家所蔵） / Photo taken when Jiro and Hatsu returned to Japan on the occasion of Haru entering school (27 October 1920) : Photographed at Mitsukoshi Photo Studio in Tokyo. Front row from left Hatsu (38 years old) and Jiro (43). Back row from left Some Matsuda (71) and Yasu Kato (33). (Courtesy of the Imatomi family)



I.YOSHIDA. 馬傳上町枝藤
館眞寫見二

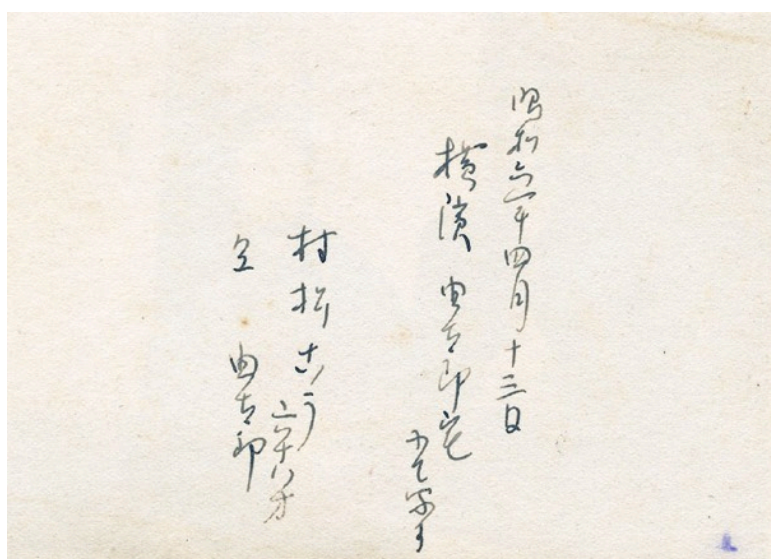
ハル、尋常小学校高学年の頃（1925年頃）：藤枝町上传馬二見写真館にて
撮影（今富家所蔵） / Haru in her primary school uniform (c 1925):
Photographed at Futami Photo Studio, Kamidenma, Fujieda-cho.
(Courtesy of the Imatomi family)



ハツとハル（1927年頃）：ハルが高等女学校入学時頃だと思われる。豪公文書館に残るハツの書き取り試験免除証明書によれば、ハツは1926年2月から1927年8月まで日本に滞在している。藤枝田辺写真にて撮影（今富家所蔵） / Hatsu and Haru (c 1927): Commemorative photo taken when Haru entered high school. According to the CEDT held in the National Archives of Australia, Hatsu stayed in Japan from February 1926 to August 1927. Photographed at Tanabe Photo Studio in Fujieda-cho. (Courtesy of the Imatomi family)

この写真でハツが身につけているピンは、今日まで今富家で大切に保管されている。（今富家所蔵） / The pin worn by Hatsu in the above photo has been kept in the Imatomi Family. (Courtesy of the Imatomi family)





村松由太郎（常太郎の長男）と村松コウ（常太郎の叔母）（1931年4月13日）：横浜の由太郎の自宅にて（今富家所蔵） / Yoshitaro Muramatsu (eldest son of Tsunetaro) and Koh Muramatsu (13 April 1931): Photographed at Yoshitaro's house in Yokohama. (Courtesy of the Imatomi family)



村松竹彦（久次郎の長男）と村松コウ
（1935年頃）：竹彦の七五三祝いと思われる。
（今富家所蔵） / Takehiko Muramatsu
and Koh (c 1935): Commemorative
photo celebrating Takehko reaching five
years of age. (Courtesy of the Imatomi family)



村松久次郎一家（1940年頃）：久次郎（常太郎次男）、コウ（久次郎の養母）、保昭（久次郎の次男）、竹彦（長男）、とき（妻）（今富家所蔵） / Hisajiro Muramatsu and his family (c1940): Hisajiro (Tsunetaro's second son), Koh (Hisajiro's adoptive mother), Yasuaki (Hisajiro's second son), Takehiko (eldest son), and Toki (wife). (Courtesy of the Imatomi family)



藤枝市藤枝、旧東海道筋の作太郎の実家があったあたり。治郎の「日記」にも記されている「エンシウヤ」「育伸社」「床清」といった屋号が残る。(2019年10月、松本博之、鎌田真弓撮影) / Fujieda, in the vicinity where Sakutarō's house once stood, along the old Tokaidō Road. 'Ensuya' 'Ikushinsha' and 'Tokosei' which were mentioned in Jirō's 'diary', are still in business. (Photo: Hiroyuki Matsumoto and Mayumi Kamada, October 2019)

2. 日本の故郷：神戸と藤枝（静岡）

治郎は、渡豪してから二度しか日本に戻っていない。しかしながら、日豪間の行き来や通信に時間がかかる当時であっても、日本の兄弟姉妹や縁者とは親密な関係を維持していた。治郎がオーストラリアに定着できたのも、日本の親族の支えがあったからだといえる。顧客との信頼関係を重視したビジネス・スタイルや被雇用者との関係に見られるように、治郎は日本の縁者に対しても細やかな配慮を示した。

神戸

村松作太郎は静岡県藤枝の出身だが、渡豪前は神戸を拠点としてビジネスを行っていたし、渡豪後も頻繁に日豪を行き来していた。妻サダとの間に常太郎（1869年生）、治郎（1878年生）、三郎（1884年生）、ウタ（1887年生）、ヤス（1888年生）の5人の子どもがあった。治郎は作太郎のオーストラリアでの遺産を相続した際に、日本の家族への遺産の分配と定期的な仕送りを約束している。常太郎の庇護と治郎からの多額の送金によるのだろう、三郎が20歳の時に妹二人と神戸の写真館で撮影した写真は、良家の子弟らしい品を漂わせている。また、木下家には1907年4月にシアトルの日本領事館が発行した三郎の旅券が残っており、三郎は22歳の時に渡米したことがわかる。

三郎は、コサックでの滞在期間以外は、神戸に住んでいた。1920年に治郎が一時帰国した折には、神戸市生田町の物件を購入したようで、「日記」の最後のページには敷地と建物の配置図が記されている。治郎が三郎のために購入したのか、あるいは三郎が依頼したのかは不明だが、後に三郎一家はその場所に居を構えた。

コサックから帰国後は、三郎は神戸で治郎のビジネスのサポートをしたようである。帳簿には治郎から三郎への電信の支払いや送金の記録が残る。上記の治郎が購入した物件は、敷地内に下宿屋が数件建っているものだったので、出稼ぎ労働者を斡旋する際に出立前の宿として使ったのかもしれない。病身の三郎は1942年2月に没したのだが、治郎・ハツ夫妻が抑留をされたというニュースに接し、最期まで彼らの身を案じた。神戸を見下ろす高台にある村松家の墓所には、作太郎とサダの戒名が刻まれた墓誌も建てられている。

村松常太郎

作太郎の死後の村松商会の立ち上げ以降は、常太郎は名前が社名には残るものの、オーストラリアでのビジネスに関与していない。それよりも常太郎は、神戸と藤枝にある両方の村松のイエを繋いだ要であった。父の作太郎は渡豪前は神戸を拠点としていたので、長男の常太郎は神戸に置いて、次男の治郎を藤枝に預けていたようである。作太郎の没後は、当時は長男が家督を継いだので、常太郎が藤枝の村松家の戸主となった。とはいえ実質的には、作太郎の妹のウタが結婚後も村松姓を名乗り、藤枝のイエを継承していた。

常太郎は、神戸に居住していた母のサダや三郎・ウタ・ヤスを庇護する役割を担った。コサッ

クから帰国後、1902年に結婚して神戸に居を構えた。1906年にはウタが結婚、1907年3月にはヤスが結婚してその年末には母のサダが没した。三郎も成人して高等教育を終えており、1907年の4月にはシアトルにいたので、母が鬼籍に入ったことで常太郎は神戸のイエに対する責任を果たし終えたといえる。その後一時期藤枝に住んだ後に1915年頃に巢鴨に転居、1921年に東京で没した。常太郎の次男の久次郎は、常太郎の叔母のコウが子どもに恵まれなかったため、コウ夫婦と養子縁組をして藤枝のイエを継承した。常太郎の写真は残っていないが、1931年に横浜の由太郎の自宅で撮影された由太郎とコウの写真と、コウと養子縁組をした久次郎の家族との写真が今富家に残されていた。

藤枝

1943年に収容所で没するまでの間に治郎が日本に帰国したのは、遺産相続の手続きのために一時帰国した1889年と、娘のハルが小学校に入学した1920年の二回だけである。母サダの没後(1907年)も、一人娘のハルの結婚式(1935年)でも帰国していない。個人で商店と真珠貝事業を営む治郎がオーストラリアを離れることは容易ではなかっただろうし、1930年代半ばとなると帰化英国臣民であったとしても、オーストラリアへの再入国が阻まれる可能性もあったかもしれない。

調査を始めた時点では、就学のために日本に戻ったハルの動向が不明だったのだが、今富家に残されていた藤枝の田辺写真館で撮影されたハツとハルの写真から、ハルが藤枝で養育されたことを確証した。静岡県立藤枝西高校(旧藤枝高等女学校)の同窓会名簿で、村松美子(ハルコ)の名前と4年間在籍していたことも確認できた。ハルが尋常小学校卒業の頃だと推測できる写真も残っている。書取り試験免除証明書(CEDT)¹の写真の幼子は強い意思を持った少女へと成長していた。

ハツは、ハルの小学校入学時と女学校の入学時にあわせて、少なくとも二度帰国している。当時の外地にある日本人の間では子弟の教育は日本で行うことが一般的だったし、安心して養育を任せられる親族があったとはいえ、6歳の一人娘を親元から離すことは心配であったであろう。しかもハルの就学まで藤枝の村松家と行き来がなかったハツにとっては、最初の訪問は敷居が高かったに違いない。1920年に帰国した際には、一時期はヤスの婚家に寄留したようである。ウタやヤスの存在はハツにとっても心強い支えとなっただろう。

治郎もコサックのビジネスを三郎に任せて、1920年4月から12月まで日本に一時帰国している。西オーストラリア州立図書館に残されている「日記」は、この帰国の時に書かれた治郎の覚書で、松本はこの「日記」を精査して、治郎の帰国の際の動向を読み解いている(松本 2020)。藤枝での挨拶回りは、ハルのためにも重要な務めだった。治郎は藤枝の近所の家々に土産物を配って挨拶をするとともに、叔母のコウともう一人の叔母にも遣い銭として30円を渡している。当時の30円といえば、大工の1ヶ月分の賃金にあたる。お返しの品々や饞別も届き、縁者や隣

¹ 西オーストラリア州立図書館に所蔵されている治郎の「日記」の記述や高等女学校の在籍記録などから、ハルのコサック出立日は、CEDTに記載されている1919年1月4日は誤記で、1920年1月4日だと思われる。

近所との親交を強めた。藤枝の村松家の近くの東海道筋には、土産物の贈答先として「日記」に記されていた屋号を掲げた店が今でも残っている。

さらに治郎は、ハツの実家の長崎を訪問したり、村松商会で働く乗組員の家族に言付けを届けたり、東京有明の海外興業本社を尋ねたりして、日本国内を精力的に動いている。ヤスの婚家の加藤家の本籍は東京で、治郎の上京の際に撮影したのであろう、三越写真館で撮影された治郎・ハツ夫妻とヤスの写真が残っている。

2. Homes in Japan: Kobe and Fujieda (Shizuoka)

Jiro went back to Japan only twice after settling in Australia. Even in an era when travel and communication between Australia and Japan took a great deal of time, Jiro kept a close relationship with his siblings and relatives in Japan. He was able to settle in Australia because of their support. Jiro attached great importance to paying meticulous attention to his Japanese relations. In the same manner that he developed a credible business relationship with his customers and maintained good relations with his employees.

Kobe

Sakutaro Muramatsu was born in Fujieda in Shizuoka, and he ran a business in Kobe before he left for Australia. He often travelled between Australia and Japan after starting a business in Cossack. Sakutaro had five children with his wife Sada: Tsunetaro (born in 1869), Jiro (1878), Saburo (1884), Uta (1887) and Yasu (1888). When Jiro inherited his father's Australian assets, he had promised to distribute the proceeds to his family relations in Japan as well as to send them regular remittances. The photograph of Saburo at the age of twenty, with his two younger sisters taken at a photo studio in Kobe shows him to be the product of a good family. The sisters were under the care and protection of Tsunetaro and probably received a large remittance from Jiro. Furthermore, Saburo's passport issued by the Japanese Consulate in Seattle in April 1907, indicates that Saburo went to the United States when he was twenty-two years old.

Saburo lived in Kobe when he was not in Cossack. When Jiro returned temporarily to Japan in 1920, he bought an estate in Ikuta-cho in Kobe, and the last page of his 'diary' shows a plan of the site and the building layout. It is not known whether Jiro bought it for Saburo or Saburo had asked Jiro to purchase it, but Saburo's family later settled there after returning to Japan.

After returning to Kobe from Cossack, Saburo helped Jiro's business from Kobe. The account books of J & T Muramats, record payments made for wires from Saburo to Jiro and remittances from Jiro to Saburo. The property that Jiro bought for Saburo in Kobe included a few boarding houses, which might have been used as accommodation for the contracted indentured workers up until they departed for Australia. When he received the news that Jiro and Hatsu had been interned, Saburo, who was in poor health at the time, had great concerns about their welfare until his death in February 1942. At the gravesite of the Muramatsu family located on a hill overlooking Kobe, the headstone is inscribed with

Sakutaro and Sada's posthumous Buddhist names.

Tsunetaro Muramatsu

Since the establishment of J & T Muramatsu after Sakutaro's death, Tsunetaro had not been involved in the business in Australia, although his name remained part of the company name. Tsunetaro was an important link between the Muramatsu families in Kobe and Fujieda.

His father Sakutaro was based in Kobe before moving to Australia, so Sakutaro left his eldest son, Tsunetaro, in Kobe and his second son, Jiro, in Fujieda. After Sakutaro's death, Tsunetaro became the head of the Muramatsu family in Fujieda, since at that time, the family was headed by the eldest son. However, in practice, Sakutaro's younger sister, Koh, took the surname Muramatsu upon her marriage and succeeded as head of the family in Fujieda.

Tsunetaro took on the responsibility of looking after his mother Sada, and his siblings, Saburo, Uta, and Yasu, who all resided in Kobe. After he came back from Cossack, he married and settled in Kobe. His younger sister Uta married in 1906. Yasu was married in 1907, and his mother Sada passed away at the end of that year. By this time, Saburo had completed his higher education and had come of age, and was in Seattle in March 1907. Tsunetaro had fulfilled his responsibilities to the family in Kobe upon his mother's death. He and his family lived for a time in Fujieda, then relocated to Sugamo around 1915. Tsunetaro died in Tokyo in 1921. His second son, Hisajiro, was adopted by Tsunetaro's aunt, Koh, who did not have any children, in order to continue the family line in Fujieda. Although no photographs of Tsunetaro were found, there are photographs of Koh and Yoshitaro, Tsunetaro's eldest son, and Koh, Hisajiro, and his family, held by the Imatomi family.

Fujieda

Jiro went back to Japan only twice before he died in the internment camp: once in 1889 for the processing of his inheritance; and again in 1920 on the occasion of his daughter, Haru's, admission to primary school. He did not return for his mother's funeral in 1907 or for Haru's wedding in 1935. It was not easy for Jiro, who owned and managed a store and a pearling business, to leave Australia very often. Furthermore, by the mid-1930s, he might not have been allowed to reenter Australia, although he was a naturalised British subject.

At the beginning of this project, it was not known where Haru started school and grew up. A photograph of Hatsu and Haru in the possession of the Imatomi family, taken at Tanabe Photo Studio in Fujieda, confirmed that Haru grew up in Fujieda. Her name was also listed

in the alumni list of Fujieda Nishi High School (formerly Fujieda Women's High School), and it confirmed that she was enrolled there for four years. There is a photograph of Haru taken when she was in primary school held by the Imatomi family as well. The photo of the little girl on the CEDT (Certificate of Exemption of Dictation Test)¹ became grown up.

Hatsu went back to Japan at least twice; on the occasions when Haru was admitted to ~~the~~ primary school in 1920 and to high school in 1927. Although it was common at the time for Japanese overseas to send their children back to Japan for their education, and Jiro had relatives who could be trusted with the care of Haru, they must have worried about her being away from her parents at the age of six. Furthermore, for Hatsu, it was the first time to meet the family in Fujieda, so the visit might have been uneasy. When Hatsu and Haru returned to Japan in 1920, it appears that they temporarily stayed with Yasu's in-laws. Jiro's sisters, Uta and Yasu, provided reassuring support for Hatsu.

Jiro, too, returned to Japan from April to December 1920, relying on Saburo to manage the business in Cossack. Jiro's 'diary', which is preserved in the State Library of Western Australia, provides a written account of his time in Japan. A close examination of the diary reveals Jiro's movements while he was there (Matsumoto 2020). Making the rounds of his neighbourhood in Fujieda was important for Haru's sake. He gave Koh and another aunt 'pocket money' of thirty yen each, which was the equivalent of one month's wages for a carpenter at the time, and visited neighbours with souvenirs. Return and farewell gifts were presented to Jiro, and in this way he established close relations with the neighbours and his relatives. The neighborhood stores mentioned in his 'diary' are still in business to this day in Fujieda along the Tokaido Road.

Jiro also actively travelled while in Japan. He called on Hatsu's relatives in Nagasaki, delivered messages and gifts to the families of the crew working in his company, and visited the headquarters of *Kaigai Kogyo* in Ariake, Tokyo. There is a photograph of Jiro, Hatsu and Yasu taken at the Mitsukoshi Photo Studio in Tokyo, as Yasu's in-laws were in Tokyo.

¹ According to Jiro's 'diary' and the school records in Japan, Haru departed Cossack on 4 January 1920. Therefore, it appears that the date of 4 January 1919 recorded on the CEDT is in error.

3. ダーウィン Darwin



治郎とハツ（1931年10月24日）：ダーウィンの自宅の正面玄関前。（今富家所蔵）
Jiro and Hatsu (24 Oct. 1931): In front of the main entrance of their home
in Darwin. (Courtesy of the Kinoshita Family)



ダーウィンの治郎の居宅（1938年10月24日）：正面玄関前の庭（木下家所蔵） / Home of Jiro and Hatsu in Darwin (24 Oct. 1938): Garden in front of the main entrance. (Courtesy of the Kinoshita Family)



ダーウィンの居宅（1938年
10月24）；側出入口（木下家
所蔵） / Side entrance of
the house in Darwin (24
Oct. 1938) (Courtesy of the
Kinoshita Family)

24/10/38 Sid. Entrance J.M's Residence Darwin.



ダーウィンの居宅（1938年
10月24）；正面ベランダ
（木下家所蔵） / Front
verandah of the house in
Darwin (24 Oct. 1938)
(Courtesy of the Kinoshita
Family)

Front Verandah Darwin. 24/10/38.



ダーウィンの居宅（1938年
10月24）；サイドベランダ
（木下家所蔵） / Side verandah
of the house in Darwin (24
Oct. 1938) (Courtesy of the
Kinoshita Family)

Side Verandah Darwin. 24/10/38.



ダーウィン、キャバナー通り
 (1930年代) ; 治郎の居宅
 はキャバナー通り沿いに
 あった。(木下家所蔵) /
 Cavenagh Street, Darwin
 (1930s): Jiro's house was
 located on this street.
 (Courtesy of the Kinoshita
 Family)

治郎は三郎にダーウィンの様子
 を知らせたのであろう。多くの
 ダーウィンの写真が木下家に残
 されている。ダーウィン、スミ
 ス通り (1930年代) (木下家所
 蔵) / Smith Street, Darwin
 (1930s): Jiro must have let
 Saburo how Darwin looked.
 Many photos of Darwin
 have been kept by the
 Kinoshita family. (Courtesy of
 the Kinoshita Family)



ダーウィン、スミス通り
 (1930年代) (木下家所蔵) /
 Smith Street, Darwin
 (1930s) (Courtesy of the
 Kinoshita Family)





ダーウィン、スミス通り
(1930年代) (木下家所蔵) /
Smith Street, Darwin
(1930s) (Courtesy of the
Kinoshita Family)



ダーウィン、スミス通り
(1930年代) (木下家所蔵) /
Smith Street, Darwin
(1930s) (Courtesy of the
Kinoshita Family)

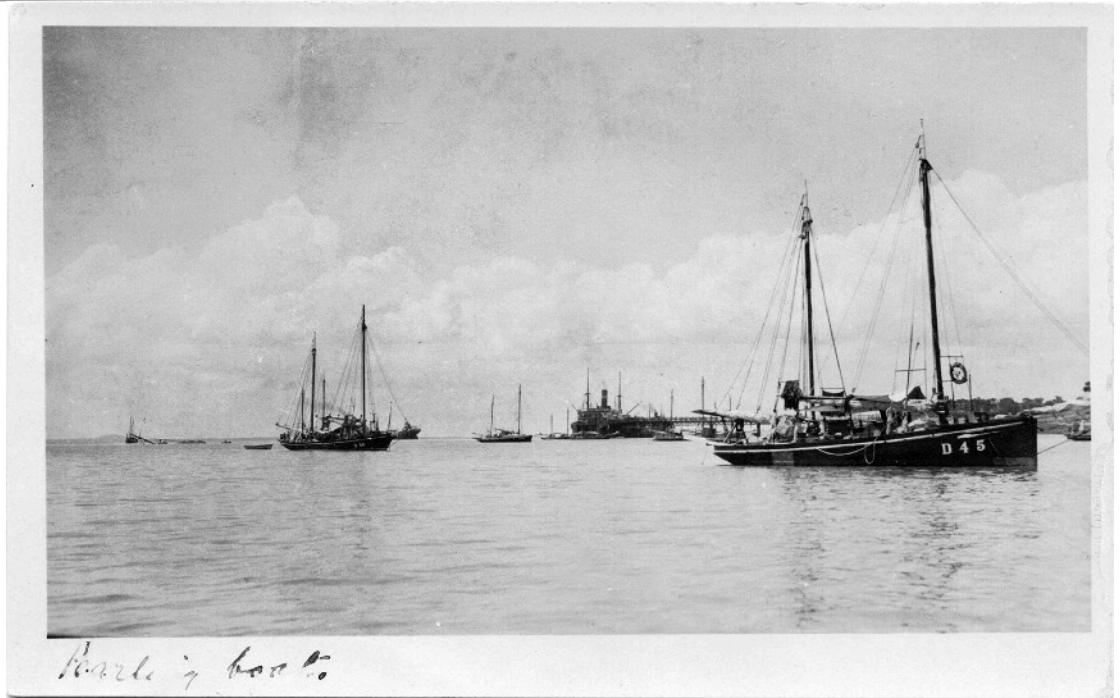


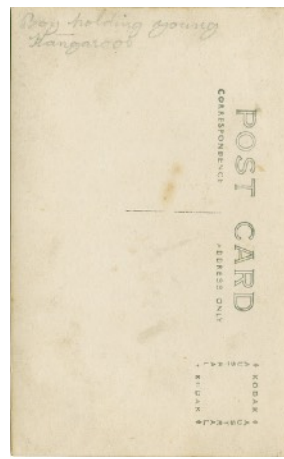
ダーウィン、スミス通り
(1930年代) (木下家所蔵) /
Smith Street, Darwin
(1930s) (Courtesy of the
Kinoshita Family)



ダーウィン、棧橋 (1930年代) (木下家所蔵) / Darwin Jetty (1930s) (Courtesy of the Kinoshita Family)

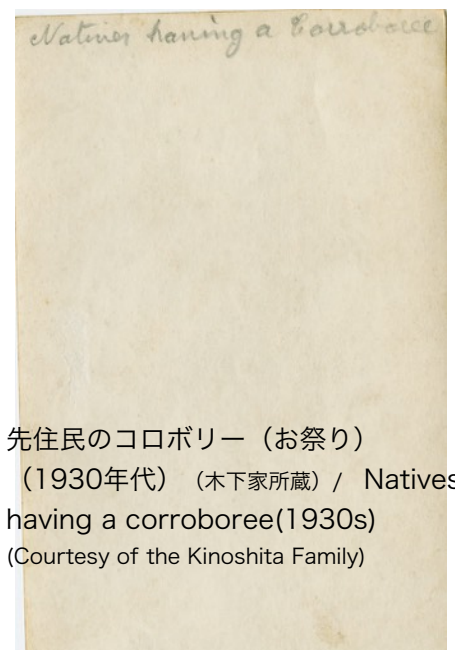
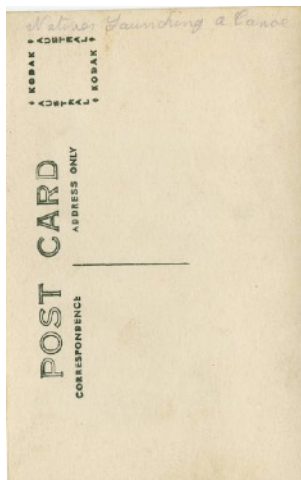
採貝船 (1930年代) (木下家所蔵) / Pearlina boats (1930s) (Courtesy of the Kinoshita Family)





カンガルーを抱く男の子
(1930年代) (木下家所蔵) /
Boy holding young
kangaroos (1930s) (Courtesy
of the Kinoshita Family)

先住民のカヌーの漕ぎ出し (1930年
代) (木下家所蔵) / Natives launching
a canoe (1930s) (Courtesy of the
Kinoshita Family)



先住民のコロボリー (お祭り)
(1930年代) (木下家所蔵) / Natives
having a corroboree(1930s)
(Courtesy of the Kinoshita Family)



村松居宅跡地：384 キャバナー通り、ダーウィン（2022年9月村上雄一撮影） / Site where Muramats' house once stood: 384 Cavenagh St, Darwin (Photo: Yuichi Murakami, September 2022)



日本人会跡地：283 ウッズ通り ダーウィン、村松所有地（2022年9月村上雄一撮影） / Site where the Japanese Association once stood: 283 Woods St, Darwin. The lot was owned by Muramats. (Photo: Yuichi Murakami, September 2022)

3. ダーウィン

真珠貝事業をさらに拡大するために、治郎は 1920 年代後半にダーウィンへの進出を計画した。進出にあわせて新たに 2 隻の船を購入し、さらに 7 隻の船の購入契約を結んだのだが、連邦政府が採貝船の外国人乗組員の雇用を認可しなかったために、その購入を諦めざるを得なかった。「アジア人」である治郎の事業拡大を警戒した連邦政府が、連邦に管轄権がある外国人の雇用認可制度を使って、1912 年以前に取得していたライセンスの 10 隻を超えて採貝船を所有することを認めなかったのである。結局、村松商会のマネージャーであった E. マカイ (McKay) の船とともに採貝船 5 隻をコサックからダーウィンに移籍した。

治郎・ハツ夫妻がダーウィンに転居したもう一つの理由は、女学校を卒業するハルをオーストラリアに迎えるためだったと考えられる。高等女学校を卒業するハルがコサックを生活の場とすることは到底考えられない。しかも 6 歳でオーストラリアを離れて 11 年ぶりである。当時の新聞に掲載された乗船者記録を見ると、ハツはシンガポールまで出迎えに行ったようだ。ハルは 1 年余りダーウィンで過ごした後、シドニーの寄宿学校に入学した。

治郎はダーウィンの様子を三郎に知らせたのであろう、キャナバー通りの自宅の写真と、当時のダーウィンのメインストリートの写真など、たくさんの写真が木下家に残されていた。1931 年 10 月 24 日と記されたダーウィン自宅前の治郎とハツの写真からは、二人が安定した生活を楽しんでいる様子が見て取れる。自宅は熱帯気候のオーストラリア北部に特徴的なベランダに囲まれた高床式の住宅で、籐製家具や鉢植えの観葉植物や壁に飾られた絵画など、現地の富裕層としての暮らしぶりがうかがえる。

村松治郎の名前は、蘭領東インド (現インドネシア) やオーストラリアを訪れる日本人には良く知られていた。治郎もダーウィンを訪れた日本人を歓待した。文部省航海練習船海王丸が 1936 年にダーウィンに入港した折には、船の乗組員らに真珠玉や真珠貝を贈るとともに、2 トン以上もある屠殺したばかりの牛を提供している。また、日本漁船によるアラフラ海出漁の端緒を開いた丹下福太郎が、1931 年の最初の出漁でコンプレッサーが故障して困っていた時には、ダーウィンに居た治郎が英国製ヘンケ社のコンプレッサーを貸与して助けた。さらに日本漁船がアーネムランド沖でオーストラリア当局に拿捕された折にも、日本人会会長のピーター・ナカシバとともに、日本人乗組員の釈放と船の返還のために尽力した。

太平洋戦争勃発とともに治郎夫妻は拘束され、ヴィクトリア州のタツラ収容所に送られた。日本軍によるダーウィン空襲で、ダーウィンにあった治郎の船や自宅は破壊され、コサックにあった船も接収された。治郎は 1943 年 1 月 7 日、収容所近くのワランガ病院で没した。

3. Darwin

In the late 1920s, Jiro planned to move to Darwin to expand his pearling business. He purchased two luggers and entered into a contract to purchase an additional seven. However, because the federal government did not grant permits for employing foreigners as crew, he had to give up the contracts to increase the number of boats. The federal government was concerned about Jiro's business expansion, as he was 'Asian', and applied its control over immigration and employment of foreigners to prevent Jiro from owning more than ten boats, for which he was given licenses before 1912. In the end, Jiro decided to move five luggers to Darwin including those of E. McKay, who was a manager of J & T Muramats.

Another reason why Jiro and Hatsu decided to move to Darwin had to do with the return of Haru to Australia, who was finishing high school in Japan. It was unrealistic to expect that Haru would live in Cossack after graduating high school. She had left Australia at the age of six, coming back after eleven years. According to a ship passenger record printed in the newspaper, Hatsu went to Singapore to meet Haru. Haru stayed in Darwin for over a year and then went to Sydney to enter a boarding school.

Jiro kept Saburo informed about his life and situation in Darwin. There are many photographs of Darwin in the possession of the Kinoshita family, such as those of the Muromats home on Cavenagh Street as well as views of the main streets in Darwin. In a photograph of Jiro and Hatsu taken in front of their home, dated 24 October 1931, they appear to be contented with life in Darwin. Their house was built on stilts surrounded by verandas, which was a characteristic feature of domestic architecture in the tropical climate of northern Australia, and furnished with wicker furniture, potted houseplants, and paintings on the walls. It indicates that they were a wealthy household. The name of Jiro Muramats was well known to Japanese who visited the Dutch East Indies and Australia. Jiro welcomed Japanese visitors to Darwin. When the *Kaio-Maru*, a navigation training ship of the Japanese Ministry of Education, entered Darwin Port in 1936, he presented the crew and staff with pearls, pearl-shells and one head of beef weighing more than two tons. When Fukutaro Tange, the first Japanese to engage in pearl-shell fishing in the Arafura Sea, experienced trouble with a broken air compressor, Jiro lent him a compressor made in England by Henke. When Japanese fishing boats were captured off Arnhem Land, he worked with Peter Nakashiba, president of the Japanese Association of Darwin, for the crew's release and return of the ships.

With the outbreak of the Pacific War, Jiro and Hatsu were taken into confinement in Darwin and transported by land to Tatura Internment Camp in Victoria. Their house and boats were destroyed by the bombing by the Japanese, and the boats in Cossack were requisitioned. Jiro died on 7 January 1943 in Waranga Hospital near the camp.

3. 今富 美子

Haruko IMATOMI



今富正平とハルの結婚式（1935年12月）：村松コウ（前列右端）、島ウタ（前列右から二番目）、加藤ヤス（後列右から二番目）、ヤスの夫加藤氏（後列右端）が参列している。（今富家所蔵） / Memorial photo of Shohei Imatomi and Haru's wedding (December 1935): Koh Muramatsu (front row right), Uta Shima (front row, second from right), Yasu Kato (back row, second from right), and Mr Kato (back row right). (Courtesy of the Imatomi family)



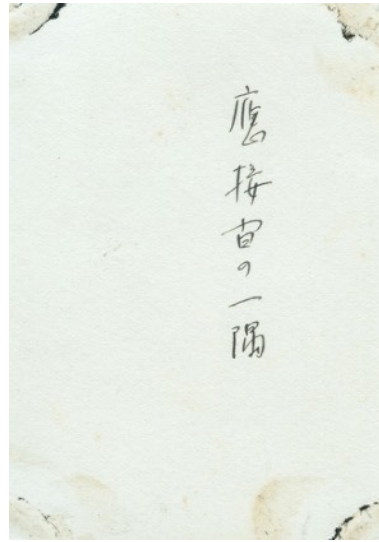
家の前が以前は唯の廣場でしたが
 此頃奇麗な公園になつて来た。
 まだ植えた木が小さいので見映えがしまえ
 が向後柳木や杉の木が延びると立派に
 なると思ひます。
 一八九八・九・一〇一

ブラジル、サンパウロのハル（1938年9月10日）
 日：夫の正平が近況を伝える裏書がある。（今
 富家所蔵） / Haru in Sao Paulo, Brazil (10
 September 1938): Haru's husband,
 Shohei, updated their news on back of
 the photos. (Courtesy of the Imatomi family)

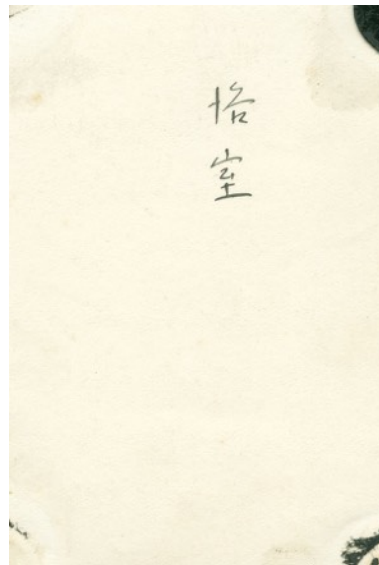


ハルと正平、ブラジル、サンパ
 ウロの自宅前（1938年頃）（今
 富家所蔵） / Haru and Shohei
 with the company car in
 front of their home in Sao
 Paulo, Brazil. (c 1938)
 (Courtesy of the Imatomi family)

社用自働車
 僕自身で運転
 丁も



ブラジル、サンパウロの自宅応接室のハル
(1938年頃) (今富家所蔵) / Haru in the
drawing room of their home, in Sao
Paulo, Brazil. (c 1938) (Courtesy of the
Imatomi family)

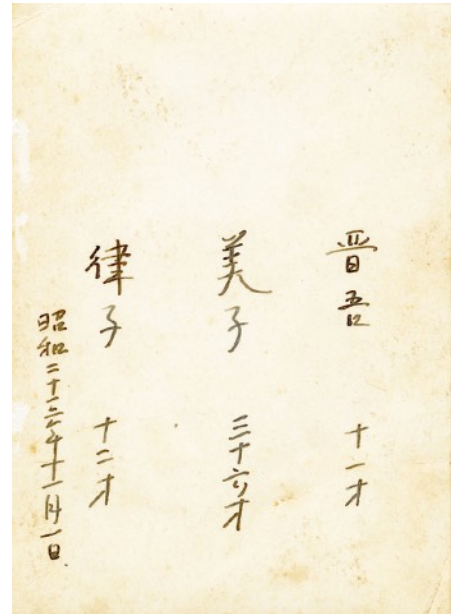


ブラジル、サンパウロの自宅浴室のハル
(1938年頃) (今富家所蔵) / Haru in the
bathroom of their home, in Sao Paulo,
Brazil. (c 1938) (Courtesy of the Imatomi
family)



一九三八年九月七日

ブラジル、サンパウロの自宅（1938年9月7日）：ハル、正平、ハルに抱かれた晋吾、律子（今富家所蔵） / Haru and Shohei, with their children (Shingo in Haru's arms, and Ritsuko), in Sao Paulo, Brazil. (c 1938) (Courtesy of the Imatomi family)



晋吾（11歳）、ハル（37歳）、律子（12歳）
 （1948年11月1日）（今富家所蔵） / From left to
 right: Shingo (11 year old), Haru (36), and
 Ritsuko (12) (1 November 1948) (Courtesy of
 the Imatomi family)



ハル（撮影年不明）：ハルはタイピストとして商社に勤め、勤務先の社員に英語も教えていた。
 （今富家所蔵） / Haru and her friends (date unknown): Haru worked for a trading
 company as a typist, and also taught English there. (Courtesy of the Imatomi family)



ハツの墓前追悼ミサ（1959年）：左から加藤ヤス、島ウタ、ハル、司祭、晋吾、律子（今富家所蔵） / Unveiling of Hatsu's headstone (1959): From left Yasu Kato, Uta Shima, Haru, priest, Shingo, Ritsuko. (Courtesy of the Imatomi family)

墓石にはHATSU MURAMATSとともにJIRO MURAMATSと刻まれている。
（今富家所蔵） / The names, HATSU MURAMATS and JIRO MURAMATS are inscribed on Hatsu's gravestone. (Courtesy of the Imatomi family)

4. ^{いまとみ、はるこ}今富美子

1930年12月にオーストラリアに戻ったハルは、1年ほどダーウィンで過ごした後、1932年にシドニーのローズベイ修道院の寄宿学校に入学した。日本への帰国の経緯はわからないのだが、帰国後の1935年12月に今富正平と結婚した。結婚式の写真には、大叔母の村松コウや叔母のウタとヤスの姿があるものの、治郎とハツの姿は無い。夫の正平は下関出身で三菱系の東山農事に勤務していて、新婚まもなくハルを伴ってブラジルのサンパウロに赴任、二人の子どももサンパウロで生まれた。サンパウロ時代の写真のハルはとても幸せそうである。1940年頃に日本に帰国、その後正平は家族を日本に残してビルマに赴任、太平洋戦争中に現地召集となり1945年7月にビルマ・ペゲー県で病死している。

戦後の混乱期に二人の子どもを一人で育てたハルの苦労は想像に難くない。正平の実家に身を寄せることもなく、英語力を活かして商社に勤務し、勤務先の社員に英語も教えていた。母親のハツは1957年に帰国、鬼籍に入るまでの2年間をハルの元で過ごした。

横浜のハルの元に身を寄せたハツは、二人の孫に慕われて穏やかな日々を暮らしたようである。治郎はタツラ収容所内の墓地に埋葬され、その後カウラ日本人戦争墓地に改葬されたが、横浜のハツの墓石にはHATSU MURAMATSと並んでJIRO MURAMATSの名前も刻まれている。治郎もハツも敬虔なカトリック教徒であった。

ハルは俳人の勝又一透に師事し、1985年に句集を上梓している。母や夫や子どもたちのことを詠んだ句も多く含まれる。

決断を迫られている薔薇のまえ
冬すみれ親子のえにし薄かりし
夫恋ひ我が誕生日巴里祭
木瓜の蕾まだ固かりし母の墓
紫は亡き母のいろ菫つむ

句集は「亡き母に捧ぐ」と結ばれている。

4. Haruko IMATOMI

After Haru returned to Australia in December 1930, she spent about a year in Darwin, and in 1932, enrolled at the Rosebay Convent, a boarding school in Sydney. It is not known what led to her decision to go back to Japan, where she married Syohei Imatomi in December 1935. In the photographs of her wedding, we find images of her great aunt Koh and aunts, Uta and Yasu, but not Jiro or Hatsu. Haru's husband, Shyohei, was from Shimonoseki, and worked for *Tozanshyoji*, part of the Mitsubishi conglomerate. Soon after their marriage, he was posted to Sao Paulo, Brazil. Their two children were born in Sao Paulo. Haru looks to be very happy in the photographs taken in Sao Paulo. They returned to Japan around 1940, and Shyohei went to Burma, leaving his family behind in Japan. He was drafted there during the Pacific War and died of illness in Pegu, Burma in July 1945.

It is not difficult to imagine the hardship experienced by Haru after having been left with two children in the chaotic post-war period. Without depending on Shyohei's family, Haru worked for a trading company utilising her skills in English, and sometimes taught English at the company. Haru's mother Hatsu returned to Japan in 1957 and stayed with Haru until her death two years later.

Hatsu, who lived with Haru, enjoyed a peaceful existence with two grandchildren who adored her. Jiro was initially buried in the cemetery at the Tatura internment camp and later reburied in the Cowra Japanese War Cemetery. 'JIRO MURAMATS' was inscribed next to HATSU MURAMATS on Hatsu's headstone in Yokohama. Both Jiro and Hatsu were devout Catholics.

Haru studied *haiku* under Katsumata Ittoh (勝又一透) and published a collection of her *haiku* in 1985. It includes many *haiku* about her mother, husband and children.

In front of the roses, the decision has been made
Early violets arrive with the memory of fragile relations with the mother
Longing my husband on Bastille Day, my birthday
At the mother's grave, quince blossoms haven't yet arrived
Picking violets, the colour of my late mother

The collection of *haiku* was dedicated to her late mother.

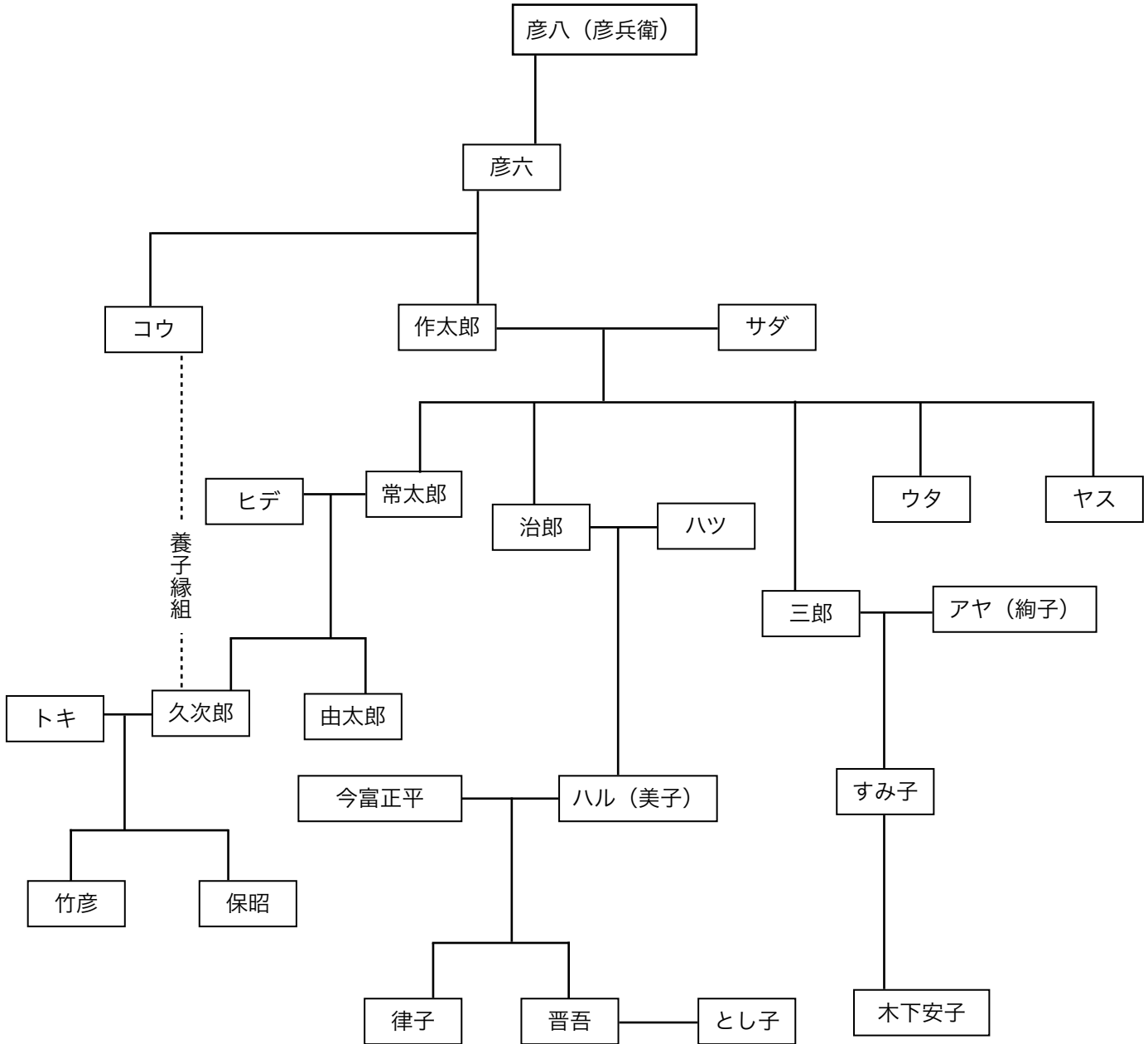
III

付録

Appendix

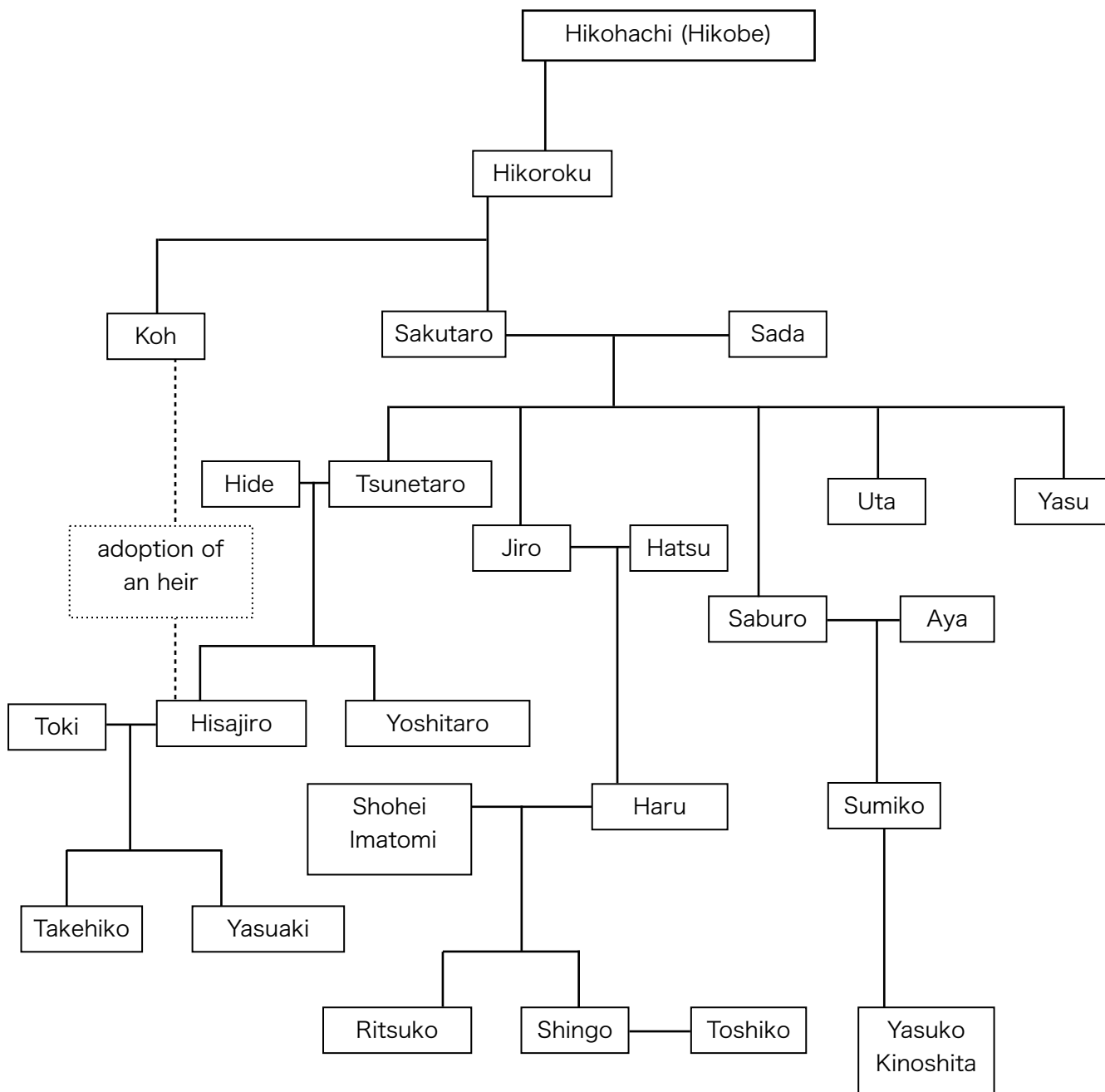
村松家 系図

* 本書で言及されている人物のみを記す



Muramatsu Family Genealogy

* Only persons mentioned in this booklet are listed.



地図 / Maps

Map1 オーストラリア西部 / Western Australia



以下のサイトをもとに筆者作成 / The maps are created by the author based on the data: 'Generalised Regions of Western Australia, Digital Library', Department of Primary Industries and Regional Development (<https://library.dpird.wa.gov.au>), and 'Natural Earth' (<https://>

Map 2 コサック周辺 / Cossack and vicinity



出典 / Source: 'ArcGIS' (<https://www.arcgis.com/home/webmap/viewer.html>)

Map 3 日本 / Japan



あとがき

2017年9月にコサックを訪ねた折に田村恵子、村上雄一、鎌田真弓がスタートさせた「村松治郎ミニプロジェクト」は、当時の共同研究のメンバー（松本博之、永田由利子）が加わって、日豪の公文書館・図書館に残る史料を網羅して村松治郎と村松商会の足跡を辿り、村松商会のビジネスの詳細を明らかにするという大きなプロジェクトに発展した。中でも、今富家に保存されていた村松商会の英語の帳簿の「発見」は特筆に値する。2500ページを超える村松商会のコサックでのビジネスを記録したその帳簿は、オーストラリアの地域経済史や移民史の研究にとっても貴重な史料である。デジタル化の後に、今富家の許諾を得て西オーストラリア州立図書館に寄贈され、正式に保管・公開されることになった。筆者の手元に預かっていた帳簿が、州立図書館が手配した運輸会社のトラックに積み込まれて出発した時は、知己の帰郷を見送るような気持ちであった。

村松作太郎・治郎・三郎の係累の方々にお会いすることがなければ、本プロジェクトは「ミニプロジェクト」のままで終わったであろう。表紙に掲載した写真をきっかけとして、私たちに村松家への扉を開いてくださった木下安子さん、作太郎の故郷でビジネスを継承されてきた村松加寿子さん・村松弘美さん、ハツさん・ハルさんの思い出と記録を次世代へと引き継いでおられる中山とし子さん、そして神戸・藤枝・横浜で私たちを暖かく迎えてくださったそのご家族の皆様は心より感謝申し上げます。

村松治郎の私信がほとんど残っていない中で、治郎夫妻や三郎夫妻や親族の数々の写真は、治郎の人となりをも具体化し、筆者の研究を持続させる原動力となった。例えば、1904年に神戸の小島写真館で撮影された三郎・ウタ・ヤスの写真からは、父親亡き後の弟妹の後ろ盾だったであろう治郎の存在を窺うことができる。1920年の治郎の日本への出立の際にローバンで撮影された集合写真は、その一時帰国が大きなイベントであったことを物語る。さらに、今富家に残されていたハルの写真は治郎・ハツ夫妻の手元にもあったはずで、夫妻はオーストラリアで幾度となく眺めたのではないかと想像する。

7年間にわたる共同研究で、村松治郎と村松商会の活動の多くを明らかにすることができたものの、ダーウィンでのビジネスに関する研究成果は未発表である。また、村松商会の研究を通して、オーストラリア北西部の経済活動に貢献した日本人商人のネットワークも明らかになりつつある。本書が、19世紀末から20世紀初頭にかけてオーストラリアに渡った、日本人商人や出稼ぎ労働者の研究の一助となれば幸いである。

本書は日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（C）「国境を越えた地縁社会—豪州出稼ぎ労働者を繋いだ日本人商店主の現地適応戦術」（研究代表者：鎌田真弓 課題番号 20K12380 2020-2024年度）の研究成果の一部である。

Postscript

When the research team of Keiko Tamura, Yuichi Murakami, and Mayumi Kamada visited Cossack in September 2017, a ‘mini Muramats project’ was proposed to learn more about Jiro Muramats. With the addition of another two members to the research team at the time, Hiroyuki Matsumoto and Yuriko Nagata, it became possible to examine documents housed both in Australian and Japanese archives and libraries, thereby expanding the project. The ‘mini-project’ grew into a larger project, tracing the life history of Jiro Muramats and his family, as well as uncovering the details of the business of J & T Muramats.

Among all of the records uncovered, the ‘discovery’ of the J & T Muramats account books, which were kept by the Imatomi family in Japan, is worth mentioning. Its more than 2500 pages documenting in English the operations of the J & T Muramats business in Cossack were invaluable for the study of the history of the regional economy and Asian migration in northwest Australia. After digitization, the account books were donated to the State Library of Western Australia, with the consent of the Imatomi family, for proper storage and public access. When the account books in the author’s care were loaded onto the truck of the transportation company arranged by the State Library and departed, it was like bidding farewell to an acquaintance who was going home.

Without being able to meet the family relations of Jiro Muramats, the project would have remained a ‘mini-project’. The photograph on the front cover of this publication served as the starting point. We would like to express our gratitude to Mrs. Yasuko Kinoshita, whose mother appears on the right side of the photo, who provided us with an introduction to the Muramatsu and Imatomi families; to Mrs. Kazuko Muramatsu and Hiromi Muramatsu who succeeded to the business in the hometown of Sakutaro Muramatsu; to Mrs. Toshiko Nakayama who has preserved the memories and records of Hatsu and Haru Muramats for future generations; and to all of the family relations in Kobe, Fujieda and Yokohama who welcomed us and provided assistance.

While there were few of Jiro’s private letters to be found, the existing photos taken of Mr. and Mrs. Jiro Muramats, and Mr. and Mrs. Saburo Muramatsu and their relatives captured the embodiment of Jiro’s character and provided the driving force for the research. The photo of Saburo, Uta and Yasu taken at Kojima Photo Studio in Kobe in 1904 suggests Jiro’s financial support to his younger siblings after their father’s death. The group photo taken in Roebourne in 1920 on the occasion of Jiro’s departure for Japan indicates that his return

home was regarded as a memorable event. Furthermore, the copies of the photos of Haru kept in the Imatomi family must have been in the hands of Jiro and Hatsu, and one could imagine that they often viewed these photographs.

Seven years of research revealed much about Jiro Muramats and J & T Muramats, but an account of his business in Darwin has not yet been published. The networks of Japanese merchants who took part in the economic activities in northwest Australia have also been gradually brought to light. We hope that our research findings will contribute to further research on Japanese merchants and indentured labourers who worked in Australia from the end of the 19th to the beginning of the 20th century.

This publication is part of the research results of a JSPS Grant-in-Aid for Scientific Research (C), 'Local Japanese community beyond the national border: Japanese storekeepers and their adaptive strategies of organizing Japanese indentured labourers in Australia' (Principal investigator: Mayumi Kamada, Project number: 20K12380, 2020-2024).

村松治郎とそのファミリー：日豪を繋いだ家族の肖像
デジタル版
編集・発行者 鎌田真弓
愛知県日進市米野木町三ヶ峯4-4 名古屋商科大学
2024年1月31日発行

Jiro Muramats and his Family: Portraits of the Family Connecting Japan and Australia
Digital Edition
Kamada, Mayumi, editor and publisher
Nagoya University of Commerce and Business
4-4 Sagamine, Komenokicho, Nisshin, Aichi, Japan
31 January 2024

[裏表紙写真 / back cover photograph]
コサックの自宅前のアヤ、スミコ、三郎、治郎 (1919年)
(木下家所蔵) / Aya, Sumiko, Saburo and Jiro, in front
of their house in Cossack (1919) (Courtesy of the
Kinoshita family)

